魔術師の細々話

紅炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔術師の細々話

【Ｎコード】
Ｎ５４２８Ｒ

【作者名】
紅炎

【あらすじ】
魔術師の綾野誠は名無しの山に住んでいる人間。
彼の周りにはたまに事件が起こる。自分で起こしたり、事件のほうからやって来たり。そんな細々とした事件をここに記す。

不定期更新。脳内設定アリ。一応シリーズになりそう。質問があったらガンガンしてください。
これは「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」の二次創作です。

変更履歴の掲示板※あれ？っと思ったら※

このページでは、『魔術師の細々話』に加筆・修正をいれた場合にその内容を記載していきます。また、これ（４／１）以前に変更した分については記載いたしませんので、ご了承ください。以下、変更履歴です。

４／１

『魔術師が人里にて？・？』『魔術師が紅魔館にて？～？』に段落をつけました。

『魔術師が人里にて？』「～まだ人間だから～」→「～一応人間だから～」に変更。

『魔術師が人里にて？』「己との内紛をすること～」→「己同士が内紛すること～」に変更。

『魔術師が紅魔館にて？』「～かなり大きい湖だって～」→「～大きい湖だって～」に変更。「ごう」→「ごう！」に変更。

『魔術師が紅魔館にて？』「～いつの間にいたのだろうか。」→「いつの間にいたのだろうか。心臓に悪い。」を追加。

「～二つは別のもののようだ。」→「～二つは別のものだ。」に変更。

「こめかみ辺りからは黒い羽が一対生えている。」→「こめかみと背中辺りからは黒い羽が一対ずつ生えている。」に変更。

『魔術師が紅魔館にて？』「＊＊＊＊＊」→「＊＊＊」に変更。

４／４
『魔術師が人里にて？・？』『魔術師が紅魔館にて？』我が独学の数字を漢数字に変更。
タグに「Ｒ１５」「残酷な描写あり」「原作少しブレイク」を追加。

４／１９
『魔術師が紅魔館にて？』『煉獄の花』→『煉獄の華』に修正。

４／３０
『魔術師が紅魔館にて？』「響いて明るい雰囲気だったお屋敷は」
→「響いて明るかったお屋敷は」に変更。

５／１
『魔術師が紅魔館にて？』「腕字体を吹き飛ばすなら」→「腕自体を吹き飛ばすなら」に修正。

６／１８
『魔術師が妖怪の山にて？』「殺すのは俺に遅いかかってくる奴、」
→「殺すのは俺に襲いかかってくる奴、」に修正。

６／２１
『魔術師が紅魔館にて？』「――申しませんよ」→「――もうしませんよ」

6／22
『魔術師が人里にて？』
三点リーダーを偶数に修正。「」内の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「俺も弾幕を張ろうかと手のひらに弾を作ってみたけど」→「俺も魔術を放とうかと手のひらに魔術陣を展開してみたけど」
「今こそ弾幕の時」→「今こそ魔術の時」
「気を放ってみた」→「威圧する感じで魔力を放ってみた」
「一応人間だからあるんだよ」→「人間だからあるんだよ」
にそれぞれ修正。

6／23
『魔術師が人里にて？』
三点リーダー、ダッシュ線を偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「人の気配には敏感なもので」→「生き物の気配には敏感なもので」
「魔術で飛んで回避」→「魔術で跳んで回避」
「弾幕決闘も無しつまり説得は無理」→「つまり説得は無理」
「残る手は一つ」→「残る手はただ一つ」
「《ＥＮＤ》」→「『魔術師が人里にて』おわり」
にそれぞれ修正。

6／24
『魔術師が紅魔館にて？』
三点リーダー、ダッシュ線を偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「＊＊＊」前に全角スペースを入力。文末「。。」を修正。

6／25
『魔術師が紅魔館にて？』『魔術師が紅魔館にて？』
三点リーダー、ダッシュ線を偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「＊＊＊」前に全角スペースを入力。

6／26
『魔術師が紅魔館にて？』
三点リーダーを偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「ズボンの腰穴にロープを通しロープを着て」→「腰にホルスターを巻いて」
「それは狂った笑顔。」→「それは得体の知れない恐怖を催す笑顔。」
「狂った声が響いた。」→「喜びの声が響いた。」
「一旦弾幕を止めなければならない。」→「一旦弾幕を止めさせなければならない。」
「グチャ！」→消去
「痛みが脳髄を貫いた。」→「痛みが脳髄を貫く。」
「がん！」→消去
「剣の受け方を間違えて後ろに吹き飛ばされてしまい、俺は壁に体を打ちつけた。」→「甲高い音を立て、剣と剣がぶつかり合う。俺は受け方を間違え、後ろに吹き飛ばされてしまった。したたか壁に体を打ちつける。」
「ぐさ！」→消去
「ロープを引きちぎって指で挟んで上に向かって投擲した。」→「ホルスターから掴み出して上に向かって投擲する。」
「火の弓矢を作った。」→「火矢を作る。」

「そしてローブの中から銀のナイフを取り出して、無防備な」→「ローブの中から銀のナイフを取り出す。そして、無防備な」
に、それぞれ修正・変更。

『魔術師が紅魔館にて？』
三点リーダー、ダッシュ線を偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「＊＊＊」前に全角スペースを入力。
「咲夜はそう思っていた。」→「そう思っていた。」
「咲夜は思わず」→「思わず」
「咲夜はそう思って回りを見渡した。」→「そう思って回りを見渡した。」
「もしかしたら本当に起こるかもしれない。」→「もしかしたら本当に起こるかもしれないと期待した。」
『「これはこれは、どうかしましたか？」
そんな声と共に誠が弾幕を全て消して出てきた。』→
『「これはこれは」
誠の周囲が一瞬にして発光し、爆発的な魔力が溢れ出す。
「どうかしましたか？」
そんな声と共に誠が弾幕を全て消して出てきた。』
「死んではいない。」→消去
に、それぞれ修正・変更。

１２／２７
『魔術師が紅魔館にて？』
三点リーダー、ダッシュ線を偶数に修正。「会話文」前の空白、「」の文末句点を削除。「！・？」の後に文が続く場合に空白を入力。
「＊＊＊」前に全角スペースを入力。
「曰く、地下室で目が覚めたときは見つけ次第殺そうと思っていま

した。しかし、お嬢様と妹様が外で楽しそうに遊んでいられるのを見たので思いとどまりました、と言うことらしい。」↓
「曰く『地下室で目が覚めたときは見つけ次第殺そうと思っていました。しかし、お嬢様と妹様が外で楽しそうに遊んでいられるのを見たので思いとどまりました』と言うことらしい。」
「天井にぶら下がったシャンデリアからも」
「天井にぶら下がった新調と思しきシャンデリアからも」
『「俺もするんですか？！」』↓『「俺もするんですか！？」』
『「それでは綾野さまは魔法を使いながらモップで掃除をしてください」』↓
『「それでは綾野さまはたわしで壁を、モップで床を掃除してください」』
「咲夜さんはいつの間にか持っていたモップを俺に渡した。」↓
「咲夜さんはいつの間にか持っていたたわし入りバケツとモップを俺に渡した。」
『「…何ですか。」』↓『「何ですか？」』

『魔術師が妖怪の山にて？』
「＊＊＊」の前に全角スペースを入力。
「抜け道の水には影響が内容で」↓「抜け道の水には影響が無いようで」
に加筆・修正。

スペース！！

魔術師が人里にて？（前書き）

黴臭い駄文です。

魔術師が人里にて？

〈初日〉

暇だから人里に来た。どうせ来たなら、と思って食料を買い込もうと商店街に行った。適当に必要な調味料や自分で調達しにくい食材を買っていった。

買い物も終わって帰ろうと商店街を歩いていた時、前から荷物がぶつかってきた。

「ひゃ！」

「む」

ズル！　ばたばたばた！

荷物が転んだ。

「……」

訂正。荷物を抱えた十七・十八辺りの少女がぶつかってきて、転んだ。目の前が見えなくなるほど沢山の荷物を持って歩いていたら、当然目の前の人にぶつかるだろう。

え？　何で俺は避けなかったんだって？　新しい術式を考えながら歩いていて、意識が吹っ飛んでいたんだよ。

「あ、ごめん。大丈夫？」

「はい。大丈夫、ですが……」

少女は辺りを見渡した。

少女は大丈夫らしい。しかし、荷物が大丈夫ではなかった。あっちに転がったり、こっちに転がったりしている。

「俺が集めるよ」

「え、いいんですか？」

「まあ、ぶつかってしまった事の八割ぐらいは俺に責任があるから……」

慧音から人里の中であまり魔術を使うなと言われているけど、この位いいよな。

探知魔術で目に見えない位置にある荷物を確認。風の術式を描いてある手袋をはめる。
「風よ。彼の物たちに纏え。我が独学から、第二章十五番『収束』」
全ての荷物に風を纏わせて他のものと区別する。そして、収束魔術で「風を纏った物」を集める。
「すごい……。すごいです！」
「そ、そうか？」
少女のあまりの興奮度に少々押されてしまった。
何はともあれ荷物は全てまとまった。それにしてもこの荷物、かなりの量がある。殆どが布だ。いったい何に使うのだろうか。
「ありがとうございました」
「いや」
少女は俺に礼を言うと、一人で荷物を持とうとした。だが、何事にも限度はある。またもや少女の顔が見えなくなった。
「あー、手伝う？　また人にぶつかるぞ？」
「大丈夫です。慣れているので」
少女はそう言って荷物を全て抱えた。
「ありがとうございました」
「いや」
少女はそのまま去っていった。
ズル！　ばたばたばた！
また転んだ。
「風よ。彼の物たちに纏え。我が独学から、第二章十五番『収束』」
もう一回魔術で荷物を集めて、今度はそのまま風を纏わせておく。
「すみません……」
「いや、別に」
言いながら懐から札を取り出して少女に渡す。
「あのこれは……」

少女が手元の紙の札を見つめながら言った。札には複雑な図形や数式を描いてある。魔力も少し纏わせてある。
「荷物に魔術を掛けた。この札が進む方向に着いて来るようにしてあるからもう転ぶ事はないだろう。効果は二十分以内だから早く行きな」
少女は不思議そうに札を一通り見た後、
「ありがとうございました」
そう言って今度こそ転ばずに去っていった。
その背中は、心なしか弾んでいるように見えた。

〈翌日〉
昨日使った魔術について慧音から事情を聞かれた。慧音には午前中全部使って懇切丁寧に“あれはいいだろ”と言うことを説明した。説教は無かった。慧音が何故俺が魔術を使ったと知っているのかと言うと、慧音の近所のおばちゃんがあの場にいたらしい。それでおばちゃんが珍しいものを見たと慧音に話したらしい。
……肝が冷えたわおばちゃん。
とまあ、ただ今はお昼時なわけで腹が減っている。いつもの茶屋に行って何か食べようと思った。
到着。早速暖簾をくぐって、奥の会計台にいる親父に声を掛けた。
「……」
会計台の前に先客がいたので掛け損ねた。横顔からして十六か十五辺りの少女だ。無言のまま会計台の前に立っているが、何をしているのだろうか。茶屋の親父はどうしたのか。
「ぐおー。ぐおー」
肝心の親父が寝ていた。どこの熊の寝息だよ。
少女は親父に向かって何か言おうとしているが、直前で躊躇ってしまっている。大方、団子を買いに来たけど親父が寝ていて起こすのも申し訳無いとか思っているんだろう。

親父め……
風の術式を描いてある手袋をはめる。懐から昼食代である銭を数枚取り出す。その全てに風を纏わせる。量が少ないので呪文は唱えなくていい。
そして、その銭を仕事中にも関わらず堂々と寝ている親父の額に飛ばす。
「くらえ。十四文日替わり定食アタック」
ヒュッ！　バシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシ！
「いっっっったぁぁぁぁ！」
起きた。少女は突然声を上げた親父に思いっきりビビッている。
「サボんな親父。客が来てるぞ」
親父は「うおぉぉぉぉ……」と呻きながらまだ額を抱えている。少女もまだ事態が飲み込めていないのか、おどおどしている。
「仕事をサボって寝ているからこうなるんだよ。あんた、早く注文しちまいなよ」
「おのれ……」
「は、はぃ……」
少女の語尾がしぼんで言ったのは何故だろうか。いきなりこんな事が起きたからだろうか。幻想郷の住人は常識に囚われないから、このくらい大丈夫かなと思ってしたけど駄目だったのかな？　一生懸命視線を逸らされているのは精神的ダメージが大きい。
「……団子」
「ん？」
返事をしたのは親父。
「……団子を三本ください」
何とも小さくて遠慮がちな声。性格は大体知れるな。
「分かった！　団子が三本で六文だ」
「寝ていたんだから半額にしてやれよ」
「お前はだまっとれ！」

親父がこちらにクワッと向いて言った。
「迷惑料だよ。この娘さん、だいぶ待っていたんじゃないか？」
少女のほうを見ると小さく首を縦に振っていた。
「ほら」
「うむぅぅぅ……」
うむぅぅぅ……じゃねえよ。早くしろ。
「わかった！　団子三本で三文だ！　但し、誠から三文いただく。いいな！」
「良くねえ！」
「そら娘さん。団子だ。待たせて悪かったな」
「……」
少女が無言で受け取った。
て言うか、勝手に話を進めるな！
「あの……お金です……」
少女が親父に六文差し出した。
「代金は三文。これはおつりだ」
親父は躊躇う少女に笑顔で三文返した。少女は返された三文と茶屋の親父と俺を代わる代わる見ていた。親父の笑顔を見ても損しかないぞ。
「行けよ。早くしないとせっかくの団子が硬くなっちまうぞ」
そう言っても未だに動かない少女は、少ししてからやっと口を開いた。
「えっと……」
途中で切らないで、と、この少女に要求するのも性格的に酷かもしれないな。
「ありがとうございます」
そう言って少女は茶屋を出て行った。
「……可愛かったなあ」
「何言ってんだこの親父。いい歳してあんな娘に欲情するのか？」
「違うわ！　第一お前は何でここにいるんだ！」

「飯食いに来た」
この親父……。茶屋に来たらそういうもんしかないだろうが。
「あ～な～た～」
会計台の奥。厨房のほうから声が聞こえた。その声は地獄から這いずって来たかのようだった。俺も親父もその声に硬直する。
「あたし以外の女に色目使ったわね～」
親父の冷汗が尋常でない。俺も自然と戦闘体制に入ってしまう程の殺気だ。こんな物、感じた事が無い！
「覚悟しなさい！」
親父が厨房からヌッと伸びてきた二本の腕の餌食になる。
「すみませんでえぇぇぇぇ！」
親父の断末魔。哀れなり。恐ろしくて直視できない。
「助け……」
「ごめん無理」
「裏切りいいいいい！」
ああ、どんどん締め上げられていく。すでに十回くらい「ＫＯ！」されているよ。こんなのの中に入りたくなんて無いよ。絶対に嫌だ。
その後模様を見守りながら、申し訳無さそうな茶屋の息子さんが運んできてくれた昼飯を食べた。
親父は原形を留めていなかった。明日には復活しそうだけど。
「まだまだー！」
……おかみさん、やるなら奥のほうでやろうぜ。
「ごちそうさま。代金はそこに置いてあるから」
ちなみに、団子の三文は払っていない。

〈そのまた翌日〉
慧音に昨日魔術を使ったこともばれずに、今日も人里をぶらぶらとしている。
いや、ニートじゃないんすよ。ただ、実験するにも材料の薬草が

まだ生長しきっていないんだよ。これ本当。
なんて事を考えつつ、平和だなーとか思っていると、
「おい、ちょっと……」
ダッッッシュ！　ＺＥＮＲＹＯＫＵ☆ダッシュ！
なんで慧音に話しかけられなきゃならないんだよ！
「あ、おい待て！　……みんな！　そいつを捕まえてくれ！」
応！　って周りのみんながこっちに向かってきた～。泣きたいよ、この量。圧倒的にこっち不利じゃん！
「簡単に捕まるか！」
ふふん！　身体力諸々強化の魔術なら常に掛けてあるもんね。大きな人垣もひとっ跳びー。
「放てー！」
遠隔攻撃系程度能力者が一斉に攻撃して来た。
いい連携だなー、じゃ無くて……
「嘘だろ！」
当たるって。当たるって。当たるって！
俺は能力の弾幕の中を必死で跳んで行く。一瞬、俺も魔術を放とうかと手のひらに魔術陣を展開してみたけどやっぱり止めた。今の状況だと狙いが外れて建物を壊す可能性がある。
「ふ。この程度の攻撃に当たるか！」
「じゃあこれはどうなんだ？」
視線の先には周囲に火の玉を浮かせて屋根に立っている不老不死、藤原妹紅。
……なんで今日に限って人里に妹紅がいるんだー！
今こそ魔術の時……
「くらえ！」
遅かったか……
ピチューン！
俺はそのまま妹紅の弾幕に撃墜された。

「なーんだ！　妖怪退治の依頼かよ」
びっくりさせやがって。
「最近西の山で妖怪に襲われる里人が多くてな」
「西の山って言ったら、比較的妖怪が少なくていても温和な奴らばっかりだったよな。人間もよく山菜採りに入っているし」
「だからこそ困っているんだ。本来は里の陰陽師連中に頼むべきなんだがな。神社参拝の予約でいっぱいだそうだ」
あらま、珍しい。
「霊夢に頼んだら駄目なのか？　それか妹紅は？」
「博麗の巫女は参拝客の対応に追われている。妹紅は……」
「あたしは、今回の妖怪とは相性が悪いんだ」
妹紅が答えた。
博麗神社に参拝客が増えた不思議は置いといて、
「妹紅と相性が悪いって、どういうこと？」
というか、妹紅に相性なんてあったっけ。
「今回の妖怪は土と水を操っている。力もそこそこあるし、何より地下にもぐっていやがる。あたしの炎でも戦いようが無いんだ」
「ふーん」
そーなのかー。あ、いけね。
「と、言うわけで誠に妖怪退治をお願いしたい。勿論、御礼はする。但し、常識の範囲内でな」
慧音の顔が厳しい。そういえば、霊夢に依頼してたかられた事があるって前言っていたな。
「安心しろよ。俺は霊夢のようにたかったりはしないからさ」
「そうだといいが……」
あれ？意外と信用されない？　お金に関してだったら綺麗だと自負していたんだけどな。ちょっとショック。
「ま、明日には片付けておくよ」
「うむ。よろしく頼む」
「じゃあな」

そう言って、寺子屋から立ち去ろうとしたその時、
「時に誠、お前は何で私から逃げたりしたんだ？」
ぐさ！
「え、びっくりしたから……」
「私が人里にいることがそんなに驚いたのか？」
「いえ。あの……」
「お前。私に何か隠し事はしていないか？」
「……」
「やはりな。さあ、きっちりと吐いてもらおうか」
その後は慧音の頭突きに説教、逃亡を図ろうものなら妹紅の弾幕プレゼントと言うとても嬉しくない時間を過ごした。
最悪だ。

午後。
慧音・妹紅の二人に依頼を貰ってしばかれた後はいつも通り、行きつけの茶屋へ昼飯を食いに行った。しかし、店は開いているのに臨時休業していた。何でも親父は復活したが店内のあちこちが破損したそうだ。床が凹んだり、天井が抜けたり、壁に穴があいたり、テーブルが真二つに折れていたり。結構悲惨だった。
……おかみさん。少しぐらい手加減してやろうぜ。
……親父。それでも復活するあんたはもう十分化け物だよ。
とまあ、そう言う訳で他の所へ食べに行こうとしたら、茶屋の息子が昼食を準備してくれた。いつも来てくれる御礼だそうな。嬉しい。
親父が店の修理をしているのを横目に俺は昼飯を食べる。
「やっぱり人里に来たら息子さんの手料理が食いたいなぁ。本当に美味い」
「照れるな～」
いやいや、とかしているし、この親父。
「親父を褒めてるんじゃねえ。褒めているのはあくまでも、あん

たの息子さんだからな」
「その息子に料理を教えたのは俺だ」
「団子作りだけじゃねえか」
「何を！　お前あの団子を作り上げるのにどれだけのでばぁ！」
親父の後頭部に麺棒がクリティカルヒット。投擲地点はおそらく厨房。
「あなた。喋っていないで手を動かしてくださいね」
おかみさんスマイル（の気配）ここにいても凄みが伝わってくる。
「はい！　分かりました！」
妻の尻に敷かれる夫。典型的な力関係だな。微笑ましい。
「じゃあ、俺は帰る。本当に親父ん所の定食と団子は美味いや。また来るよ」
「ああ！　また来いよ！」
茶屋を離れる。今は、最後に本屋でも寄っていこうかな～とか考えている。
しばらくのんびりと歩く。日差しが暖かい。
「しかし、まあ」
もうすぐで本屋。
「何なんだろうね」
本屋の一歩前で他の路地に入る。少し奥に入ってまた曲がる。曲がりきったらすぐに上へ跳ぶ。何かの建物の屋根に乗って下を覗くと、
「やっぱりいた」
さっきまで俺の居た場所にはひとりの女の子がいた。十一・十歳あたりだろう。必死に何かを探すようにキョロキョロしている。
こっそりと女の子の後ろに下りる。
「知っているかい？」
声を掛けてみた。女の子はビクッとしてこちらに勢いよく振り向いた。
「知らない人に簡単にほいほい付いて行ったら駄目なんだよ」

女の子は硬直していて動こうとしない。
「特に、君のような小さな女の子が俺のような男の人について行ってはいけないよ」
ただ付けられているのも性に合わないし、ちょっと仕返ししてやろうと思った。それだけだ。他意は無い。決して無い。本当に無い。
「表の道まで送ろう。来なさい」
「知らない人に付いて行ったら駄目なんじゃないの？」
おお。喋れたんだ。
「今は良い。じゃないと君がお家に帰れなくなるからね」
「そんなことより、魔法を見せてよ！」
はい？
「どういう意味なの？」
「そのままの意味だよ。魔法を見せてよ！朝にみんなで遊んでいたでしょ！」
ああ、あの騒動か。あれを見ていたんだ。
「俺は魔法を使えないんだよ。」
「嘘ついたらだめ。あたしちゃんと見たんだよ。跳んで逃げているお兄ちゃんが、手のひらに魔法の弾を持っているところを。」
あれを見られたのか。
「実はおにいちゃん。慧音先生から魔法を使っちゃ駄目って言われているんだ」
この人里において慧音の名前は強い。「慧音先生が言ったから～」と言えば、大体のことが通じる。この場合もそうだろう。
「え！　慧音先生が……。う～～～。でも見たい！」
訂正。この場合は当てはまらない。
「いやね、慧音先生との約束を破るとお兄ちゃんがちょっと大変な事になるんだ」
例えば慧音の頭突きとか慧音の説教とか、妹紅の炎の弾幕とか、偶然出張してきた映姫の説教（ロングバージョン）とか。本当に大変なんだ。暇の度合いが。

そう言って俺は路地を歩き出した。少し暗くなってきた。
「見せて見せて見せて見せて！」
「だ～め」
「見せて見せて見せて見せて！」
「だ～め」
「見せて見せて見せて見せて！」
「だ～め」
この会話（？）がエンドレス。
言い合っているうちに路地を抜けてもとの通りに戻ってきた。案の定、本屋はすでに閉まっていた。
「さあ、お家に帰りな」
「いーやーだー。見せてくれるまで帰らない！」
「帰りな」
「いーやーだー」
はあ。ついため息が出てしまう。仕方が無い。
「帰りなさい」
「！…気を放ってみた。」
ほんの少しだけだが、威圧する感じで魔力を放ってみた。子供ならば敏感に感じ取るはずだ。これで怖がって帰ってくれるだろう。
「帰りなさい」
「…気を放ってみた。わかった」
よし。やっと折れた。
「じゃ……」
「その代わりにお家に来て！」
俺は一言。“じゃあね”と言いたかった。それなのになぜこんな展開になる。何か最近不幸な体質になったのかな。一回、身を清めてみようかな。
「お家に来て！　お家で魔法を見せて！」
そろそろイラついてきた。いい加減にしてほしい。
「だから、無理だと……」

「悠！」
今度は誰だ！
「あ、お姉ちゃん！」
お姉ちゃん？
向こうから少女二人が走ってきた。
「悠！　こんな時間までどこに行っていたの！　中々帰ってこないから心配したじゃないの！」
「……詠お姉ちゃん、ごめんなさい。」
「悠ちゃん。心配掛けちゃ駄目だよ？」
「……遥お姉ちゃんもごめんなさい。」
……俺、ただ今全力で気化中。このまま霧散して消えてしまいそう。何にも話が見えないんですけど。取り敢えず三人は姉妹。家族。俺必要なし。さっさと消えよう！
と思った矢先に、姉の片方が衝撃の事実を言い渡す。
「もう閉門の時間なのに」
ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。
「何だと！」
つい大きな声を出してしまった。なんてどうでもいい。
「門が……閉じてしまった……」
人里では鐘が五つ鳴らされると外と中をつなぐ門を閉じてしまう。外へ出られなくなってしまうのだ。
まあぶっちゃけ、出ようと思えば出られるんだけど、その為には魔術を使う必要があるしその姿を誰かに見られて慧音に告げ口されてまた頭突き食らうのも嫌だし。かと言って人のいなくなる時間まで隠れているのも暇だし、最近は夜中になると気温が下がって寒いし、居酒屋に行く金もないし。
え？　お前に寒さなんて関係あんのかって？　一応人間だからあるんだよ。
「あのう……」
「はい？」

一人で考えたり、頭の中でどこから来るか謎の質問に答えてたりしていると、声をかけられた。
姉（一番上っぽい）が言った。
「お困りでしたら今晩泊まって行きませんか？　何か妹が迷惑を掛けたようなので……」
「いいのか？　こんな見ず知らずの男を泊めて」
そう言うと相手は笑った。
「大丈夫です。見ず知らずでもありませんし」
「どこかであった事あったっけ？」
頭をひねる。そういえばこの人の顔、どこかで見たことあるかもしれない。どこだったかな。
「ふふふ。一昨日にお札を下さった方でしょう？」
「札…。ああ！　あの時の転び屋さん」
確かに、荷物が多かったから移動用の風魔術を貸したことがあった。あの時の少女か。
「転び屋さん……とは面白い名前を付けてくださいますね」
「ねえ！」
一番ちっこいのが割り込んできた。
割り込んでくるなよ！
「お家に来るの？」
悩む、筈も無く即決する。
「お邪魔します」

魔術師が人里にて？（後書き）

お読み下さりありがとうございます。
え～、ちょっと前に書いたものを引っ張ってきました。
呪文とかはかなり適当です。
オリキャラばかりです。お許しください。

魔術師が人里にて？（前書き）

後編です

魔術師が人里にて？

〈夕方〉

「いただきます」

三姉妹の家の居間で夕食をご馳走になっていた。数年前に両親を亡くして姉妹三人で一生懸命生きてきたそうな。

「あの時はありがとうございました」

長女の詠（よみ）が言った。一昨日、荷物を大量に持って転びまくっていた少女だ。

「別に何度もお礼言わなくてもいいよ。それより、何であんなに大量の布を持ってたんだ？」

いくらか技術が発達したとはいえ、まだ布はある程度の値がある。大量に買い込めるようなものではないのだ。

「ああ、あれはお仕事なんです」

「仕事？」

「はい。注文先から布を貰ってきているんです。それを縫って鞄にしたり、髪留めにしたり。遥（はるか）が付けているのは私が考えた“シュシュ”という髪留めなんです」

昨日の茶屋で出会った次女の遥は、“シュシュ”とやらで髪を留めていた。筒状にした布の中にゴムを通して一つの輪にしてあるそうだ。ゴムの所為で布が集まっている。簡単な物だろうが、布の柄ともあいまって落ち着いた上品さが感じられる。

「きれいだな」

「え……」

ん？気のせいだろうか。遥の顔に朱が差したような。

「お姉ちゃん。シュシュのことだよ」

「……そうね」

三女の悠（ゆう）が訳分からんことを言った。遥がその言葉に答えられるのは女同士だからだろうか。すごい。

「他にもお裁縫で作れるものならいろいろ作っているんです。前掛けや暖簾なんかも作っています。」
「すごいな。全て一人でやっているのか？」
「いいえ。遥や悠も手伝ってくれているんですよ。新しい商品も三人で話し合って決めているんです」
ほう。三人でやっているのか。いい絆だな。
「ねえ」
悠が話しかけてきた。
「断る」
「まだ何も言っていないよ！」
“魔法を見せて”だろ？　却下だ」
「なんで！」
この娘はまた言うか。元気がいいな。
「あのう。私も、見たいです」
「え？」
遥がオズオズと言った。自分から何かを言うことは無いと思っていた。特に他人に対する頼みごととか。だが、そうでもなさそうだ。
「一昨日、お姉ちゃんから魔法の話を聞いて私も見てみたくなったんです。だめ……ですか？」
そんな上目遣いで俺を見るな！　それがどれだけの破壊力を秘めているか知って使っているのか！　ああくそ！　“見せよう派”の俺と“見せない派”の俺が戦いだした！
己同士が内紛をすること五秒。“見せない派”の俺が辛うじて勝利した。やはり、慧音と妹紅と映姫のフルコースの方が重い。
「やっぱり駄目だ」
「えー」
「そうですか……」
悠の方はいい。しかし、遥の期待を裏切ったというような罪悪感が心を傷つけてくる。
「はいはい。二人とも我がまま言ったらだめでしょ？　誠さんには

誠さんの事情があるんだから。ね」
ああ。詠ありがとう。待ちに待っていた助け舟だ。
「でも……。私も見たかったかな？」
舟沈没。
浮き沈みの激しい俺なんか放っておいて三人の会話は盛り上がっていった。
例の妖怪の話も出てきた。
「そういえば、最近里の周りを妖怪がうろついているらしいわよ」
「私も聞いたことある！田んぼに穴が空いたりしているみたいだね」
「私も聞いた……」
どうやら人里には妖怪の話がある程度広まっていそうだ。退治する前に情報収集でもしておこうかな。
「どんな妖怪なんだ？」
「詳しくは分かりませんが何でも土の好きな妖怪だと聞いています」
と、詠が言った。
「山のおじさんに聞いたら水を飛ばしてきたって言っていたよ」
と、悠が言った。
「西の山に出るって……聞きました」
と、遥が言った。
やはり慧音がくれた以外の情報は無かった。別段、困りはしないがな。
「誠さんは、妖怪退治をしたりはしないんですか？」
「俺？　俺は邪魔さえされなければ特に手出しはしないよ。していたら限が無いし。でも、小銭を稼ぐために慧音から依頼は受けることはある」
「この妖怪の依頼は……受けたんですか？」
「ああ。今日の朝に慧音から依頼された。明日には片付けておこうかなと思っている」
詠と遥は揃って「そうなんですか～」と言って、少しほっとしたような、安心したような表情を浮かべた。西の山は人里から程近い。

近くに人を襲う妖怪がいては、あまり気持ちのいい物ではないのだろう。
「ねえ」
「何だ、悠」
悠が神妙な顔つきで、
「お兄ちゃんは妖怪退治で魔法を使うの？」
と聞いてきた。それに対して俺は、
「却下」
と即答した。
「まだ何も言ってないじゃん！　それに答えになっていないよ！」
「妖怪退治に魔術……魔法は使うが、付いてくるなよ。危険だ」
悠が涙目になってしがみついてきた。あー暑苦しい。
ん？　羨ましいだと？　残念ながら俺にはそういった趣味はないんだ。
詠と遥はご飯を食べ終わって片付けに入っているし。ちょっと、助けてよ。
「ほれ悠。早く飯を食わんか」
こんな言葉遣いするのは俺だけ。
「ん～～～」
不満そうながらも悠はやっと離れてご飯を食べた。俺もさっさと食べ終えてしまう。
「ごちそうさま」
器は遥が持って行ってくれた。
「あ～うまかった」
その後は、談笑したり風呂に入ったり悠にお願いされ続けたりその度に断り続けたり、何とも平和な時間をすごした。

〈夜中〉
今は布団の中。小さめながらも部屋を一つ使わせてもらっている。

ありがたい。まあ、当然と言えば当然だろうか。姉妹三人は廊下を挟んだ向こう側の部屋を使っている。
――――カタッ
引き戸の向こうで小さな音がした。でも別に気にしない。
――――ススッ
こちら側の壁によしかかる音がしたけど気にしない。
しばらく静かになる。
――――スゥスゥ
廊下で寝息がしたけど気にしない。……した方がいいか。
布団を抜け出して引き戸を静かに開けると、悠が壁にもたれかかって眠っていた。大方、俺が朝早くに起きて知らぬ間に帰らぬように見張っていたのだろう。俺にはばればれだったけど。
「……ん」
あ、起きた。
「お兄ちゃん……魔法……見せて……」
まだ寝ぼけているな。こいつ。
「しょうがないな。見せてやるよ」
「…本当？」
「ああ」
俺は懐から幾つかの単純な記号と奇怪な文字が描かれている紙の札を出した。悠の目が眠たげながらも輝いた。
「どんな魔法を使ってくれるの？」
「……こんな魔法だ」
悠の前髪をどけて札を額に張る。そしてすぐさま魔力を流し込む。
「え……？」
「お休み、悠」
悠のまぶたは閉じられ、すぐに規則正しい寝息が聞こえ始めた。
「詠、遥、起きてるだろ」
後ろの引き戸が開いた。
「ばれちゃいましたか」

「最初っからな」
隣の部屋には詠と遥がいた。この二人はさっきからこちらを覗き見していた。
「……何で分かったの？」
「生き物の気配には敏感なもので」
この台詞、前にも言った気がする。
「やっぱり二人も見たいわけな。魔法」
「ええ」
詠が答えた。即答かい。
「でも見せない」
二人があからさまにがっかりした。ここまで素直だとこちらが傷ついてしまう。
「悠をよろしく。俺は寝るわ」
「はい……このお札は？」
詠が聞いてきた。
「精神干渉催眠系の魔法。効果は朝まで。それまではぐっすりと寝るから起きないぞ」
「……寝不足のときに便利、ですね。」
「いるか遥」
札をまじまじと見て言った遥に聞いてみたが、首は横に振られた。
「見れないのなら、いいです」
「さよけ。まあ、お休み」
「おやすみなさい」
「……おやすみ」
部屋に入って引き戸を閉めた。二人も悠を連れて部屋に戻ったようだ。
「……はあ。こんな形で使うとは思わなかったが。まあ、いいか」
魔術師はなにやら準備を始めた。

〈次の日の朝〉
三姉妹が起きるともう家に綾野はいなかった。
詠はがっかりしている妹二人を励まして朝食の準備をする。準備をしていると居間になにやら置いてあるのを悠が見つけた。置手紙と布袋だった。
手紙には食事と泊めてくれた事に対するお礼が書かれていた。そして、袋の中には、
「あら」
「うわあ」
「わあ！」
手のひらサイズのガラス球が三つ入っていた。ガラスの中にはそれぞれ赤、緑、橙の色をした炎が揺れていた。
袋の中に入っていた小さな紙にはただ一言だけ書いてあった。
『魔法玉』と。

朝。三姉妹が起きる前に準備して出発した。そして、開門と同時に人里を出た。向かうは西の山。慧音に頼まれた妖怪を退治しにいく。
「まあ、いいか」
三姉妹の家に置いてきた物を思い浮かべて呟く。
あれは長年の研究で得た成果の一つ。『永続回路の魔術式』だ。先日完成したばかりの魔術式で機会があったら試したいな～と、思っていたが使いどころが見つからずに少し困っていた所だった。そこにあの三姉妹登場で使ってみた。
ガラス玉の中の炎は幻覚系魔術の物。普通は魔力を供給しなければすぐに消えてしまう。だが、あのガラス玉の場合は、内部に埋め込まれた魔術式によって使用された魔力が循環し続ける仕組みなのだ。
かなり便利そうに聞こえるが、構成する魔術式が複雑になるとうまく機能しないと言う欠点があり、実戦ではあまり使えないのだ。

「あんなんで喜ぶかな～」
喜んでいるといいけどな。
なんてことを考えている間に西の山が近づいてきた。戦闘準備に入る。魔術師は準備段階で勝負が決まると言っていいくらいの職種だ。
準備終了。
西の山に入って弱めの霊力を放つと何かが近づいてくる気配がした。ちなみに、周りに人はいない。
「おっと」
地面が陥没した。魔術で跳んで回避。地中には人の三倍ぐらいの大きさでそれに比例して太くなっている巨大ミミズがいた。
「お前か」
ミミズは耳障りな声を発しながら水を飛ばしてきた。おそらくは地下水か。
「意思疎通は難しそうだな」
話が通じるなら説得をするんだけどな。
軽く水を避ける。
“土と水を操る程度の能力”って所かな。確かに火や炎との相性は悪いが……」
意思疎通は無理。つまり説得は無理。残る手はただ一つ。
「お前は煉獄に耐えられるのかな？」
魔力開放。
最近は慧音に頭突きさえまくりだったし、ここらでストレス発散と行きますか！
「我が独学から、第一章三十二番『煉獄の華』」
西の山に、浄化の炎が花開く。
『魔術師が人里にて』おわり

魔術師が人里にて？（後書き）

完結しました。
ご指摘・ご感想をお待ちしています。

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

今回は紅魔館編です。主人公の能力説明とか出てきます。

魔術師が紅魔館にて？

紅魔館と、里人は言っていた。
悪魔の棲む館とも言っていた。迷い込んだら生きては帰ってこられないと。
「って言われてもね～」
俺は独りぼやいていた。

＊＊＊

最近知り合った魔法使いの魔理沙から、森の中の湖、そのそばに『大図書館』があると聞いた。古今東西の様々な本が大量に蔵書されているらしい。『様々な本』とは、魔法魔術、医学薬学、政治経済、自然科学といった専門書から、小説、随筆、園芸、料理、生活、その他趣味本といった一般書まで、本当に様々な本があるらしい。
幻想郷に自然科学があっていいのか、その前に何であるのかとか疑問はあるが、幻想郷だからいいのかなと思っている。
こう思ってしまう辺り、俺も幻想郷に染まってきたんだな。
話を戻そう。
俺はその話を聞いて五秒も立たずに「行く」と言った。その時は今日一緒に行く事になっていたのだが、今日魔理沙の家に行ってみると、魔法の実験で手が離せないとやらで簡単な地図を貰って一人だけで行く事になった。
ちなみに魔理沙のしていた実験とは、魔理沙の主砲の『マスタースパーク』とやらをもっと強力にするための実験らしい。魔法の発動時に魔力の熱量への変換効率を上げて威力を底上げしてエネルギーの方向性をもっと統一させるんだ、とか、八卦炉に組み込むために魔法陣をもっと効率的にしなければならないから、コーリンの所にも行かなきゃな、とかぶつぶつと呟いていた。

紙の上でペンを走らせて必死に魔法陣を描く姿、部屋中に散らばった魔導書や魔術書、失敗したときの爆発音と紙の焦げる臭い。魔法魔術に携わるものならではの景色だ。懐かしい。

話が脱線した。

ルートの途中に人里があったし丁度昼時だったから茶屋で飯を食っていった。その時茶屋の親父に大図書館の事を聞いてみた。すると親父はこう話した。

大図書館なんて物は聞いたことがない。しかし、湖のそばには紅魔館がある。お前はとても強いが、あそこは危険だ。行かないほうがいい、と。

親父は珍しくまじめな顔になって言った。

茶屋にいたほかの客も話してくれた。

あそこは悪魔の棲む館だ。曽祖父が一度迷い込んだことがあるが、気がついたら捕まっていて殺されかけた。なんとか逃げてきたが他にも捕まっている奴らがいたらしく、曽祖父は、きっと殺されるのだろうと言っていた、と。

俺はその話を聞いて「へ～」としか思わなかった。なんせここは幻想が住まう幻想郷だ。人が妖怪に食われるとか、怪異現象に遭うとかは日常茶飯事。悪魔の棲む館があっても全くおかしくない。

それに、危険だろうがなんだろうが、そこに俺が必要とする本があるのであれば行くしかないし、どんな危険でも生き延びれる自信がある。

そんな風に俺は二人の言葉を軽く流し、現在森の中を歩いていた。緑が生い茂る森の中には道は全くと言っていいほどない。辛うじて獣道のような物があったが、先ほど森に飲まれて消えてしまった。したがって、最初に決めた方向にただまっすぐと進んでいく。

ちなみに、魔理沙から貰った地図は飛んで移動するときの物のようで、ほとんど役に立たなかった。森は上空を湖に向かって行けとしか書かれていないので、森の中は慧音に教えてもらった方向に向かって歩くしかないのだ。軽々と飛べる奴らが羨ましい。

俺は飛べはするが長時間の飛行は苦手だ。何故か飛行魔術だけが上手くいかない。術式組むのに時間がかかるし、それを発動させつづける（つまり飛びつづける）のには大量の魔力を消費する。下手すると途中でガス欠を起こすことだってある。と言う訳で飛行魔術は本当に緊急の時にしか使わない事にしている。不便だ。

「しっかし、覚悟はしていたが結構遠いな」

人里を出てかれこれ一時間。まだ付かない。慧音には「まずは湖に出る。後は湖に沿って歩けば良い。」と言われた。方角はずれていないはずだから、もうそろそろ湖に出てもいいのだが……

「あ、出た」

やっと湖に出た。辺りを見回して紅魔館とやらを探す。しかし、湖には霧が立ち込めていて視界がとても悪い。

「見にくくてかなわんな」

どうしようか。湖に沿って歩けばいいんだろうけど、大きい湖だって聞いたからもし逆に回ったらかなり時間を食ってしまう。つまり読書の時間が減ってしまう。それは嫌だ。

「んーどうするか。周りが見えない……要するに霧が晴れれば良いんだよな。」

ならば簡単だ。

「我が独学から第四章一番『衝撃波』」

湖の上で周囲の空気が集まり圧縮され始める。

俺の使う魔術書『我が独学』は第一章、第二章、第三章、第四章の四種類に分類されている。第四章とは、第一章から第三章の魔術を組み合わせて作った合成魔術だ。それぞれの魔術をつなげて一度に発動するようにしてある優れものだ。発動するまでの時間が長いのが問題なんだが。

空気の圧縮が終わる。

「おっと、伏せとかなきゃ」

ごう！

俺が伏せたときに丁度『衝撃波』が発動した。威力を弱めてある

から周囲の木々がなぎ倒されたりはしないが、水面が波立ち、土ぼこりが立ち、葉が飛ばされる。当然、霧もどこかに吹き飛んでいく。それの様はまさに霧散すると言える。
「おおう。結構晴れたな」
立ち上がってローブに付いた土ぼこりを払い落とす。周囲はきれいに晴れて見通しがかなり良くなった。
「えーと、紅魔館はどこかな……とわ！」
突然前方から何かが飛んできた。とっさに避けたがどんどん飛んでくる。
「あたいの眠りを妨げたのはあんたね！」
一緒にこんな言葉も飛んできた。声のした方を見ると…って、避けるのに精一杯で見る余裕が無い。ここは一旦森の中に退避して隠れて逃げるか…
「ふん。避けてばっかり。やっぱりあたいは最強ね！」
「何かうざ！」
逃走案却下！　絶対にここで潰す！
「我が独学から第一章一番『風斬』」
唱えながら片手をあげ、詠唱が終わると同時に振り下ろした。すると上空から風の刃が降り注いできて、向かってくる何かを全て叩き落した。
第一章は攻撃系の魔術をまとめてある。主に使いやすい炎系統と風系統の魔術を作ったが、簡単な攻撃系魔術から魔力を大量に消費する攻撃系魔術までいろいろある。
攻撃が止んだ。声のした方向に相手の姿は見えない。向こうの晴れきらなかった霧の中にいるのだろうか。
霧の中に隠れている。ならば話は早い。
「我が独学から第四章一番『衝撃波』」
もっかい食らえ。
ごう！
先ほどよりも岸から離れた場所で、先ほどよりも威力の強い『衝

撃波』が発動した。小さな津波が起こり、近くにあった木々は半ば折れかけている。細い枝葉は全て吹き飛んでいった。霧は完全に晴れた。
そして、霧の向こう側にいたのは、
「よくもやりやがったわね！」
「チルノちゃん止めて！」
こちらを指差している女の子と、それを慌てて止めている女の子だった。

＊＊＊

「よくもあたいのお昼寝の邪魔をしたわね。ここでセイバイしてあげるわ！」
元気よく叫んでいるのは、水色のワンピースを着て同じ色の髪をリボンで留めている女の子だ。背中に六枚三対の氷の羽が付いている。妖精だろうか。
「チルノちゃん止めとこうよ。絶対に敵わないよ」
チルノちゃんと呼ばれた水色の妖精にあたふたしながら話しかけているのは、チルノとやらと同じような柄で緑色のワンピースを着て同じ色の髪をピンで留めている、こちらも女の子だ。背中には二枚一対の薄い虹色に光る羽が付いている。こちらも妖精だろう。
「大丈夫だよ大ちゃん。なんたってあたいは、天才で最強なんだよ！」
「でもさっきの風に吹き飛ばされたじゃない」
「あ、あれは様子を見ようと少し後ろに下がっただけなんだよ！おかげで、攻撃に当たらなかったんだし」
「でも……」
「大丈夫！　あたいと大ちゃんが組めば、どんな大妖怪でも絶対に勝てるんだよ。あたい達は無敵なんだ！」
「そうかな……」

「そうだよ！」
「……そうだよね！　チルノちゃんだもん。勝てるよね！」
「そう！　あたいは最強なんだ！　さあ、あたいと勝負……って、逃げるんじゃないよ！」
チッ。気が付いたか。
二人の、軸が微妙にぶれた話が面倒くさい方向にまとまった頃、俺は湖に沿って遠くに見えた紅い建物目指して走っていた。紅魔館の名の通り、周囲の景色から完全に浮いた紅い建物のようで見つけるのに苦労はしなかった。
先ほど俺は“ここで潰す”とか思っていたけど、目的地が見つかったのだしそちらに行くことを優先した。別にいいじゃないか。面倒くさい。
「待てー！」
「嫌だ」
ポケットから札を一枚取り出して、追いかけてくる妖精たちの正面に向けて投げた。
「獄符・風雷の獄」
詠唱すると、札を中心に風が荒れ狂い放電し始めた。そこに面白いように二人が突っ込んで、風に足をとられて雷に行く手を阻まれた。
「な、なによこれ！」
「ひゃ！　雷だ！」
二人が獄の中で四苦八苦しているうちにさっさと行こう。
「ちょっと！　待ちなさい！」
そう言ったチルノとやらは雷に当たり、墜落して湖に突っ込んでしまった。それに続いてもう一方の妖精にも雷が当たった。結構派手に水飛沫が上がるんだな。
「……まあ、妖精だから大丈夫か」
妖精は自然が具現したもの。自然の力の結晶みたいなものだ。だから、ここで消えても時間がたてば勝手に復活してくる。大元であ

る自然が破壊されない限り、ある意味不老不死のようなものなのだ。
「さあ行こう」
俺は紅魔館に向けて再度歩き出した。
「しかし、あれが妖精と言うものか。初めて見た」
そう。俺にとってさっきの妖精は、生まれて初めての妖精なのだ。俺の住んでいる山では妖精はまったく見ない。いないわけではない。しっかりといるのだが、姿を見せてくれない。妖精は悪戯好きと言う話が嘘のように感じるほど見ない。それに俺の行動範囲の狭さを組み合わせて、妖精を見る機会と言うものが無かったのだ。
「しかし、案外弱かったな。……いろんな意味で」
ここだけの話、俺は、幻想郷で一番強いのは妖怪ではないと考えている。もちろん人間や動物ではない。自然だ。
自然の代表と言えるのが植物だ。植物は人間や動物、妖怪の手によって伐採され採取されてしまう。しかし、植物はこれらの生活空間を侵食し続け、これらが作った道を飲み込み続けている。放っておけば全ては森に飲み込まれて消え去ってしまい、跡形もなくなってしまう。ほかにも自然と言えば川や天候、大地と言ったものがあるが、どれもこれも敵わない物ばかりだ。
そこで俺は、「自然の具現物である妖精はとても強いはずだ。しかし、感じられる妖精の力は弱い。何故だろう」と考えた。その答えが今日あの妖精たちに出会って分かった。
あの妖精たちからは、普通にたくさんいる妖精たちとは異なった質の力が感じられた。おそらく、同じ自然から生まれた妖精の数が少ないのだろう。
自然の力は強いが、その全てが妖精になるわけではない。さらに、一つの自然から多くの妖精が生まれたり一人の妖精に力が偏ったりと、さまざまな要因で自然の力が分配されて一つの力が小さくなっていくようだ。だから弱くなってしまう。
ちなみに、自然は時たま自らを守るために、もしくは自らを誇示するために強い妖精を生み出すことがある。俺は、この力の強い妖

精のことを特に“精霊”と呼んでいる。
「さっきの妖精は……強いほうかな？精霊には程遠いけど」
屋敷に帰ったら妖精についてまとめておこう。これから行く大図書館で妖精についての本を借りてくるのもいいか。
「楽しみだな～」

＊＊＊

紅魔館の近くまで行くとまた森に入った。そして森を抜けた先にあったのは、
「道、だよな」
立派な道であった。道は紅魔館の塀に沿って作られている。
「道がある。ここで行き止まりになってはいるが、向こう側はおそらくほかの道に繋がっている。人里にも繋がっている。つまり、遠回りになるが歩きやすいこっちを通ったほうが早く着いたかもしれない」
……チーン
「慧音何故に！何故にこの道を教えてくれなかった！」
いやさ、確かに俺は人里から紅魔館までの最短距離を聞いたよ。だけど、それは最も早く着く道のりを聞きたかったわけであって、本当の最短距離を聞きたかったわけではないんだし。何であの時「道は無いのか」ぐらい聞けなかったんだ俺は！　そういえば慧音、俺に最短距離を教えてくれた後なんか言っていたな。確か「この他に道があって……」とか言っていたけど俺はその話を聞く前に、お礼だけ言って人里を飛び出してきたんだな。もしかしたら、慧音がその時話そうとしていたのがこの道の事だったのかもしれないな。だとすると悪いのは慧音の話を最後まで聞かなかった、俺か！
わお。なんという自業自得。人の話はちゃんと聞こう。
なんて、後悔と反省をしながら俺は塀に沿って歩いた。取り敢えず、紅魔館の門を探さなければならない。

「しかしこれは……。すごいな」
紅魔館は紅かった。紅い。“赤い”ではなく“紅い”。とにかく紅い。そして大きい。しかし、大きい割には窓が少なそうだ。気になる。
魔理沙に「とにかく真っ赤な館だぜ」と聞いていたし遠目から見てものすごく紅いと言うのは分かっていたけど、まさかここまで紅いとは思わなかった。
「あ、発見」
紅魔館に見入りながらしばらく歩いていると大きな門があった。門番さんもいるようだ。悪魔の館の門番か。どんなんだろう。妖怪かな？人間かな？そらないか。人間は食われるって聞いたし。
興味津々で門番さんに近づく。
「こんにちは」
コミュニケーションの基本。明るい挨拶。
「すぴー」
寝ていた。

＊＊＊

「すぴー」
門番さんは長く紅い髪を持つ女性だ。妖気が感じ取れるところから妖怪のようだ。それもかなりの実力者と言うことが妖気の質から分かる。
妖怪が門番をしているのだから館の家主は普通ではないだろうな。あ、悪魔の館って聞いていたんだった。
「すぴー」
薄緑のチャイナ服と同じ色のチャイナ帽。チャイナ帽の前面には星型の中に「龍」と書いてある。
「すぴー」
「起きないな」

ゆっくりと門番さんの手前まで近づく。これだけ近づいても気がついて起きないとは門番失格ではないか？　いや、居眠りをしている時点で失格か。
「すみませーん」
とりあえず声をかける。このまま黙って門を開けて素通りしてもいいが、それでは家主に悪印象を持たれてしまう。この館の家主とは図書館を利用する上で友好的な関係を築きたい。
だから、ここで門番らしき妖怪に起きてもらって正式に中に通してもらう必要がある。
その為には、まずこの門番さんに起きてもらわなければならない。
「ぐー」
「すみませーん」
「かー」
「すみませーん！」
「くー」
「……」
起きない。大声でも起きない。
ぺちぺち。
「起きてくださーい」
残り少なかった間を無くして、居眠り門番さんの頬を叩く。
「んん～」
起きたか？
「咲夜さん……ナイフを刺さないで……」
寝言だった。駄目だった。起きないや。
しかし、ナイフを刺さないでって寝言で呟いてめちゃくちゃ苦しそうな顔をするって、この門番さんはどんな夢を見てるんだ？　拷問の夢？
夢は記憶や体験を整理するための時間だっけ。確か整理中に夢を見るんだったな。時たま入ってくる獏に悪い夢を食われる以外は、整理中にいい夢も悪い夢も見るんだったな。

なんてのは今はどうでも言い。
「どうしようかねぇ」
このまま通ってしまうか。
「別にいいかな〜。この位で怒るほど妖怪の器は小さくないか」
なーんて自分に言い聞かせて門の鉄格子に手をかけた瞬間、前方から何かが大量に飛んできた。
「うおお！」
緊急回避。鉄格子から外れて塀に隠れた。
飛んできていたものはナイフだった。飛んでくるものを数本捕まえてみたが、銀のナイフが大量に飛んできたのだ。
「紅魔館に不法侵入しようとは、どこの世間知らずでしょうか」
若い女性の声がした。ナイフを投げてきた人物だろう。
「このまま帰れば見逃してあげますよ」
言葉の一つ一つに寒気を感じる。凄まじい殺気だ。常に死の中に身を置いてきた者から感じられる殺気。相当の実力者だろう。俺の背中に当たるこの紅い塀は、今の相手にとって何の障壁にもならないだろう。対応の一つ誤れば読書どころか、命が危ない。
まあ、死にはしないけどな！
「早く行きなさい」
はい、遊んでいる場合ではなかった。
「すみません。無断で進入しようとしたことは謝罪します。しかし、門番さんが寝ていて　起きないのです。なのでこのまま立ち往生するより……」
言い終わらないうちに俺の前方ちょい右。つまり、居眠り門番さんの正面に銀髪のメイドさんが忽然と現れた。
驚かないぞー幻想郷だしな。この一言で片付くってすごい。
現れたメイドさんはナイフを構えていた。
「起きなさい、中国」
言い終わると同時に、メイドさんは中国と呼んだ居眠り門番さんに数本のナイフを投げつけた。

「あいたー！」
寝付きのいい居眠り中国さんでも、頭にナイフが刺されればさすがに目を覚ますようだ。逆に言えば、頭にナイフが刺さらないと起きない。ものすごく異状と思うのは俺だけなのだろうか。
というか、頭にナイフが刺さって痛いで済むのか？何の妖怪だ？
いくら妖怪と言えどもきついだろう。
「ひどいです、咲夜さん！」
「ひどい？また居眠りをしていたのでしょう、中国。一体いつになればまともに門番の仕事が出来るのかしら」
咲夜さんと呼ばれたメイドさんはナイフを構える。
「わー！　居眠りなんてしていませんよ！　咲夜さんの見間違いじゃないんですか？」
汗と血をたらしながら中国さんは言い訳を言った。しかし、寝言までしておいてその言い訳は苦しすぎる。
「じゃあ、お客様が来ていたにも関わらずご案内しなかった、不親切な門番にお仕置きをしなければならないわね」
メイドさんがちら、とこちらを見た。起きたて中国さんもそれに合わせてこちらをちらと見た。見た瞬間に顔が青くなっていく。
いや、中国さんや。すぐ隣にいたのに気が付かなかったのか？俺ってそんなに影薄かったかな。ちょっとショック。
そしてこちらを向いたメイドさんの微笑が恐ろしい。
「ご、ごめんなさい！次からはちゃんとやります！だからナイフは投げないで……」
「黙りなさい、中国」
やばい！
メイドさんが必死に命乞い（？）をする起きたて中国さんの言葉を遮ると同時に、とっさにそう感じた。俺はすぐに左に大きくジャンプして、起きたて中国さんから距離をとった。
次の瞬間、起きたて中国さんの周りに大量のナイフが現れて、その全てが一斉に起きたて中国さんに刺さった。

……どうなってるんだよ。これ。
起きたて中国さんは断末魔とナイフと共に自らの血の海へと沈んで、血まみれ中国さんになった。自業自得の事なのに少し同情してしまう。
……死んでないよな。
そんな血まみれ中国さんを作ったメイドさんがこちらを向いた。
「門番が失礼をしました。私は紅魔館のメイド長を務める十六夜咲夜と言います。咲夜とお呼びください」
なんという切り替えの早さ。さすがメイド長。
咲夜さんは十六ぐらいなのだろうか。いや、女性の年齢をあれこれ考えるのは失礼か。銀髪の三つ編みに青を基調としたメイド服、白い肌に深い深い藍色の瞳は、全てを吸い込んでしまいそうだ。全身から落ち着いた雰囲気と隙の無い雰囲気を漂わせている。変な動きをしたらすぐに殺されそうだな。変に動いたりしないけど。
「俺は魔術師の綾野誠です。紅魔館に大図書館があると聞いてやってきました。大図書館への入館許可を頂きたいのですが、よろしいでしょうか」
「私では決めかねますので、ただいま主人に伺ってまいります。それまでは玄関ホールでお待ちください。では、お入りください」
「わかりました」
門を通ると、美しい前庭があった。咲夜さんによると、庭の手入れは全て中国さんがしているそうだ。かなりの腕前だ。庭に植えられている全ての植物が活力に満ちて輝いている。
「さあ、お入りください」
前庭を過ぎて玄関に着くと、咲夜さんは紅魔館の中へといざなってくれた。
俺は、紅魔館へ足を踏み入れた。
俺は、死の危険へと足を踏み入れた。

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

少しだけお久しぶりです。紅炎です。
昔書いた物を、色々直して書き加えて投稿します。
さて、実は『魔術師が人里にて』を読んでくれた友達から色々とアドバイスを頂いておりました。
曰く、「主人公の設定が分からない」
曰く、「オリキャラの設定にブレがある」
曰く、「戦闘シーンが無いｏｒつまらない」
他にも色々とあるのですが、この辺で止めておきます。心が折れそう。
と言う訳で今作品「魔術師が紅魔館にて」では戦闘シーンをがんばって書きたいと思います。あと、誠くんの能力の簡単な説明。能力については近々詳しい物を書きます。

さて、最後になりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございました。

ご意見・ご感想は随時受付中です。

３／２１　８：４５　いきなり訂正ってどうよ…

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

キャラの口調は想像ですのでご注意ください。

魔術師が紅魔館にて？

「こちらでお待ちください」
そう言って、咲夜さんは吹き抜けかつ広い玄関ホールの正面の階段を上ってどこかへ行ってしまった。
「中も真紅だな。しかも薄暗いと来た。とことん目に悪そうだ……」
懐から手帳を一冊取り出し、あるページを開く。そのページには魔術陣が描かれていた。隣のページにも魔術陣が描かれているが、二つは別のものだ。
「我が独学から第二章三番『暗視』」
詠唱が終わると視界が明るくなった。
魔術書『我が独学』の第二章は、補助系の魔術をまとめてある。また、今開いた手帳が魔術書の『我が独学』で、詠唱時に使用する魔術陣が描いてあるページを開いておくと魔力の消費や体への負担が少なくなる。他に魔術の発動が速くなったり、大型魔術をより精確に発動させたりと言う事もできるのだ。
俺は、先ほどよりははっきりとした視界の中で手近にあった壁に触れた。ひやりと冷たい感触が伝わってくる。
「ん？」
なんだろうか。滑らかな壁に指を滑らせていると、一箇所だけ凸凹なところを見つけた。よく見ると壁に何かがこびり付いている。爪を立てて削り取ってみるとそれは簡単に削れた。
「これは……血か？」
爪の間に挟まった物は、赤黒い粉末状の血だった。変色が進んでいるのと見ると、相当昔の物のようだ。
「何でまた、こんな所に血なんかくっ付いているんだろうねえ」
案外、この屋敷の塗装に使ってあるのは生き物の血液だったりするのかも。だったら気を付けないとな。
「綾野様」

「あ、はい」
咲夜さんがいきなり後ろから声をかけてきた。いつの間にいたんだろうか。心臓に悪い。さっきの中国さんの時と言い、神出鬼没な人だ。
「主人が直接話をしたいということなので、こちらへどうぞ」
「わかりました」
そう言って、先ほどの階段を上っていく咲夜さんに付いて行きながら俺は考えていた。咲夜さんの能力についてだ。最初は魔力を感じられないから空間移動系の能力者かと思っていたが、そうではないようだ。
中国さんをハリネズミにした時、ナイフは中国さんを中心に四方八方から飛んできた。空間移動を使えば中国さんの周囲に一瞬でナイフを配置することは簡単だろう。しかし、空間移動系の能力は、空間移動後の物体は運動エネルギーを持つことができないと言う制約がある。つまり、空間移動後の物体は速さが0になって重力にしたがって落下するしかないのだ。
しかし、咲夜さんのナイフは垂直移動や上昇移動していた。これは何故だろうか。
もしかしたら力の方向性をいじる方向性操作の能力も持っていて、ナイフを空間移動させたときに重力の方向性も変更したのか。それとも単純にナイフを空間移動させたときに別の力も加えたのか。
いや待て、重力の方向性を変更させてもあそこまでの勢いは出るのだろうか。重力による落下スピード　ナイフの飛ぶスピードとなるから、あそこまでの勢いは出せまい。別の力を加えるにも、大量にあるナイフ一本一本に力の方向を間違えず精確に力を加えるなんて事できるのだろうか。これをあの短い間に成し得るとすれば、それはまさに神の領域と呼べる。この二つの可能性は非常に低いな。
となると残る可能性はただ一つ。俺の知らない能力を持っているということだ。
今までさまざまな書物を読んできたが、俺の知らない事はまだあ

るということだ。当然だが。未だ知らぬ物に出会う事はいつどんな時でも楽しい。わくわくする。
「綾野様、どうかなさいましたか？」
「え？」
先導していた咲夜さんが振り向いて言った。
「いえ、なにやら楽しそうな雰囲気を感じましたので。なにか面白い物がありましたか？」
咲夜さんは不思議そうな顔をしている。俺は後ろを振り向き、今まで歩いてきた廊下を見た。廊下はただ紅く、窓が少ないので薄暗い。内装は凝ったゴシック調になっているが絵画などの装飾品は一切なく、面白いなどとはお世辞でも言えない。
「あー。ちょっとだけ咲夜さんの能力について考えてみたんです。でもまったく分かりませんでした」
「分からないのが、楽しいのですか？」
「えっと、少し違いますね。俺の知らない事がまだまだたくさんあることが楽しいんです。ほら。知る学ぶって、楽しいじゃないですか」
「……そうですね」
あれ？さっきの間は何だろう。それになんで咲夜さんは微笑んでいるんだろう。綺麗だから良いけど。
「私の能力について興味がおありのようですね。お教えしましょう」
「良いんですか？」
能力。それは戦う上で重要な力。その能力は相手に知られていない事でもっと大きな力を発する。理由は簡単だ。未知に対する対策なんて打ちようがないからだ。しかし、その能力を教えるという事はその力を放棄すると言うことだ。本当にいいのだろうか。
「はい。私の能力は『時間を操る程度の能力』です。時間を止めたり、早くしたり遅くしたりできます」
「えっと……じゃあ中国さんをハリネズミにしたナイフは、時間を止めている内に投げてすぐに時間を動かしたんですか？」

「ええ」
「瞬間移動しているように見えるのは、時間を止めている間に移動しているからですか？」
「ええ。そうです」
わお。すごい。時間を操れるとなると戦闘では一気に有利になれる。時間に対する対策なんて打ちようがない。最強といえる。絶対に敵に回したく無い。
「しかしながら時間を操るという能力はとても強力なので、それに見合う程度の制約もついております。なので絶対的に有利ということはできません」
「そうなんですか。……まあ、当然ですか」
強力な能力には大きな制約。『世界』が取り決めたルールの一つだ。
ここで俺はふと思った。
「時間って、物の時間も止めれるんですか？　例えばりんごの時間を止めて腐敗防止とか」
「よい発想をお持ちですね。その通りです。物の時間を止めて腐敗や老朽化を止めることもできます」
「便利ですね～。じゃあ、咲夜さんは自分の肌の時間を止めて年齢を誤魔化して……」
いたり。この三文字は言えなかった。なぜなら、咲夜さんが満面の笑みを浮かべて俺の首元にナイフを突き付けていたからだ。残像があったから能力は使っていないだろうに、何故か能力を使うより早く感じた。
「何か、おっしゃいましたか？」
ビリ、ビリ。
ありえない！　この俺が雰囲気だけで押されている。悪寒が止まらない。早く手を打たなければヤバイ！
「えっと……」
「はい？」

「えっと……そう！　明日も晴れると良いな～と思いまして。薬草を天日干しにしなければならないんですよ」
ハハハハハ、なんて乾いた笑い声しか出てこない。
……神よ、俺はもうこの沈黙には耐え切れないぞ。
何か言おうと口を開こうとした時、
「そうですか。それは晴れると良いですね」
こう言って、咲夜さんが俺の首元からナイフを離した。ふうう、危機は脱した。
「一緒に頭も干してみてはどうでしょうか」
二度と下手はしない。

＊＊＊

俺たちは豪奢な扉の前にいた。
コンコン。
「お嬢様。客人をお連れしました」
「入りなさい」
部屋の中には“お嬢様”がいるようだ。咲夜さんの言っていた“主人”とは“お嬢様”の事なのだろうか。
「お入りください」
「失礼します」
咲夜さんに促されて俺は部屋に入った。続いて咲夜さんも入って扉が閉められる。
やはりこの部屋も紅い。奥に大きな窓があって外のベランダに出られそうだ。部屋の中にいたのは三人。部屋の中央の丸いテーブルで椅子に座って優雅にお茶をしている少女が一人。同じく椅子に座っているが、お茶はせずに分厚い本を読んでいる少女が一人。読書少女の後ろに立って控えている女性が一人。
全員が全員、普通ではなかった。
「はじめまして。魔術師の綾野誠です。この度は大図書館の入館許

可をいただきに参りました」
「あら、紅魔館にまでそんな用事で来る人間がいるのね」
今のはお茶をしている少女。ピンクのドレスに同じ色の帽子。水色のショートヘアーに紅い瞳。そして、背中に生える少女の身の丈ほどもありそうな一対の黒い蝙蝠の羽に、口元から覗く鋭い犬歯。西洋妖怪の代表と言っても良いほどの長い歴史と古い伝統、そして大きな力を持つ吸血鬼の特長だ。おそらくこの屋敷の主人なんだろうが、屋敷に窓が少ないのも納得がいった。吸血鬼は日光を嫌う。他にもニンニクや十字架、銀や流水が苦手だったはず。
「私は由緒正しき吸血鬼、スカーレット家の末裔。レミリア・スカーレットよ」
スカーレット……どこかで聞いたことがある。たしか、昔西洋で名を馳せた吸血鬼の血統だったかな。数百年前に一族が離散して潰れたはずじゃなかったっけな。
「私はパチュリー・ノーレッジ。大図書館を管理している魔女よ」
今のは本を読んでいる少女。薄紫のネグリジェに、同じ色で星と太陽の飾りがついた帽子。紫の髪はもう少し整えたほうが良いんじゃないかな。遠目から見ても蒼白に近いと分かる肌は、研究に没頭する魔女特有のものだ。眼鏡の奥には紫の瞳。紫多いな。かけている眼鏡は近眼用か？
「ん？　ノーレッジって、あのノーレッジ家？」
「どのノーレジ家よ」
「……かつて北欧で栄えた魔法一族。全世界の知識を集めた『知の大図書館』や、多くの魔法使い・魔女を輩出した『魔法学校』を抱えていたノーレッジ家」
「そうよ。私はノーレッジ家の一人。まあ、私は家出してきたはぐれ魔女だし、ノーレッジ本家も廃絶したって聞いているし、すべて昔のことよ」
なるほど。
そう思うと、俺はパチュリーさんの後ろに立つ女性に目を移した。

女性も気だついたようだ。
「あ、私はパチュリー様の従者をしている小悪魔といいます」
赤ワインのショートカット。こめかみと背中辺りからは黒い羽が一対ずつ生えている。白いシャツに黒のベスト、そして黒のスーツパンツ。紅い瞳。悪魔系は全員瞳が紅いのか。小悪魔とか言いながらその身に宿す魔力は悪魔並みだし。
「えっと、小悪魔さんですか？」
「はい。小悪魔です」
「小悪魔さん……なんですか？」
「はい。大図書館の司書もやっています」
俺はパチュリーさんに目で聞いてみた。
「小悪魔よ」
さいですか。
「そろそろ話をしても良いかしら」
レミリアさんが言った。
「あ、はい。お願いします。」
「あなたは大図書館を使いたいのね。私は別に良いけど、パチェはどうなの？」
「決まりさえ守ってくれれば別に良いわよ。本は読まれてこそ価値のあるものだから」
よかった。無駄足にはなりそうにない。
「ありがとうございます」
「でも、タダでって訳には行かないわね」
レミリアさんが何か考え始めた。
タダでない。何か代価が必要ということは、血かな？貧血で倒れない程度ならあげても良いけど、直接吸われて吸血鬼になるのも嫌だし、それ以前の問題として俺の血が美味いのかも分からないし。
「そうねえ。フランと遊んでもらおうかしら」
「レミィ！」
レミリアさんの言葉を聞いたパチュリーさんがいきなり大きな声

で言った。
「フランと遊ばせるって本気？」
「ええ本気よ。フランも遊び相手を探しているんだし、良いじゃない別に」
「でも……」
「主人である私が決めたことよ。曲げることは出来ない」
沈黙。何もしゃべっていないが、俺の後ろにいる咲夜さんも何かしらの動揺があったようだ。それまでは身じろぎの一つもしなかったのに、レミリアさんの言葉を聞いた瞬間に微かに動く音がした。小悪魔さんは逆に固まりきっている。
正直言って、いや言わんでも分かるだろうが、まったく話についていけない。つーかフランって誰。遊ぶだけなのに何故レミリアさん以外がそんなに怖い顔をしている。何故。何故。何故何故何故何故！……暇だから遊んでみました。
「あなたには大図書館を使う代わりに私の妹、フランドール・スカーレットと遊んでもらうわ。いいわね」
「はあ。それで大図書館を使わせていただけるのであれば問題ありません」
「決まりね。じゃあパチェ、案内をよろしくね」
「……分かったわ。行くわよ小悪魔」
パチュリーさんが立ち上がり、扉へと近づいた。咲夜さんが扉を開ける。
「誠ね。付いて来なさい」
「はい」
何か嫌な方向に諦めているような雰囲気を放つ三人。これは妹さんとの遊びに何やらありそうだ。恐ろしい。
しかし、それ以上に気になることがあった。
それは、フフフと微笑むレミリアさんの顔に、寂しさの影が横切ったことだ。

＊＊＊

「あの～」
「なに？」
ここは紅魔館の廊下。さっきから黙ったままのパチュリーさんに連れられて大図書館に移動中だ。
「レミリアさんの妹さんと遊ぶのに、何かあるんですか？」
部屋を出たときから気になって仕方がない。
「……名前はフランドール・スカーレット。レミィの実の妹よ」
さっき聞いたな。
「そしてフランは、気が狂っているの」
そうか気が……気が狂っている？
「幼い頃に狂気に捕まって、それ以来自分の能力でいろんなものを壊してきたって聞いてる。物も、生き物も」
「生き物を、壊す？　妹さんの能力って何なんですか？」
「『ありとあらゆる物を壊す程度の能力』って言って、『目』って言うものの最も脆い箇所を手の平に引き寄せて握りつぶすらしいわよ。実際に見たことはないけど、その気になれば巨大隕石でも壊せるんじゃないかしら」
おおい！　時間を操る咲夜さんすげーなんてレベルじゃない！
『目』を握りつぶして物を壊すなんて一撃必殺じゃないか。しかも瞬間で殺られそうだし。
いや、でもこれほど強力な能力なら『世界』からの制約がつくはず。制約を上手く逆手に取れば対策の打ちようがある。
「妹さんの能力の制約は何なんでしょうか」
「制約？　フランの能力に制約なんてあったかしら。小悪魔は知っている？」
「いいえ。知りません。無いのではないでしょうか。」
そういえば小悪魔さんが空気になっていたなじゃなくて何で制約がないんだー！　こっちが圧倒的かつ絶望的に不利。

いや待て。『世界』が掛ける能力の制約とは、『世界』自身が存続していくための一種のセーフティーロックだ。能力を無限に使用すると『世界』のパワーバランスが崩れて、『世界』自体が消えてしまう可能性がある。それなのに『世界』は『ありとあらゆる物を壊す程度の能力』という強力な能力に制約を付けていないはずがない。もしかしたら、この二人が知らないだけかもしれない。

「だとすると、知っていそうなのはレミリアさんか……」

「何の独り言？」

「あ、いえ。妹さんと遊ぶ時の事を少し考えているんです」

「ふーん。まあ良いわ。ほら、大図書館に着いたわよ」

着いたのは、さっきの部屋の扉よりも大きく豪奢な扉の前。紅魔館の建物からすると比較的新しい。

「館内では常識的に振舞うこと。呪いの本には気を付ける事。まあ、誠ぐらいの力になるとあんまり影響は無いから心配しなくて良いわ」

「わかりました」

パチュリーさんは扉の方を向いて、表面に両手をかざした。すると、手元の扉から細い光の線が何本も扉に走り、グネグネと曲がりながら先端が分かれたり線同士が合流したりを繰り返して扉の隅々まで行き渡った。

「おお……」

すごい。思わず感嘆の声を出してしまった。これは高度な施錠魔法だ。特定の人物が一定量の魔力を流し込み、組み込まれた魔法式を一つ一つ解いていく厳重なタイプだ。やはりそれほど貴重な本があるということか。

「開錠完了。さあ入りなさい」

大図書館に入った。閲覧室は入り口から階段を下りた作りになっているようで、入り口からは大図書館の内部を一望できた。さすが『大』が付くだけあってその広さが半端じゃない。この広さなら蔵書量もすごいだろう。内装はヨーロッパ風で申し分ないし静かだし。少しかび臭いのと埃っぽいのが玉に瑕だが、読書にはもってこいの

場所だ。
「本家にあった知の大図書館ほどじゃないけど、幻想郷じゃトップクラスの蔵書量よ」
俺は駆け出したい気持ちを抑えつつも、本棚へと早足で行った。
「あ。言うの忘れていたけど、」
パチュリーが何か言おうとしたときには俺は階段を下りきって、本棚へと向かっていた。そして本棚に近づいたとき、
「本棚近くの防犯魔法はまだ切っていないのよ」
感電した。
「ぎゃあ！」
「……人の話は最後まで聞きなさい」
ごもっとも。
ぷすぷすと煙を上げながら俺は思った。

＊＊＊

「はい。本棚周辺の防犯魔法は切っておいたわ。後は好きに読んで」
「ありがとうございます」
雷撃で麻痺している俺を横目に、パチュリーさんは壁にあったスイッチをいじって防犯魔法をオフにした。
「大丈夫ですか？」
小悪魔さんが駆けつけてくれた。やさしい小悪魔だ。
「いや、すみません。もうすぐ動けるようになります。ほら」
痺れが引いたのから立ちあがった。まさか防犯用の魔法が仕掛けてあるとは思わなかった。
「最近白黒魔法使いの襲撃が激しいから、防犯魔法は念入りに組み込んであるのよ。あの扉も前の襲撃で破られたからもっと強固なものに新調したばかりなのよ」
ん、ちょい待ち。

「白黒魔法使いって、魔理沙のことですか？」
「あら、誠も知っているの。あなたも本を盗まれたの？」
「いいえ。特に何もありませんけど……」
あいつか。この大図書館をここまで厳重にしたのは。それに本を盗むって。なぜ図書館の利用客のように借りていかない。
「魔理沙は本を借りるって言って持っていってるけど、一度も返しに来た例がないから困っているのよ」
収入がほとんど無いくせにあれだけ本を持っていたのはそういうことか。何やってんだあいつは。
「まあ、この話は良いわ。小悪魔、書架２２３番の整理をして頂戴」
「はい～」
パチュリーさんは大図書館の奥へと向かった。
「そうだ」
途中で立ち止まってこちらを向いた。
「誠。その堅苦しい口調をやめなさい」
これだけ言って、飛んでおくまで言ってしまった。
「……努力しよう」
軽々飛べるなんて羨ましい。
「あのですね！」
「のわ！」
いつの間にか小悪魔さんが後ろにいた。書架２２３番の整理に行っていらしたんじゃなかったのか？
「パチュリー様はですね、この大図書館に籠りっきりなので親しいお友達というものが少ないのです。ですから、同じ魔法を使う綾野様と親しくなりたいと思っているのです！　あ、ちなみに私にも敬語は不要ですよ」
ご主人の事を友達の少ない人と笑顔で評する従者は早々いないだろうな。しかし、すごい笑顔。
「綾野様、パチュリー様とお友達になって下さいますか？」
「え、ええ。これからも大図書館には何度か来るつもりです……だ

し、自然に友達になれると思いま……う」
「そうですか。それは良かった……は！」
小悪魔さんは何かに気がついたように、声にまで出してはっとした。
「妹様とお遊びになられるのであれば……もう短い命なんですね……」
「はい？」
いきなり悲しげになって言われた。表情がころころと変わる、なんとも感情豊かな人、でなくて小悪魔だな。
「少しの間ですが、パチュリー様のお友達になって下さりありがとうございます！」
小悪魔はそういい残して大図書館の奥へと消えた。
俺的な考えでは友達とは誰かに頼まれてなるものじゃなくて、本人たちでなるものなのだからこれからパチュリーと友達になっていくだろう。でも、小悪魔が言い残していった言葉によると俺の命は残り少ないようなのだが何で勝手に決めているんだこら。
……
「さーて、何を読もうかな」
手を伸ばしたのは『水魔法とその派生系』という分厚い本。苦手分野は早めに潰しておいたほうが良いからな。
辺りを見回して座れる椅子が無いか探した。奥に見つけた。
大図書館内は静かで、でも誰かのいる音がして、古い本特有のにおいと新しい本特有のにおいが入り混じり、本棚同士の奇妙な圧迫感があって。目を閉じると、昔幻想入りする前の屋敷の書庫が浮かび上がってくる。あの頃の書庫も、こんな感じだったはずだ。まだあの頃から十年ほどしか経っていないが、もう大分昔のことのように感じられてほとんど覚えていない。
椅子は木製でクッションの敷かれた椅子だ。肘掛もあり読書しやすい椅子だ。
俺は過ぎてしまった時に一抹の寂しさを覚えながら、本を読み始

めた。

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

昔書いた物を基盤にしているので、決して執筆速度が速いというわけではありません。紅炎です。
さて、今回は誠くんの能力説明を中心にしました。戦闘シーンはフラン戦で。誠くんの過去にも少々触れましたが、詳しく書くのはまた後日となります。

ここまで読んでくださりありがとうございます。
ご指摘・ご感想をお待ちしています。

３／２３追記
作中のスカーレット家とノーレッジ家の設定は公式設定にはありませんので、注意して下さい。
３／２４追記
『眼』→『目』へ
「…最も脆い箇所を近くに引き寄せて…」
←←←←←
「…最も脆い箇所を手の平に引き寄せて…」へ
修正させていただきます。

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

オール能力説明。場面は進んでいます。
作中に出てくる魔法や魔術に関する知識は、９９％を作者の独自解釈が占めていますので参考にはなりません。注意してください。

魔術師が紅魔館にて？

読書を始めてから時間が過ぎ、夕日が傾いて大図書館の中は暗くなった。今は小悪魔が持ってきてくれたランプの明かりで本を読んでいる。

ちなみに、今読んでいる本は『狩猟の基本・解体編』と言う本だ。そろそろ自分の手で肉を食べたくなってきた。

「誠様、失礼します」

顔を上げると小悪魔がいた。今はランプがあるから暗視を掛けていない。そのせいか、暗い中ランプに照らされた小悪魔はなにやら艶めかしく見えた。気のせいかも知れんが。

「パチュリー様がお呼びです。来ていただけますか？」

「もちろん」

本を閉じて椅子の上に置く。どうせまた戻ってくるだろうし、このままにしておいても大丈夫だろう。

小悪魔について暗い大図書館の中をずんずん進むと、年季の入った大きな机で何かを書いているパチュリーを辛うじて見つけた。何故辛うじてかと言うと机の上にも周りにも本が山となり積まれているので、本と本の狭い隙間からしかパチュリーを見つけられないからだ。地震が来たら本に埋もれて死ぬタイプだな。

「ああ、来てくれたのね。適当に座って」

「無理を言うな。椅子は全部本が座っている」

「適当に本をどかして座ればいいじゃない」

「はいはい」

近くにある椅子を占領している本の山を床に下ろす。他に床から立っている本の山はあるのだし別に構わないだろう。机の本もいくらか下ろしておく。話し相手の顔が見えないと言うのはなんとも話しづらい環境である。

「で、何のようだ？」

「誠がどんな魔法を使うのか興味が湧いたわ。教えてくれないかしら。確かこの辺りに……」
パチュリーは机の上や中をガサゴソしながら言った。何を探しているのだろうか。
「あったあった」
パチュリーが引き出しの中から引っ張り出したのは一枚の白い紙だった。大方、記録用に使うのだろう。
「何でいきなり」
「だって誠、フランと遊ぶんでしょう？　誠しか知らない魔法があったとすればそれが失われてしまう。私たちにとって魔法が失われることは最も避けるべきことよ。だから聞くのよ」
当然みたいな顔をしているんだ。
「俺が死ぬことは決定事項か？　俺はまだ死ぬつもりは無い。『ありとあらゆる物を壊す程度の能力』だろうがなんだろうが、俺は必ず生き残ってやるよ」
これを聞いてパチュリーは、はあ……とため息をついた。
「甘いわね。誠はフランを甘く見すぎよ。イチゴのショートケーキに黒砂糖の塊を乗せて、さらにその上から黒蜜をたっぷりとかけたお菓子より甘いわ」
「それは……」
想像しただけで胃もたれのするお菓子だこと。どこの甘党が考えたんだ。いや、考えたら本当に胃が重くなってきた。
「どうしたの誠。いきなりお腹を押さえて」
「いや、なんでもない。」
甘ったるすぎて名前の付けようが無いお菓子を、思考を切り替えて頭の外に追いやる。
「魔術……パチュリーたちの魔法と同じものなんだが、魔術を教える位いいけど、その代わりにパチュリーの使う魔法も幾つか教えてくれ」
「分かったわ。契約書を書いておく？」

「そこまでしなくてもいいだろ」
そうね、とパチュリーは言った。
魔法魔術を扱う俺たちにとって『契約』とは、社会的に重要性のある約束事なんてレベルの重要さではない。自分と相手の命を懸けた繋がりと言っていい。
魔法使い・魔女・魔術師は、魔法魔術を行使する時に必ずどこかで精霊・神・悪魔といった、魔術的に力を持った存在と契約しなければならない。魔法魔術とは『世界』に対して矛盾した技だ。火の無い所に火を出したり、水温の高い水を瞬時に凍らせたりと矛盾だらけなのだ。このような矛盾を可能にするのが『世界』より生まれでた精霊・神・悪魔なのだ。直接こうした存在に頼らない魔術を行使しても、まったく無関係であることは絶対にない。
俺たちは『契約』によって縛られ、取り交わした『契約』は絶対なのだ。
「さて、何から話せばいいのかな」
「そうね。誠の能力は何なの？私は『火水木金土日月を操る程度の能力』だけど」
「俺の能力か？　俺は『魔術を使う程度の能力』と『魔力を具現化させる程度の能力』だ」
これを聞いたパチュリーは目をぱちくりとさせた。
「誠って二重能力者だったの。すごくうらやましいわ」
「そうでもないぞ。広範囲攻撃性も高威力攻撃性も無い能力だ。で、他には？」
「贅沢者ね。じゃあ、誠の使っている魔導書を教えて」
「魔導書か。魔導書は使わないが、魔術書なら使うぞ」
見せて、と言われたので懐から取り出して手渡した。パチュリーは早速中を見ている。その顔は、最初は興味津々と言ったような顔だったのだが、段々と難しい顔に変わっていった。
「ねえ、誠……」
「どうしたって、聞かなくても分かる」

パチュリーの言葉を遮って言った。昔から良く聞かれていたことだ。
「何で魔術陣と識別番号とちょっとした補足しか書いてないか、だろ？」
パチュリーはコクンとうなずいた。
俺の見てきた魔術書では魔術陣と呪文はもちろんのこと、魔術構造式・その魔術の理解の仕方・魔術の効果・効果に対する副作用・最も効果を発揮させるための条件などなど、他にも様々なことが書かれていた。これらは魔術を発動させるために必要な材料と言えるのだろう。多分これらは書かれているのが普通なのだ。
しかし、俺の魔術書『我が独学』にはこれらは一切書かれていない。
「こんな魔術書でどうやって魔術を使うの？」
「それは秘密」
「教えてくれたっていいじゃない」
「そうは行かないんだ。門外不出の魔術技術でね」
代わりに、と俺は右人差し指を体の横でピンと立てて言った。
「『永続回路の魔術式』って言う、いったん魔力を入れれば半永久的に魔術が発動し続ける魔術式を教えるって言うのはどうかな」
「半永久的に……すごい。そんな技術が本当にあるのね。それでいいわ。教えて」
またもや興味津々の顔になった。いやー魔術の研究に関しては分かりやすいな。
「欠点として魔術式が複雑になると上手く発動しないって言うのがある。だから実践での使いどころは考えなければならない」
「……それを先に言いなさいよ」
またもや難しい顔をしている。顔にしわが増えてくぞ？　特に眉間。
「あー。魔術書の秘密を聞くほうがよほど有益だったのに」
「まあまあ、そう言わずに。『永続回路の魔術式』はまだ研究の余

地があるから、自分で新しく理論を展開させればいいじゃないか」
ジトッとした目でこちらを見られても困る。ここまでやられると、さすがに悪かったかな、と思ってしまう。
「……研究の経過はもちろん記録してあるわよね。三日以内にその研究書を全て大図書館に寄贈するならいいわよ」
う。研究書を持っていかれるのは痛い。しかも三日以内と来た。これでは途中途中にしたほかの研究のメモと消すことができない。しかし、騙すようなことをした代価としては対等なのだろう。多分。きっと。
「分かった。三日以内に持ってこよう」
じゃあこれ契約書ね、と渡された紙にはすでにパチュリーのサインがしてあった。いつの間に作ったんだ。
渡された羽ペンでサラサラとサインをしてパチュリーに渡した。
「そういえば、ずいぶんと話がそれたわ。……誠の得意な魔術は何？」
やっと本題を思い出したようだ。俺も忘れていたのだが。
「炎魔術と風魔術。この二つは属性精霊と簡易契約していて、比較的使いやすいから好きなんだ」
「風魔術はどんな風に使っているの？」
「主に道具の移動に使っているな。道具一個一個に風を纏わせて指定した場所に動かすんだ。後は、体に纏って動きの補助をしたり落ちた時のクッションにしたり、相手に纏わせて足止めしたり吹き飛ばしたり。でも相手に纏わせるのはあんまり強くはできないな。それから飛ぶときの補助に使うこともある。まあ、風の精霊とは簡易契約しかしていないから基本的に強力な力を使うって言うのできないな。無理やり引っ張り出せばできないことも無いが、体への負担と魔力の消費が大きいし、下手すれば精霊との契約も切られるかもしれないからあんまりやらない」
パチュリーは次々としゃべる俺の言葉を、次々と分かりやすく紙にまとめていった。さすが魔女。筆記速度は並じゃない。

「攻撃には使わないのかしら」
「攻撃をするときは『我が独学』の風魔術を使っている。精霊の風魔術は補助的な役割だな」
「ふんふん。炎魔術はどんな風に使っているの？」
「炎魔術は明かりのために使うな。松明とかランプとか。まあ、雑魚妖怪とか妖精には簡単な牽制攻撃として使っている。でも、本当の攻撃の時には『我が独学』を使うんだ」
「それ以外の魔術は？」
「魔術式を紙に書いてそれを投げつけるって言う戦闘スタイルがあるが、特に新しい魔術って言う感じはしないな。札を使うので威力の強い魔術として『龍の望郷』って言う魔術があるんだが、これはただ単に地脈の力を上に向かって放つだけだし。説明面倒だから実物を一枚やるよ。これはちゃんとした魔術陣も書いてあるし、解析すれば色々と見つかるぞ。」
俺はパチュリーに札を一枚あげた。
「そう。ありがとう。……こんなものかしら」
パチュリーはカリカリと走らせていた羽ペンをインクビンの中に戻して、ふぅっと息をついた。
「約束通りパチュリーの魔法、そうだな、水魔法と土魔法を教えてくれ」
「分かったわ。水魔法はね……」
この後、一時間半にわたって水魔法と土魔法についての講座が開かれた。理由は簡単。俺があまりにも水魔法や土魔法が苦手だったからだ。情けなし。しかし苦手範囲が少し狭まり、パチュリー先生による一時間半の講義は無意味なものとはならなかった。
「あれだけの講義を受けておいてまだこれだけしか理解できていないなんて、誠は今まで何をしていたの？」
しかし、パチュリーはご不満のようで（当然か）、ただ今かなりの量の小言をいただいております。
「あー。得意範囲の研究とか、だな」

「向上心が無いわね。だから上達しないのよ」
ごもっとも。
ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。ごーん。
そのとき丁度振り子時計の鐘がなった。ただいまの時刻は午後八時のようだ。
「パチュリー様。綾野様」
「のわ！？」
突然現れた咲夜さんに俺は思いっきり驚いた。何の気配もしなかった背後から声を掛けられたら誰でも驚くだろう。
「うるさいわね誠。少しぐらい静かにできないの？」
「普段から静かなんですけど……」
「夕食のお時間ですので大広間へお越しください」
「咲夜さん、次からは普通に現れて……」
「分かったわ咲夜。すぐに行くわ」
俺の言葉を途中で遮らないでほしい。二人とも俺を無視しないでほしい。今は本当に泣きたいです。
「綾野様の分も準備されていますのでお越しください」
「へ？　良いんですか？俺みたいなよそ者が同席して」
「はい。もう準備してありますので」
意外だった。しかし断る理由は無い。というか絶対に断らない。正直うれしい。このままだと妹さんと遊ぶ前に空腹で倒れそうなのだ。
「ではお言葉に甘えて」
ついでに、レミリアさんに聞きたいことも聞いてしまおう。

＊＊＊

咲夜さん達に付いて行くと、一際大きく豪華な扉の前に着いた。紅魔館で見てきた中で一番大きな扉だ。咲夜さんが扉をノックして

開く。
「失礼します」
咲夜さんはそう言って入る。パチュリーは黙ったまま、小悪魔と俺は咲夜さんに倣い、挨拶をしてから入る。
どうやらここは大広間のようだ。シャンデリアの光がまぶしく絵画とアンティークが飾られている。ここもやはり窓は少ない。
広間の中央には十人は余裕で座れる長テーブルがあった。一番奥の上座に当たるところには当然、当主であるレミリアさんが座っている。
「綾野様の席はこちらになります」
「ありがとうございます」
示された場所は当然のごとく下座で、当主と真っ向から視線が会う場所。
嫌だ～。吸血鬼の目の前で堂々と食事が出来るほど俺の神経は太くないぞ。絶対に食った気にならないよ。
座って周りを確認する。椅子には当主とパチュリーと小悪魔と中国さんが座っている。あと二席空いている。一つは咲夜さんの分だろう。だがもう一つの席は誰のだ？
「さて、人間。由緒あるスカーレット家の紅魔館で最後の晩餐をするのだから名誉に思いなさい」
「私は健康第一の人間ですので一日三食はきっちりと食べます」
何で俺は死ぬことになるんだよ。まだまだ、やりたいことはたくさんあるんだよ。
「そう。今のうちに強がっておきなさい」
さいですか。強がっておきますよ。
少々の沈黙の後、俺は聞かなければならないことがあるのを思い出した。
「御当主」
「レミリアよ。そんな堅苦しい名前で呼ばないで頂戴」
あら、意外とフレンドリー？　ある意味酔狂なお方だ。

「それではレミリアさん。妹様の能力『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』の制約が何か教えていただけないでしょうか」
そう言うと、レミリアさんはにやりと不敵に笑った。
「やっぱりね人間。怖きなってきたのかしら」
「いいえ。使える材料は全て使いたいので」
今度はこちらが不敵な笑みを浮かべる番だ。
「全てを使えば、妹様の負う怪我の数も減るでしょう」
レミリアさんはあからさまに、気分が害された、と言う表情をした。
「……まあいいわ。じゃあ教えてあげる。フランの能力に制約なんて無いわよ」
「そうですか。ありがとうございます」
何か今度は明らかに不満顔をしている。淡白な俺の反応にご立腹なのか？
「失礼します」
丁度話が終わったところで咲夜さんがワゴンを押して入ってきた。次々と料理を並べていく。
並べられた料理は吸血鬼が正面にいなくても食べた気のしないような格式高いものだった。庶民派の俺には似合わない、超が付くであろう高級フランス料理。が、文句を付ける気は無い。出されたものはありがたく頂戴するしかない。これは作ってくれた人に対する感謝であり、俺の血となり肉となってくれる食べ物たちへの感謝でもあるのだ。ああ、自然よありがとう。
咲夜さんが料理を並べ終えて席に着いた。それを見てレミリアさんが立ち上がった。
「知らないのは居眠りをしていた中国だけだと思うけど、一応客人の紹介をするわ」
「お嬢様！　私は中国じゃなくて紅美鈴です！　それに居眠りなんてしていません！」
「静かにしなさい中国。お嬢様のお話の途中よ？」

へー。中国って名前じゃなかったんだ。知らなかった。確かに見た目中国だな。
俺が変な感慨に耽っているときに、中国さん、改め美鈴さんが訴えた途端に咲夜さんが後ろに現れて両肩を握った。あれ？握った肩がミシミシいっていますよ咲夜さん。完璧すぎる作り笑顔がとても怖いですよ咲夜さん。
「ご、ごめんなさい。お嬢様。咲夜さん」
美鈴さんが言うと咲夜さんが席に戻った。レミリアさんが続ける。
「彼はパチュリーの大図書館を利用する代わりにフランと遊ぶという条件を飲んだ酔狂な人間よ。後は自己紹介して頂戴」
面倒臭いからこっちに投げてきたようにしか思えない。
「レミリアさんから紹介に預かった綾野誠です。魔術師をやっています。まず、妹さんと遊んで死ぬ気はありません。生きて帰ってきます。また、今後とも大図書館を利用したいので、紅魔館の方々とは友好的な関係を築いていきたいと思います。よろしくお願いします」
俺はまだまだ図書館の本を読みたいんじゃ。死んだりはせんぞ。
「では、綾野誠の最後の晩餐を祝って、乾杯」
まだ言っているよ。と思うけど、乾杯、と言っておく。別に死ぬことを認めたわけではない。それに、和を乱したらレミリアさんに殺されそうだからだ。
いや、一番怖いのはやはり咲夜さんか。
しっかし嫌な食事風景だな。料理はおいしい。酒もおいしい。しかし、誰も喋らない。堅苦しいと言うより重苦しいって言ったほうが正しいな。上級身分の食事ってこんなものなのかな。
思えば今日はただ本を読みに来るだけのはずが、気の触れた吸血鬼と遊ぶなんて厄介な事になってしまった。俺は平穏を願う平和主義の人間なのに。
切に願うよ。これ以上厄介な事が増えませんようにと。

＊＊＊

夕食後は紅魔館の一室を借りて休憩していた。

「いえーい。自由時間だー」

自由時間だからといって紅魔館をうろうろしていたら咲夜さんのナイフで刺されるけどな。

「今の装備を確認しておくか」

ローブのあちこち、服のあちこちから札やらクナイやらその他諸々やらを取り出してベッドの上に広げる。

えーと、獄符は火が三枚、水が二枚、風が二枚、木が一枚。媒体つきのクナイが四本。媒体の棒が五本。風魔術の魔術陣が描かれている薄手の手袋一セット。『跳躍』の魔術陣を描いてある靴が一足。『遮断』の魔術陣が描いてあるローブが一着。そして魔術書『我が独学』が一冊。これで全部。

「獄符は大量に押し寄せてきた雑魚妖怪どもと、中途半端に力のあった妖精にしか使っていないな。それでも八枚で吸血鬼相手に足りるか？　帰りの分もあるしなぁ」

獄符とは相手を閉じ込めることに重点を置いた魔術だ。獄に閉じ込め、その中で攻撃するのだ。

「媒体は全部クナイにしておこう」

俺の『魔力を具現化させる程度の能力』とはその名の通り、この身に宿る魔力を具現化させることができる。注意したいのが、具現化は体内外で魔力を気体・固体・液体にできると言うこと。魔力で作ったものを体から離して一定時間が過ぎると、自然に吸収されてしまうこと。純粋な魔力を使うので魔力を消費が大きいと言うことだ。あと、作ったものは全てが黒くなる。

さて、この能力の一番の欠点は魔力で作ったものを体から離して一定時間が過ぎると、自然に吸収されてしまうことだ。そこで、俺は魔力で作ったものに“核”を与えてもっと長い時間形を保てるようにした。その“核”を俺は“媒体”呼ぶ。媒体には魔力を吸着さ

せる魔術式が書いてある。これが形を保たせるのだ。
俺は媒体を手に取ると一本ずつクナイに変えていった。
「風魔術の手袋と跳躍の靴と遮断のローブは何にもいじらなくてよさそうだな」
俺は物に直接魔術陣を書いてより早く魔術が発動するようにしている。結構便利なんだこれが。
全ての装備品を見終わると元の場所に仕舞い直した。靴を履いてローブを着て手袋をはめて、札はローブや服のポケットに入れて、クナイは腰に巻いてあるレボルバーに入れて落ちないようにして、完了。
「あー。後は暇だなー」
本も借りそびれたし。時に何か面白いものを持っているわけでもないし。咲夜さんが呼びに来てくれるまで暇だし。
ああ、こんなときは、
「寝るに限るな」
手袋をはずしてローブを脱いで、腰からレボルバーをはずして、ベッド脇のテーブルの上にどっさりおいて、靴を脱いで、ベッドにダイビングして。
「おやすみー」
誰が聞くことも無い言葉を発して、俺は眠りに就いた。

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

ちょっと停滞しました。紅炎です。

なんか今回は誠君の能力説明ばかりにってしまいました。申し訳ないです。本当は第三部でフランとの戦闘シーンを出す予定だったのですが叶いませんでした。第四部では必ず出ます。というか、今もう書いています。お楽しみに。

紅魔館編は五部で終了予定です。あと少し付き合ってください。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。

ご指摘・ご感想をお待ちしています。

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

今回は戦闘シーンを盛り込みました。
※注意※
「Ｒ１５」・「残酷な描写あり」にしましたのでご注意ください。

魔術師が紅魔館にて？

どれほど寝たのだろうか。重く低く鳴り響く鐘の音で目を覚ました。

鐘の音は建物を震わせ、聞く者に何かしらの重圧を感じさせるような音だ。しかし、この重々しい音が聞いていて心地よい気もする。

「……」

そう言えば、どこだっけここ。間違いなく自分の部屋じゃない。頬から伝わる布の感触が違う。

我が家には無い窓から月の光が差し込んでいるが、残念ながら満月では無いようなので部屋は暗い。

「我が独学から第二章三番『暗視』」

真っ暗な世界からある程度まで見えやすくなった視界には、真っ赤な壁が一面に飛び込んできた。

ああ、そうか。思い出した。俺は紅魔館に来ているのだった。大図書館を使った代わりに御当主……レミリアさんの妹さん、フランドールさんと遊ぶんだった。

なんだか、もうそろそろ誰かが来そうな気がする。靴を履き、腰にホルスターを巻いてローブを着て手袋をはめる。軽く準備運動もしておく。

コンコン

「はい。どうぞ」

扉がノックされたのは最後の深呼吸が終わった時だった。入ってきたのは咲夜さん。

「失礼します。妹様の起きられる時間になりましたので、綾野様にはこれから遊んでいただきます」

「分かりました」

妹さんの起きる時間。こんな夜中に起きるのか。あ、いや。妹さんも吸血鬼だった。

「あの、今は何時ごろなのでしょうか」
「今は、丁度十二時を回った頃です」
真夜中か。吸血鬼が起きるにはふさわしい時間なのだろう。
俺はそんなことを考えながら廊下に出た。今回もまた咲夜さんが案内してくれるようだ。
俺は咲夜さんの少し後ろを付いていく。広く長い廊下の空気はずいぶんと冷たく感じた。
「直接妹さんの部屋まで行くんですか？」
「はい」
ふーんと思いながら付いていく。先ほどの質問。これと言って意味は無い。あるとすれば自然と分かる目的地を少し早く知ったと言うことだけだ。うん。詰まらん。
廊下には窓がなく、両壁についている燭台のロウソクの火からの明かりだけが暗闇を必死に押しのけている。ロウソクの火に照らされた紅い壁はさらに赤黒く見え、時折揺らめく炎がより不気味さに磨きをかけている。
そんな廊下を無言の状態で歩き続けること十分ほど。何度も角を曲がったり階段を下りたりを繰り返して俺の方向感覚が完全に麻痺した頃に、一つの扉の前に着いた。
扉の左右には、廊下の壁に掛けられている燭台よりも一回り大きい物が掛けられ、扉を煌々と照らしている。咲夜さんはどこからか鍵を取り出して取っ手につけられた南京錠をはずし、扉の片方を開けた。
「これは……」
扉の向こうには地下へと続く、先の見えない長い階段があった。廊下と同じように両壁の燭台には明かりが灯っていて、階段を暗闇の空間から薄暗い空間へと変えている。
驚くべきはその階段に描かれている魔術陣の量だ。主なものは拘束魔術と攻撃魔術だろうか。見ただけでは何の魔術か分からない魔術陣もある。それらが様々な種類の魔術陣が所狭しと、しかしそれ

ぞれがしっかりと動くように配置されている。
「こちらへどうぞ」
俺は咲夜さんに付いて階段を下りていく。
魔術と言うものはそれぞれが『世界』に干渉しているので、やはり周囲にあるものにも少しながら干渉しているのだ。したがって、二つの魔術陣を近くで発動させると二つが干渉しあって効果が小さくなったり相殺しあったり、最悪、術者の制御ができなくなって魔術が暴走してしまうなどの危険性がある。そうならないためには魔術の性質を良く見極めて使うことが大切だ。特に、魔術陣を描くときには魔術陣の描き方に注意が必要だ。魔術陣の大きさ、方位、位置関係。これらがしっかりとしていて初めて魔術陣が発動する。
廊下に描かれている魔術陣はパチュリーが描いたのだろうが、全てが完璧である。すばらしい。さすがノーレッジ家の血を引いているだけのことはある。
「しかし、か」
俺が驚いたのはこれだけではない。扉が開けられたときに階段の奥から溢れ出してきた力の大きさにも驚いた。町の一つや二つを簡単に消してしまえるほど、大きな力だ。
しかし、幻想郷においてこのくらいの力を持っている事は別段驚くようなことではない。幻想郷は色々と規格外であり、外の世界に名を馳せた大妖怪が数多くいると聞く。そんな風に見ると、この力は特に頭一つ飛び抜けているわけでもないのだろう。
俺は何に驚いたのか。大きな力が隠されていないことだ。どんな大妖怪でもその力はある程度まで抑えられていた。自制されていた。少なくともここまで露骨に出ることは、普通はない。力を解放しているのは敵を威圧するためか、それとも単に力の制御ができないためか。分からん。
唐突に階段が終わった。短い廊下の先にはまたもや扉があった。またもや咲夜さんが何処からか鍵を取り出して開錠にかかった。
古い扉だ。少なくとも、俺が紅魔館で見てきた扉の中では最も古

いのではないか。扉の表面に刻まれている線と文字と数式の群れは、扉が開かないようにする施錠魔術と扉が壊れないようにする強化魔術の魔術陣。扉が壊れたときの自己再生魔術も刻まれているな。さらに両脇の壁に杭が打たれて、そこに太い鎖で扉が開かないように塞いでいる。そして扉の取っ手には大きな南京錠。どれほど厳重にしてあるんだ。

扉が厳重な部屋の中にあるものと言えば、大概は高価なもの・隠したいのも・危険なもののどれかだ。今回は最後のが当てはまるんだろうなあ。

と、観察と考察をしている間に扉の鍵が全て開いたようだ。早い。さすがメイド長。

「これより一時間、綾野様には妹様と遊んでいただきます。その間、この扉は鍵を掛けさせていただきます」

「分かりました」

一時間のうちに死ななければいいと。

「一時間後にお迎えに参ります。それまでご無事で。では、お入りください」

ぎぃぃと音を立てて扉は開かれた。

「それでは行ってきます」

＊＊＊

扉の前から部屋全体を見渡したときの第一の感想は、暗い、だ。光はある。壁にはランプが吊り下げてあるし、何より一番奥に取り付けられた窓から、紅い月光が差し込んでいた。ここは深い深い地下だから、あれは幻覚系の魔術だろう。

しかし、光があっても暗い。いや、光があるから暗いのだろうか。大きな闇の中に小さな光があると、周りの闇がずっとずっと濃く感じる。

今も両目には暗視をかけてある。階段を下るときからかけてあっ

たが、ここに入ってからは暗視をもっと強くしてある。そうしなければならないほど、ここの闇は濃い。
「我が独学から第二章二番『鷹の目』」
『鷹の目』とは遠くを見るための魔術だ。そうしなければならないほど、この部屋は広い。
部屋を見渡すと少女を見つけた。窓の側に取り付けられている回廊の手すりに腰掛け、偽物の紅い月を眺めている。
ここに自分以外の人間がいるはずも無く、その少女が名前の知らない妖怪であるはずも無い。
「こんばんは」
声をかける。すると、少女はこちらに振り向いて
「フフ、こんばんは」
と返してきた。
赤の服にスカート。所々に模様が入っている。被っている帽子はどこかで見たことのあるものだ。金髪。紅い目。鋭い犬歯。背中の羽は色とりどりの形の整った水晶のようだ。
「綺麗な月だね」
さらに声をかける。
「そうでしょ？　ここから見える月は世界で一番綺麗なんだよ。いつも、満月なんだから。いいでしょ」
「しかし月は満ち欠けして初めて良いものだ。ずっと満月ではつまらない」
「フフ、そうかな……」
常に満月の月。紅い月。
月は夜の象徴。夜と月は吸血鬼の領域であり象徴だ。
「この部屋はずいぶんと広いね」
「そうよ。走り回っても大丈夫なんだよ」
俺は周りを見渡してから続ける。
「そういえば、ここにはぬいぐるみやお人形がたくさんあるね」
部屋の壁に棚が取り付けてあり、そこにはたくさんのぬいぐるみ

や人形が並んでいる。こんな時に見ると可愛らしく作ってあっても不気味に見えてしまう。
「うん。とっても可愛いでしょ。特にこの子はお気に入りなんだよ」
少女は腕の中に抱えているぬいぐるみを見せてくれた。ちらほらとほつれが見えるが、きちんと直している跡も見えて大切に扱っていることが伺える。
「ねえ。あたしとっても退屈なの。ずっとここに一人でいるから。あなた、あたしと遊んでくれない？」
「いいよ。元々君と遊ぶために来たのだから」
少女はにやりと笑う。それは得体の知れない恐怖をもよおす笑顔。
「じゃあ、簡単に壊れないでね」
「生き物は壊れるのじゃなくて死ぬんだよ。……そうだ。まだ名前を言っていなかったね。俺は魔術師の綾野誠って言うんだ。好きなように呼んでくれ。君の名前を教えてくれるかい？」
自己紹介はコミュニケーションの基本。できるか分からないけど。
「誠。誠ね。私の名前はフランドール・スカーレット。フランって呼んでよ」
フランの双眸が怪しく光る。
俺のローブが淡く発光する。
「さあ、遊ぼう！」
喜びの声が響いた。

＊＊＊

フランが手すりからジャンプして飛んだ。そして、眼前が赤い弾幕に覆われた。この屋敷に来てからは赤い物しか見ていない。
「目に悪い弾幕だな」
「見ている暇なんてあるの？」
「大丈夫大丈夫」
足元に跳躍の魔術陣を展開して壁に向けて上へ跳ぶ。クナイを作

って壁に思いっきり突き刺し、体を固定する。ここは四階ぐらいの高さだろうか。
「へー。誠って普通の人間じゃないんだね」
「当然。最初に魔術師だって言ったじゃないか。それに、普通の人なら人里を離れた時点でお陀仏だ」
以前の問題として、幻想郷に普通の人間なんているのか？この世界自体が普通でないというのに。
「あはは。それもそうだね」
次にフランは色とりどりの弾幕を放ってきた。目がチカチカする。これも一つの狙いなのか。それとも何気なしにやった結果なのか。
「おっとと。あんまりのんびりしているとまずいな」
大したほどでもないが、先ほどの弾幕よりは弾速が速い。クナイを消して弾幕に当たらない程度の強さで壁を蹴り、今度は自由落下を始めた。床が急速に近くなる。このまま落下して潰れたヒキガエルになるのも嫌なので風の精霊術で速度を落とす。
「風よ、我にまとえ。我が意を表わせ」
風が体にまとい、速度がぐんと落ちた。そして着地。これで良し。体に来る反動は結構あったが。
「次から使い方を考えなきゃな。……ん？」
上を向いて飛んでいた弾幕の三分の一ほどが、こちらに軌道変更して向かってきているのが見えた。大方追跡弾の類だろう。この程度の量ならば避けるよりも叩き落すほうが楽だ。
弾幕から少しだけ距離をとり、腕を振り上げた。
「我が独学から第一章一番『風斬』」
詠唱とともに腕を振り下ろす。空中から無数の風の刃が降り注ぎ、色とりどりの追跡弾の弾幕を容赦なく無骨に叩き落した。
「そろそろ反撃するか。」
弾幕がどんなものかも見れたし、観察はこんなものだな。
ローブから『我が独学』を取り出して開く。
「魔術陣展開。我が独学から第一章五番『火矢』第一章六番『氷槍』

」
前方にいくつかの魔術陣が展開した。半分からは火矢が、もう半分からは氷槍がフランに向かって飛んでいく。
「やっと来たね」
フランも弾幕を放ってきた。弾と矢と槍とがぶつかり合い、お互いを消していく。たまに流れ弾が来るが、それらは全て作り出した棍棒で打ち返している。フランもそうしているのだろう。火矢や氷槍も流れてくる。
「ずいぶんと長い弾幕だね」
「まあね」
不味い。今はお互いの弾幕を相殺しているに過ぎない。つまり、このまま魔術を発動させ続けてもただ悪戯に魔力を削っていくだけなのだ。俺は人間。対してあちらは吸血鬼。その身に秘める魔力の量はどちら多いかなど、言わずとも分かるだろう。どうにかして一旦弾幕を止めなければならない。
獄符を二枚取り出す。
「合成獄符・『火炎風雷の獄』」
風の塊が雷と炎をまといながら弾幕に突っ込んでいって、周囲の弾幕を全て巻き込んで爆発した。あたりに煙が立ち込める。
「ふう。こんなものか」
魔力の残量は八割。昔と比べて魔力の燃費と保有量は増えたが、それでもまだまだ足りない。
「すごい爆発だったね。弾幕がみんな無くなっちゃった」
煙の向こうからフランの元気な声が聞こえてきた。やはりまったく疲れていない。世の中は不平等だ。
「短期決戦でいくか」
まともに一時間も相手をしていたら魔力が無くなってしまう。一気に攻めて気絶させる。その後魔力の縄で縛って動かないようにしておく。一時間寝て待つ。以上だ。
「我が独学から第一章十五番『雷撃』」

さっき声のした方向に右手を向け、何発か雷撃を放った。
「ぎゃあ！」
放った雷撃の内の一発がフランに当たったようだ。淑女が上げるとしては相応しくない声のしたほうに雷撃を何発も打ち込む。そのうちに煙も晴れてきた。
「頭がくらくらするよ」
「好都合。そのまま気絶してくれ」
言った途端、フランの声の質が変わった。
「駄目だよ」
煙が完全に晴れてフランの姿が見えた。服は焼け焦げて、あちこちから細い煙を何筋も上げている。そしてその右手には、赤黒い球体が握られていた。
「もっと遊んでくれなきゃ」
あの赤黒い物はなんだろうか。何かとても嫌な予感がする。
「俺は死にたくないからね」
そう言って『雷撃』を放とうとしたとき、フランが右手の球体を握りつぶした。
「へ？」
間抜けな声を上げたのは俺だった。前に突き出している右手からいきなり、白く少しだけ透き通った骨が飛び出してきた。飛び散る骨と骨が空けた穴から噴出してくる血液。赤と白のコントラストは存外きれいなものだった。
「ぐぅぅああ！」
的外れな感想が浮かんできた直後に猛烈な痛みが襲ってきた。思わず腕を抱えてしゃがみこんでしまった。何本もの焼けた槍で腕を突き刺されたような痛みが脳髄を貫く。
「さあ、遊ぼうよ！」
顔を上げると紅い大剣を手に持ったフランが切りかかってきた。
「くっ！」
後ろへ跳躍する。弾幕が張られてこちらに向かってきた。

ローブに魔力を流し込んで『遮断』の効力を最大限まで引き出す。同時に応急処置として血液中に魔力を溶かしいれ、出血を最大限食い止める。弾幕が体中に当たる。衝撃を遮断しているとは言え、全てを諸に食らうと体が悲鳴を上げる。さらにここまですると治癒魔術へまわす魔力が無い。右腕は完全に使えなくなった。防ぎきれなかった弾幕が体を切り裂いていく。

「ふふふ。血だらけだね」

上へ飛んだ。生存本能で体が勝手に動いたのだが、俺がさっきまでいたところは紅い大剣が横薙ぎに通っていった。

「禁忌『レーヴァテイン』」

フランが言った。

レーヴァテイン、とは大剣の名前だろうか。確か、北欧神話にそんな名前の武器があったはずだ。

「行くよー！」

俺はフランを越えた所に着地した。フランはそこにすかさず切りかかってきた。俺は剣を作り、それに応戦した。

ぎん！ぎん！ぎん！

「あはは！　はははははは！」

重い。一振り一振りが重い。ただでさえ片腕しか使えないのに、こんなに重い剣を受け止めなんてしたら骨が砕ける。今は何とか剣の軌道をずらしているが、これもいつまで耐えられるか。

切り傷が増えていく。ダメージが溜まっていく。片腕しか使えないのがもどかしい。獄符なり何なりを使えば状況は良くなるかもしれないのに、手が離せない。獄符が勝手に飛び出して来てくれればいいのに。……ん？

ちょっと待て。そうだ。獄符が勝って飛び出せばいいのか。手を使わずに取り出せれるじゃないか。

「風よ、彼の者たちにまとえ。ぬぅ！　我が意を表わせ！」

対象物が見えないというのはやり辛いが、ここは自分の身に着けている物。イメージで何とか押し切れた。

懐から獄符が飛び出してきた。模様を見て何かを確かめる。
「余所見なんかできないよ」
「まず……」
甲高い音を立て、剣と剣がぶつかり合う。俺は受け方を間違え、後ろに吹き飛ばされてしまった。したたか壁に体を打ちつける。
「ほらほらー！」
フランが俺を吹き飛ばした勢いのまま剣を突き出して飛んでくる。
「運がいいのか悪いのか……」
俺はフランの目の前に獄符を持ってくる。
「獄符『水波の獄』」
獄符からフランに向けて大量の水が流れ出す。吸血鬼の弱点の一つ、流水。
『水波の獄』は獄符の中では唯一外側に向けて攻撃するようになっている。流れる水の中に閉じ込める、と言う意味合いを込めてあるのだ。
「これで何とかならないかな」
立ち上がって部屋の中心、獄符の近くまでいく。念のためにもう少しだけ手を加えておこうと思う。手を水の中に突っ込む。
「我が独学から第一章二番『冷却』」
手の付近から水が凍り始めた。その上を獄符の水がまた流れていく。これを繰り返し、全ての水を凍らせた。
「吸血鬼のフリーズ保存だな。どこにいるのかな。……げほ！　はあはあ。余裕は無いな」
何とか勝った。後は時間が経つのを待つのみだ。その間に腕を直しておかなければならない。
「我が独学から第三章一番『傷口閉鎖』」
第三章は治癒系の魔術をまとめてある。毒の治療や精神異常なんかも俺が知っているものであればある程度は良くする事ができる。
体中の魔力が右腕に集中して傷口をふさごうとする。しかしここまでひどい傷だ。見たところ骨は全て折れている。いや、よく見る

と骨しか折れていない。
おかしい。魔術を止めたいなら腕自体を吹き飛ばせばいい（俺は良くないが）のに。何故だろうねえ。
「まー終わった終わった。咲夜さんが来るまで寝るかな。」
「遊ぼう？」
背後から聞こえるはずの無い声が聞こえ、それと共に体を紅き刃が貫いた。
「嘘だろ……」
刃が引き抜かれると腹から血が湧き出してきた。灼熱が腹に生まれ、体中の力が抜けていく。ついには膝を付き、うつ伏せに倒れてしまった。
「誠ってすごいね。あんなにたくさんのお水は初めて見たよ！　それに、流されて苦しかったけど手と足をがんばって振り回していたら飛べたんだ。少し上で休憩していたんだけど、こんなにたくさんのお水がすぐに氷に変わって驚いちゃった」
それは、本当に嬉しそうな声。
「誠と遊ぶと本当に楽しい！」
それは、本当に楽しそうな声。
「ねえ誠。もっと遊ぼう？」
それは本当に純粋な声。
「無理……だ」
どこまでも純粋に求める気持ち。その名は狂気。
流れ出る血に俺の意識は沈んでいった。

＊＊＊

誠が静かになった。血が腹と右腕から流れ出す。意識を失って止血することができなくなったのだろう。
「つまんないの」
フランドールはそれを見て言った。心底つまらなそうに言った。

そしてレーヴァテインを消して、部屋の隅にあるベッドにお気に入りのぬいぐるみを抱えて行った。
「また、壊れちゃった。壊しちゃった」
フランドールはぬいぐるみに語りかけた。しかし、ぬいぐるみが答えることは無く、ただ黒い瞳でフランドールを見つめ返すだけだ。
フランドールはそんなぬいぐるみをぎゅっと抱きしめて言った。
「大丈夫……大丈夫だよ……」

＊＊＊

深い闇の中を漂っていたら、体中の痛みで目が覚めた。うっすらと目を開けると床に近い方の目に血が沁みた。血溜まりできるほどの血が流れ出ているようだ。このままでは出血死する。仕方が無いので床に流れ出た血液にも魔力を溶け込ませて体内に戻す。衛生的な問題が山積みだが、今死ぬよりはましだと思う。
「大丈夫……大丈夫……」
フランの声がした。さっきまで聞いていたものとは違う、か細い声だ。『暗視』と『鷹の目』は機能しているようだ。声のほうを見ると部屋の隅にあるベッドの上にフランがいた。抱えているのはお気に入りのぬいぐるみか。
「大丈夫だよ……大丈夫だよ……みんながいるもの……」
フランの声が、だんだんとにごって来た。
「みんながいるから……寂しくなんて無いよ……」
フランが泣きながら言った。
遊び相手を求める狂おしいほどの純粋さ。『破壊の目』で腕ではなく骨を壊したこと。泣きながら言った今の言葉。

見つけた。『世界』の制約を。

「我が独学から第三章一番『傷口閉鎖』」

ありったけの魔力を右腕に叩き込む。すさまじい負荷を感じながらも右腕が一気に使える程度にまで回復した。すぐさま立ち上がる。フランが嬉しそうな声を掛けてきた。
「なんだ誠。まだ動けるんだ」
俺はそれに答えずに腰にある九本のクナイを、ホルスターから掴み出して上に向かって投擲する。
「どこに投げてるの？　私はこっちだよ？」
もちろん分かっている。しかし、今の目的はフランではない。
「獄符『灼熱の獄』」
残り二枚になっていた火の獄符を氷の上空に向けて投げた。そこから発生した炎は見る見るうちに氷を溶かして行った。そしてクナイが水浸しの床に突き刺さった。フランは何をするのかと興味津々な目で見ている。
好都合だ。『我が独学』を開く。
「魔術陣展開！　我が独学から第一章三十二番『煉獄の華』」
詠唱が終わると俺の足元を中心に床一杯に巨大な魔術陣が展開した。魔術陣の外周とクナイが全て重なった。そして、魔術陣の中心から大きなつぼみが出てきた。俺はつぼみの中に入ってしまいフランの様子は見えないが、おそらく目を輝かせているのだろう。
「許せ」
俺は小さな声でそういった。それが合図だったの様につぼみが開いた。花びらは周りに倒れて、同時に激しい炎が中心からうねりを上げて花びらを嘗め尽くして周囲に延焼していった。
「え？」
周囲。周囲のぬいぐるみや人形を炎は飲み込んで行く。
「だめぇ！　止めて！　誠！　誠！　みんながいなくなっちゃう！」
俺は炎の向こうで必死に叫んでいるフランをじっと見ていた。炎は叫び声を気にもせずにフランの友達を灰へと変えていく。
俺は近くの炎に手をかざして火矢を作る。そして、フランの抱えるぬいぐるみに向けて放った。火矢は過たずぬいぐるみに突き刺さ

って勢いを増していく。
「だめ……」
フランは肌が焼けるのもいとわずに泣きながらぬいぐるみを抱きしめた。
俺は炎を突っ切ってフランの背後まで来た。フランが振り向く気配は無い。
「こんなものがあったんだった」
ローブの中から銀のナイフを取り出す。そして、無防備なフランの背中に何の躊躇も無く深々と突き刺した。
地下の監獄に炎の燃え上がる音と、少女の苦痛な悲鳴が響き渡った。

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

誠君ＶＳフラン、どうでしたか？
私は気に入っているのですが、なにぶん素人でして戦闘シーンの良し悪しがあまり分かりません。とりあえず、一方的でないということだけです。

本当はもう少し書きたかったのですが、まとめるのが下手で自分で作った目安を越えてしまいましてこんなところで切りました。一応次回で終わりたいのですが、もしかしたら？まで行くかもしれません。

すでに細々とした話でない。

ここまで好きなことばかり言わせていただきましたが最後に、ここまで読んでいただきありがとうございます。

ご指摘・ご感想をお待ちしております。

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

さあ、全てが分かります。
誠くんの、レミリアの、そしてフランの運命やいかに。
注；オリキャラ一人出現

魔術師が紅魔館にて？

昔々あるところに、大きなお屋敷に住んでいる二人の姉妹がいました。二人はとてもとても仲の良い姉妹でした。

しかしある日、二人はけんかをしてしまいました。その理由はとても小さな事なのですが、その日から二人はとても仲が悪くなりました。お屋敷の中でもお庭でも、二人は絶対にお話しをしませんでした。

いつも二人がお話しする声が響いて明るかったお屋敷は、すっかり静かになってしまいました。お屋敷で働いている使用人さんたちも、みんな困っていました。

そんな時、お屋敷に一人の旅人がやってきました。お屋敷の使用人さんたちは旅人に言いました。

「どうか、お嬢様たちを仲直りさせてあげてください」

旅人は喜んで、と言ってくれました。その日から、旅人はしばらくお屋敷に住むことになりました。

旅人はいろんな方法で二人を仲直りさせようとしました。裏で仕組んで二人を会わせたり、旅人と一緒に三人で遊んだりもしました。でも、二人は中々仲直りをしませんでした。

旅人はとても困りました。このままでは使用人さんたちとの約束が守れません。

何かいい方法はないかと一人でお屋敷の中を歩いていると、女の子の泣き声が聞こえました。とてもとても小さな声でした。近くの部屋を覗くと、お姉さんが部屋の中で泣いていました。

どうしたのか、と旅人が聞くと、お姉さんはこう言いました。

「私は、本当は妹が大好きなの。早く仲直りしたいの。でも、妹はきっと私を嫌っているわ。だから、仲直りをしようって言う勇気が無いの。そんな自分が情けなくて、悲しくて、泣いているの」

旅人はそうかそうか、と言いました。旅人はお姉さんを慰めてか

ら、またお屋敷の中を歩き始めました。すると、また女の子の泣く声が聞こえてきました。とてもとても小さな声です。近くの部屋を見ると、今度は妹さんが部屋の中で泣いていました。

どうしたのか、と旅人が聞くと、妹さんはこう言いました。

「私は、本当はお姉ちゃんが大好きなの。早く一緒に遊びたいの。でも、お姉ちゃんはきっと私のことは嫌いなの。だから、一緒に遊ぼうって言えないの。これからもずっとお姉ちゃんと遊べないって思ったらとても悲しくて、泣いているの」

旅人はそうかそうか、と言いました。旅人は妹さんを慰めてから、またお屋敷の中を歩き始めました。

旅人は二人を呼びました。二人は相変わらず顔を合わせようとはしません。そこで旅人は、お姉さんは妹さんのことが大好きだと言うことを言いました。妹さんもお姉さんのことが大好きだということも言いました。

それを聞いたとき、二人はとても驚きました。そして二人は、お話を始めました。謝ったりお礼を言ったり、辛かった事を言ったり楽しかった事を言ったり、たくさんたくさんお話をしました。

こうして二人はすっかり仲直りをして、前よりもずっとずっと仲良しになりました。

めでたしめでたし。

＊＊＊

誠がフランドールの部屋に入って一時間後、咲夜は鍵を持って地下の扉の前にいた。鎖を解き、パチュリーに教わったように扉の魔法を解き、南京錠を外す。

そして扉をぎぃぃと開けた。

「綾野様。お迎えに参りました」

返事は無かった。咲夜は、分かりきっていたことなので何も感じなかった。

“妹様と遊んで生きているはずが無い。”
そう思っていた。
咲夜は部屋に入った。灰塵になった死体でも、形の残っている死体でも、後片付けをするのが咲夜の仕事だった。
「う……」
思わず鼻を押さえてしまった。とても焦げ臭い。大量の物が燃えた後の臭いが鼻腔を貫いた。気分が悪くなる。どれほど激しく遊んだのか。
そう思って回りを見渡した。そして、見てしまった。
極端に数の少なくなったランプ。生き残ったランプの弱弱しい光に照らされている、ぬいぐるみや人形の残骸。そして、今まで雲の後ろに隠れていた紅い月の光に照らされて、血の海に沈むフランドールを。
「妹様！」
咲夜はフランドールの側に駆け寄り、服が血で汚れるのも気に掛けずに膝を付いた。
「妹様！　妹様！」
仰向けに倒れたフランドールが咲夜の呼びかけに答える様子は無く、ただ目を閉じているのみだった。フランドールの心臓付近は血でべっとりとしていた。まるで、何かで刺されたように。
「これは……！」
吸血鬼の弱点。心臓を杭、もしくは銀製品で潰されることだ。
咲夜は思った。
まさか、まさかまさかまさか。あの人間は遊んでいて本当に殺したのか。自らが生き残るために、妹様を殺したのか！
その時、咲夜の後ろに何かが落ちてきた。いや、何かが降り立った。動揺しきっていた咲夜はそれに気付かず、振り下ろされた黒の凶器を首筋に叩き込まれた。そして咲夜は、どさっと音を立ててフランドールの上に倒れた。
「ごめんなさいね。咲夜さん」

誠が言った。
「さて、扉の鍵は開いたし邪魔者もいなくなった。これで好きなように動ける」
誠は部屋を出て地上に向かって階段を駆け上って行った。

＊＊＊

咲夜がフランの部屋へ行った後、私は紅魔館の屋根の上にいた。目の前には見上げる月と見渡す湖が広がっている。あと四・五日で満月になる月の光を、湖が水面できらきらと反射する。
今頃は、咲夜が誠の死体を片付けているのかしら。それとも、灰を始末しているのかしら。どちらにしろ、生きているって事は無いわね。
ふと、とある絵本が頭をよぎった。それは昔読んだことのある、ありふれた内容の絵本だった。今はもうどこにあるのかは分からない。
「仲良しの二人がけんかをしました。旅人が二人を仲直りさせました。二人はまた仲良しになりました」
ありふれた夢物語。しかし、私はこんな話に期待していた。もしかしたら、もしかしたら本当に起こるかもしれないと期待した。こんな夢物語が。
そうだとしたらどれほど嬉しいだろうか。妹を幽閉する。そんな今まで悩み続けて、これからも悩み続けるであろう苦悩から解き放たれるのだから。
「ふ……柄じゃないわね」
私がこんなこと思うなんて。この、『運命を操る程度の能力』を持つ私が運に頼ろうなんて、笑ってしまう。
まあ、それでもいいのかもしれない。
「私の願いが……叶うのであれば」
昔から変わらない月。いつかもう一度、フランと一緒にこの月を

見たい。偽物などではない、本物の美しい月を。
「これはこれは、レミリアさん。」
「！　あら誠。生きていた……」
突然掛けられた声に振り向いて返事をしようと思ったが、屋根の上に少し俯いて立つ誠の姿を見て言葉を失った。
「こんばんは。こんな所にいらっしゃったんですね。魔法を使いましたから探すのには苦労しませんでしたが、屋根に上るのには苦労しました。」
血でぐっしょりと濡れたローブ。裾からはポタポタと血が滴り落ちている。見えにくいが、いたるところに生乾きの血を張り付けた顔。鈍く月の光を反射する濡れた黒い剣。
「なにぶん飛行魔法は苦手なようでして」
こんな状態で、何故そこまで平然と話ができるのだろうか。
「どうかしましたか？　レミリアさん」
名前を呼ばれて意識が戻った。誠は未だに顔を上げずに立っている。
「いいえ。随分と血まみれになって帰ってきたのね。それだけの血を流しておいて立っていられるなんて、あなた本当に人間なのかしら」
「血、ですか」
誠は言われて初めて気が付いたように、自分の体をあちこち見始めた。そうすることで、私に見えなかった部分の血も見えた。
「確かに随分血が付いていますねぇ」
その言葉に私は眉をひそめた。
「それだけ出血する怪我をしておいて気が付かなかったの？」
「怪我？　ああ。確かにフランドールさんに斬られたり貫かれたりしたようですけれど、これらの血は僕の物ではありませんね」
「……どういう意味かしら」
声が震える。
あの血が誠の物ではないとするといったい誰の物なのか。誰でも

わかる。すぐに分かる。しかし、あの出血量は。
「どういう意味って、すぐに分かるでしょう？」
まさか。
「フランドールさんの物ですよ」
「……今、フランはどうしているのかしら」
まさかまさか。
「フランドールさんですか？」
誠が顔を上げた。目が紅くなっている。そして、
「地下室の冷たい床の上で、冷たくなって眠っていますよ」
そしてその顔は、笑っていた。
「僕が殺しましたから。」
寒気がした。寒気は体中を這いずり回り、指先まで冷たくしていった。
「吸血鬼って、心臓を貫かれると死ぬんでしたよね。特に杭とか銀のナイフとかで心臓を貫かれると、即死だって聞きましたけど」
何を言っているんだあの人間は。フランを殺しただと。
「吸血鬼とはすばらしいですね。西洋妖怪の頂点。最強の魔法生物。その血に宿る魔力は、一滴のみでもすさまじい量がある。俺たち魔法使いにとっては貴重な魔力補給源ですね」
手が震える。足が震える。体が震える。呼吸が乱れる。
「ご遺体に失礼かと思いましたが、少々血を飲ませていただきました。魔法耐性があるので吸血鬼にはならない……」
「黙れ！」
私は一瞬にして誠の周囲に弾幕を張った。遊びに使うような生易しいものではない。弾の一つ一つに人間一人など簡単に殺せるぐらいの力を込め、それを避ける余地無く配置してある。
「これはこれは」
誠の周囲が一瞬にして発光し、爆発的な魔力が溢れ出す。
「どうかしましたか？」
そんな声と共に誠が弾幕を全て消して出てきた。

「どうしてそれほど怒るのでしょうか」
「何だと！」
「ですから、どうして怒るのですか？　むしろ感謝してほしいぐらいなのに」
感謝、だと？
「ふざけているのか貴様」
「ふざける？いえいえ、僕にそんなつもりはありません」
ふう、と誠は息をついた。
「フランドールさんは苦しんでいたんです。ずっと一人で、ずっと暗い地下室に囚われて。ずっとずっと、苦しんでいたんです。こいつはそんなフランドールさんを生かしたままにしようと考えていました。しかし僕は、それではフランドールさんが可哀想だと思いました。なので殺しました」
何を。
「僕が、後ろから、一突きにして、楽に、殺しました」
何を言っているんだ。この人間は何を言っているんだ。
いや、違う。
「あなた、何者……誠じゃないでしょう」
「僕ですか？」
あいつは演技のように腕を広げて、笑ったままこう言った。
「人々は僕をこう呼びます。狂おしい気。“狂気”と」

＊＊＊

「狂……気？」
狂気。狂気だと？
「まさかあなた、フランに宿っていた狂気……！」
「そうですよ。僕は今までずっとフランドールさんに宿っていました。ずっとフランドールさんを狂わせ続けてきました」
狂気はあっさりと言った。

「いやー。フランドールさんを狂わせるのは楽しかったですよ。遣り甲斐がありましたから」
こいつの、
「普通の生き物が狂うよりも、フランドールさんが狂った方はやってくれる事が大きくていいですね。そこたら中の物や生き物をどんどん壊していってくれるんですから。その時の周りの慌て様が面白くて面白くて……本当に見ものでした」
こいつのせいで！
「私たちがどれだけ辛かったか分かるかー！」
神槍『グングニル』
紅い大槍を片手に狂気へと突っ込んで行った。
「辛かった？」
狂気は穂先を軽々と避けた。しかし、絶対に逃がさない。
「私たちがこの何百年を、いったいどんな気持ちで過ごして来たか分かるか！　貴様のせいでどれほど悲しんだか！」
弾幕を張り、それに追って攻撃を繰り出す。
「辛かった？悲しんだ？　はっ。それ本気で言っています？」
狂気は魔法を使い弾幕を消し、剣を使って槍の攻撃をすべて逸らして行く。
「本当に彼女を心配しましたか？　本当に彼女を思って悲しみましたか？　本当に彼女を愛しましたか？」
狂気が攻撃に転じた。鋭い剣筋が幾本も通り過ぎていく。私は正面から振り下ろされた剣を槍の柄で受け止め、さながら鍔迫り合いのようになった。
「本当は、彼女を嫌っていたのではありませんか？」
至近距離で狂気が言ってきた。
「何を……」
「本当に彼女を救いたくば、本当に彼女から私を取り除きたくば、世界中を探せばよかったのではないですか？　人間界でも魔界でも天界でも冥界でも、この次元に散らばる数多の世界を全て渡り歩い

て探せばよかった。狂気を取り除く術は、数は少なくとも必ず存在するのですから。しかしあなたはそれをしなかった。何故でしょうか」

止まっていた体の震えが、またやってきた。ギリギリと、槍が剣に押され始めた。

「答えられないのですか。では僕が答えてあげましょう」

睨む狂気の瞳に、見下すような光が宿った。

「それは、あなたがこのスカーレット家を優先したからですよ」

「……！」

「狂気の治療法を探し回ればスカーレット家に狂った者がいると世間に知れ渡ります。これは大きな汚点です。スカーレット家の名に泥が塗られてしまいます。あなたはそれを恐れて、動こうとはしなかった。あなたは彼女よりの家名を優先し、大切にしたのです」

違う。そんなことは無い。

「私はフランを愛していた！」

「あなたは彼女の心配はしていなかった！彼女を思って悲しんでなどいなかった！彼女を愛してはいなかった！……あなたが心配したのは、悲しんだのは、スカーレット家の名が地に堕ちる事であり、あなたが愛したのは、スカーレット家の名と、伝統と、誇りだ。」

体の震えが止まらない。

言わないで。それ以上言わないで。お願い。聞きたくない。違う。違う。違う。

「違う……！」

「あなたは彼女を、愛してはいなかったのです」

急に音が消え去っていく。体から力が抜けた私は狂気に吹き飛ばされ、時計塔の壁に体を打ちつけた。頭が揺れて、気が遠くなりそうになる。そんな時に、狂気の穏やかな声が耳に入ってきた。

「彼女は本当に苦しんでいました。数百年間、ずっと。だから殺してあげたんです。彼女がこれ以上苦しまないように」

それはまるでフランのことを慈しんでいる様な、そんな風に聞こ

えた。
「それなのにあなたが、あなたが彼女を愛していた？　ふざけるのもほどほどにして下さい！」
　回復した視界の中の屋根に立つ狂気は、今度は語気を荒立てて言った。紅い目がこちらを睨んでくる。
「本当に愛していたのなら何故会いに来なかったのです！　何故声を掛けなかったのです！　彼女は寂しかったんですよ。ずっと一人で、あんな暗い部屋に押し込められて。ずっと孤独の恐怖に怯えていた！　だから妖怪が送られてくると本当に喜んで、すぐに死んでしまってまた怯えて」
　分かっていた。フランが怯えていることは。分かっていた。でも。でも！
「何よ……」
「何ですか？」
「どうしろって言うのよ。」
　あいつに何が分かる。何が！
「私だってそれくらい分かるわよ！　でもね、でもね！　もしこの家が無くなってしまえばフランを押さえる物が無くなってしまう。もし外で破壊を続ければ周囲に消されてしまう。だからこの家を、スカーレット家を失うわけにはいかなかった！」
　視界が歪み、頬に生暖かい液体が流れる。私は激情のまま心から吐き出される思いを口から吐き出していく。
「あなたは分かるのかしら。家を守らなければならない当主をしての私と、妹を助けたい姉としての私と、二つの間で板挟みになって苦しみ続けてきた今のあたしの気持ちが！」
　辛かったのに。助けたかったのに。気持ちは分かっていたのに動けない自分がもどかしく、自分を抑え続ける日々とフランの泣く声を聞く日々が腹立たしくて。
「……あなたは、本当に彼女を愛していたのですか？」
　狂気が尋ねてきた。

確かに私は、狂気の言った様にすれば良かったのかも知れない。スカーレット家を無くすような事になっても、世界中を探し回れば良かったのかも知れない。しかし私はそれをしなかった。狂気は、これがフランを愛していない証拠だと言った。それに、私はフランから嫌われていただろう。それでも！

「私は、フランを愛していたわ。誰が何を言おうとも、私はフランと一緒に居たいと願っていた」

これに狂気は何も言わず、ただこちらを見つめるだけだった。

私はグングニル持ち直して穂先を狂気に定めた。

「あなたはフランを狂わせた。あなたはフランを殺した。あなたは私たちの運命を狂わせた！　絶対に許さない。一人の姉として、絶対に許さない！」

狂気へと突っ込む。狙うは心臓。一突きにして息の根を止めて、弾幕を形が無くなるまで打ち込んでやる。

狂気は避けようとせず、剣や魔法で防ごうともせず、じっとしていた。そして、もう少しで狂気を突き刺せるというところで。

横から何かが飛んできた。

「お姉さま！」

＊＊＊

グングニルを俺に向けたレミリアさんが突っ込んで来て、もう少しで心臓が一突きになるというところで、フランが右側から突っ込んできて、勢いそのままレミリアさんに抱きついた。その際、慣性の法則が働いてレミリアさんが左にずれて、グングニルの穂先も俺の左腕の肉を少し持っていくだけだった。

って、良くねー！　肉が持っていかれるって結構なものなんですけど！

「お姉さま！」

「フラン！」

左後ろに移動した姉妹が会話を始めた。それを見るために体が後ろを向いた。
「お姉さま！　私、お姉さまのことが大好きだよ！　だから、だから、これからはずっと一緒に居て！」
涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら言った。フランは服を血に染めているが傷はふさがっているようだ。
「フラン……」
レミリアさんはグングニルを消して、フランを優しくぎゅっと抱きしめた。
「私も、フランのことが大好きよ。……今まで、何もして上げられなくてごめんなさい。許してちょうだい、フラン。これからは……ずっと二人で居ましょう。」
レミリアさんも途中から涙目になって言った。まさに姉妹愛。美しい。
「でもフラン、あなた、その……生きていたの？」
「え？」
フランがぽかんとした顔になった。
「フランドールさんは死んでいません。僕が殺していないのだから」
狂気が口を開いた。
「フランドールさんが死んだというのは嘘だったんですよ。レミリアさん」
レミリアさんはもぽかんとした顔になった。しかし、すぐに真っ赤になって言って来た。
「あなた！　私に嘘を付くなんて……」
「狂気ごときの言葉を信じていたんですか。いけませんねー。見知らぬ者の言葉を信じちゃ」
レミリアさんは耳まで真っ赤になって口をパクパクとさせた。紅魔館に来てから赤いものしか見ていない。それとレミリアさんのカリスマも無い。
「でも、僕が他に言った言葉は全て本当です。僕はずっとフランド

ールさんの中にいました。僕はフランドールさんの気持ちを全て知っているのです」
「……分かったわよ」
レミリアさんは何が分かったのだろうか。狂気とレミリアさんの間だけに通じることか。除け者にされてしまった。
「ねえ、お姉さま。私、今すぐお姉さまと遊びたい！」
「え？」
「だめ……かな」
おお。必殺上目遣いおねだり。これは強力だ。特に今のレミリアさんには効果絶大だろう。
「……え、ええ。いいわよ。久しぶりに外に出たものね。思いっきり遊びましょう」
「ありがとうお姉さま！」
俺たちは必要とされていない様子。むしろ邪魔者。空気以下の存在。
狂気もそれを悟ったようで、こっそりと離れて出てきた窓から紅魔館の中に入り、その場を後にした。
――気が利くな狂気。やっぱりあの場は二人っきりにさせるべきだよな。
俺は狂気に話しかけた。
「え？何を言っているんですか。むしろ僕は二人の様子を見ていたかったですよ。」
――ならば何故離れたんだ？
「それは……」
どごぉぉん！　ずぅぅん！　ちゅぃぃん！
「我が身の安全のためですよ」
なるほど。

＊＊＊

ここは紅魔館のある廊下。遠くから轟音が聞こえて建物が微かに揺れる。
――おい狂気。そろそろ俺の体を返せ。
「お断りします。久しぶりに外に出たんです。しばらく好きなことをさせてうぐ！」
やはり言うと思った。最初から無理矢理取り戻せばよかった。
「うぐぅぅ、ぶはー！　あー苦しかった。う、痛い」
体を取り戻した俺は体のあちこちに走る痛みに耐え切れず、壁にもたれかかって座り込んだ。ちなみに、ローブの血の九割は自前である。
――情けないですね。痛みを感じない僕なら普通に歩けますよ？
「危険信号の痛みを感じないことは何の強みにもならない。う！……はぁはぁ。気付かぬうちに体が使い物にならなくなってしまう」
――しかし、今のあなたに痛みは不利にしか働かないでしょう。
「少し黙っていろ」
そう言って、俺は右手に持っていた剣から魔力を剥ぎ取り、もとの銀のナイフになったところで全体を薄く魔力コーティングをしてそこら辺に置いておいた。
「我が独学から第三章一番『傷口閉鎖』」
怪我の度合いが特にひどいわき腹と左腕の傷口をふさいでいく。これにはかなりの時間がかかるだろう。右腕を直した時は変化が急すぎたのか、少ししたら右腕に激痛が走った。
「くそ。散々な一日だったな」
あの姉妹はまだ遊んでいるのだろう。二人とも、心のそこから笑い合いながら。
あの時、俺はフランの背中を刺した。しかし、心臓ではなくあくまで心臓付近を刺した。しかしそれでも銀のナイフで刺したのだ。フランは一気に弱っていった。俺はナイフを引き抜き、フランはそのまま気絶してしまった。狂気はその時ナイフにくっ付いてきた。

フランの血液は本当に飲ませてもらった。魔術の耐性はあるし大丈夫かなー、と思って一滴飲んだが甘かった。本当に吸血鬼になりかけた。皆さん、吸血鬼の血を甘く見てはいけません。

まあ、そんなこんなで魔力も回復して傷を治していた時に、魔力コーティングして持っていたナイフから狂気が話しかけてきた。曰く、やりたい事があるから少しだけ体を貸してくれ、と。

勿論最初は拒否したが目的が“姉妹の仲直り”と言う事と、体はすぐに返してもらうという事を約束して体を貸した。その後狂気は傷を最低限治してフランを俺の血溜りの中において、天井にクナイ突き刺して待っていて咲夜さんが来たら首筋打って気絶させて、地上に出たら俺の魔術をフルで使ってレミリアさんと対峙してあーだこーだして、今に至る。約束は守られなかったな。

「おい、狂気」

俺はナイフを手にして狂気に話しかけた。

「お前がフランに与えられた『世界』の制約だろ。いや、違うか。お前によって生じる孤独が制約だな」

――……そうですよ。

やはりそうか。

フランを狂わせることで破壊活動をさせ、周囲の者たちにフランを地下の牢獄に閉じ込めさせる。フランは閉じ込められたことによって孤独の恐怖を感じ、無闇な破壊をやめる。地下室にあったぬいぐるみや人形がいい例だ。しかし誰かが来て遊ぶと、つい壊してしまう。そしてまた孤独がやってくる。これの繰り返しだ。

「何でまたフランを狂わせたんだ？」

――幼かった彼女に『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という強大すぎる能力は制御できませんでした。いずれ暴走して『世界』の構造まで壊す恐れがあったんです。そこで『世界』は僕を彼女に取り付かせて、暴走する前に彼女の能力の恐ろしさを周囲に知らせて隔離させ孤独で縛ろうと考えたんです。それと、僕は彼女の能力を抑えることが僅かながらできます。結果的に、全て『世界』

の筋書き通りになりました。
「なんか『世界』の手の上で踊らされている気がして嫌だな」
――仕方ありません。相手は『世界』なのですから。
ふうん、と俺は言った。
「そうだ。お前は何でフランから離れたんだ？　それも『世界』の意思か？」
狂気はしばらくの沈黙を置いた。そして、ゆっくりと答えた。
――……これは僕の意思です。僕はずっと彼女と一緒に居ました。そして、彼女の気持ちを、願いを、一番良く知っています。僕はそれを叶えてあげたいと思ったのです。彼女はもう能力の制御ができます。後は僕が離れて周囲に支えてくれる人たちがいれば良かったのです。……そう。僕の役目はもう終わったのです。
ふうん、と俺は再び呟いた。
「なあ、狂気。お前、もしかしてフランに惚れたのか？」
――何を言っているんですか？僕は狂気ですよ。惚れるなんて感情は持ち合わせていません。僕はただ、彼女を自由にしてあげたかった。彼女に幸せになってほしかった。それだけです。
即答か。それを惚れたって言うんじゃないか？まあ、本人が話したくないんなら無理に追求しないでおこう。
「ふぁぁぁ。ねむ」
魔術はオートに切り替えたし、もういっそのことここで寝てしまおう。
――体に悪いですよ。
「大丈夫大丈夫。野宿には慣れてるよ。お休み」
そう言って狂気のナイフを脇に置き、体を横にして眠りに付いた。

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

えーどうも。紅炎です。
『魔術師が紅魔館にて？』どうでしたでしょうか。
レミリアとフランはめでたく仲直り。誠くんはめでたく（？）ぼろぼろ。パッピーエンドです。「意外な展開だ！」って思っていただけると嬉しいです。

それと、狂気は今の所声だけなのですが、十八歳ぐらいの爽やかな青年の声を想像しておいてください。
あと、『魔術師が紅魔館にて』はもう一回投稿します。最期のまとめ的な役割で。

書く事がないので、ここらでおいたまさせていただきます。疑問質問はわからないままにしないで、感想ページから遠慮なくしてください。「これおかしくね？」って言うのも大歓迎です。

さて、最後になりましたがここまで読んで下さった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

ご指摘・ご感想をお待ちしております。

魔術師が紅魔館にて？（前書き）

作者が付けたかった小説のまとめ。戦闘シーン皆無。分からないことは調べましょう。
いつもよりも短めです。
それではどうぞ。

魔術師が紅魔館にて？

俺の身体の現在状況。中の下あたり。日常生活をする上では何の障害もない。

「普通の生活ならな～」

「何かおっしゃいましたか？」

「何も。空耳じゃないですか、咲夜さん」

未だに怒気を纏っている咲夜さんに、口答えできるはずもなく。魔術を行使しながらモップを動かす俺である。

なぜ俺がこんな事をしているのか。その理由は朝から説明しよう。

＊＊＊

俺はベッドの上で目を覚ました。上半身が包帯グルグル巻きの状態で。

「なんじゃこりゃ」

ローブや服を身に着けていない上半身は、首から腰に至るまで皮膚の色が全く見えない。全部真っ白。純白。この紅い部屋ではさぞかし浮いている事だろう。動きづらいからとっちゃお。

包帯を取っていく。体の傷はそのほとんどが治っている。治癒魔術がちゃんと働いてくれたようだ。その代りに体は重たい。物凄く重たい。魔術の過剰行使の反動だ。

どうしようかなー。狂気から魔力を吸い取れるかなー。いや無理か。そういやあいつは今どこにいるんだ？　あ、机の上にあった。なんて考えていると、

「失礼します」

その声と共に咲夜さんが入ってきた。コツコツとこちらに近づいて来る。その手には畳まれたローブと服が抱かれていた。

「綾野さま、おはようございます。お怪我は治ったようですね。御

気分はいかがでしょうか」
「おはようございます。良くも悪くもありませんが体は重たいですね」
そうですか。咲夜さんはそう言ってベッド脇のテーブルに服を置いて椅子に座った。
「お洋服は洗って直しておきました」
「ありがとうございます」
咲夜さんはそのまま黙ってしまった。柔らかな微笑みを口元にたたえて座っている。
あー、何なんでしょうかね。黙っていられても困るんですがね。そんなに綺麗な微笑みを見せられるとドキドキするんですけど！
「綾野さま」
「あ、はい」
咲夜さんは急に夜の話を始めた。
何でも、昨日（正確には今日の未明）に咲夜さんが廊下でぶっ倒れている俺を発見して、パチュリーと一緒に手当てをしてくれたらしい。
曰く『地下室で目が覚めたときは見つけ次第殺そうと思っていました。しかし、お嬢様と妹様が外で楽しそうに遊んでいられるのを見たので思いとどまりました』と言うことらしい。
一歩間違えれば死んでいたようだ。アー、オソロシイ。
「数時間前まで、お嬢様と妹様が仲良く遊んでおられました」
そうか。
「そうですか」
仲良く。これだけ聞ければ十分だ。
「それでは綾野さま、大広間へお越しください。朝食の準備をしてあります」
「ありがとうございます」
咲夜さんが外に出ると俺は服とローブを着て靴を履き、狂気のナイフを持って重い身体を引きずって廊下に出る。そして咲夜さんに

案内されるままに進んで大広間に着いた。
「おはよう誠」
「おはようございます。誠さま」
「えっと、おはようございます」
中にはパチュリーと小悪魔、美鈴さんだけがいた。レミリアさんとフランが見当たらない。
「こちらへどうぞ」
昨日と同じ席に座る。長テーブルにはすでに料理が並んでいた。
「咲夜。レミィとフランはどうしたのかしら」
「お嬢様と妹様はぐっすりと眠っておられます」
「そう」
吸血鬼なんだから朝は起きていなくてもいいと思うけどな。
「それじゃ食べましょう」
食べ物に感謝をしてから食べ始める。うまい。パンやサラダやスープは食べ慣れないものだが中々うまい。しかし静かだ。昨日も静かだったし毎回こんなものなのか？　あー堅苦しい。
そんなことを思いながら黙々と食べ進めていると咲夜さんから声を掛けられた。
「綾野さま。お食事が終わりましたら地下室に来ていただけますか？」
「地下室ですか？」
「はい」
地下室か。何だろうか。まさか、人目のつかない所で殺そうとか考えているのか？な訳ないか。咲夜さんには俺を殺す理由はそれほど無い筈だし、殺す機会は山ほどあったんだし。でも、何なんだろうな。
「御馳走様でした」
食べ終えると早速咲夜さんに連れられて地下室に向かった。食後の後片付けはメイド妖精にやらせるらしい。
鍵のかかっていない扉をくぐって、魔術陣が所狭しと描かれた階

段を下り、開け放たれた扉から地下室に入った。
地下室は明るかった。窓からは昼の日差しがさんさんと入り込み、天井にぶら下がった新調と思しきシャンデリアからも明かりが提供されている。
そして、何百年ぶりかに光に満たされた部屋の中は、汚れていてひどく臭かった。
「う……」
物が焼けた臭い、血と肉が焦げた臭い、ぬいぐるみや人形の燃え残り、壁にこびりついた煤、中央にある大きな血だまり。自分でやっておきながら、思わず鼻を押さえてしまった。
「咲夜さん、この部屋で何をするんですか？」
咲夜さんは少しも嫌そうな顔をしていない。さすがメイド長。これ、ここに来てから何回思っているんだろう。
「ここはもう必要のない部屋です。しかし、このままにしておくわけにもいきません。なので、今からこの部屋をキレイにしたいと思います」
「確かにそうですね」
「綾野さまには掃除を手伝っていただきます」
「なるほど……じゃない！　俺もするんですか！？」
咲夜さんは微笑んだまま言った。
「そうですよ？　汚したら自分できれいにする。当然のことではありませんか」
「いや、確かにそうですけど……」
「お客様と言えどもこれほど汚されて黙っている訳にはいきません。あ、身体の疲れはもう大丈夫でしょう。先程のスープに疲労回復薬を少々混ぜておきましたから。それに先程パチュリー様から魔力回復薬も頂きましたのでお飲みください」
「……」
何だか怒気を感じさせる咲夜さんはいつの間にか持っていた小瓶を俺に押し付けた。

気が付けば疲れが取れた手に渡されたのは、小瓶に入った鮮やかな緑色の怪しげな液体だった。正直なところ、この液体を飲むのはひどく恐ろしい。しかし良すぎる準備に何も言えず、覚悟を決めて瓶のふたを開け、中身を飲み干した。

「……」

「どうかなさいましたか？」

「……いえ」

味は意外と普通だった。少し甘い水と言ったところか。そして、すぐに体の奥から魔力が溢れ出してくる。なかなか即効性のある薬だな。今度来るときに作り方を教えてもらおう。

「それでは綾野さまは魔法を使いながらモップで掃除をしてください」

咲夜さんはいつの間にか持っていたモップを俺に渡した。どこから出してきたんですか。それに魔術を行使しながらってどんな過酷労働！　異議あり！

「何か文句ありますか？」

「異議なし！」

腰抜けと言った君に問う。君は怒っている咲夜さんに逆らえるだろうか。

こうして俺は今、地下室の掃除をしている。

＊＊＊

俺は水魔術で壁を濡らし風魔術でたわしを操って磨きながら、床の血だまりを凍らせてバケツに放り込んでいく。その間に咲夜さんがまだ無事なぬいぐるみや人形を探して回収する。

ベッドは木製だったらしく炭になっていた。これとぬいぐるみや人形の灰を風魔術で一緒に集めておく。床は水魔術で濡らしてからモップで磨く。

この掃除、ものすごく過酷だ。水魔術の大量使用はまだいいとし

て問題は風魔術だ。たわしの一つ一つに風を纏わせて一つ一つを動かすなんてものすごく繊細な作業をしながら床を磨くなんて、一昔前の印刷作業をしながらスクワットしているようなものだ。つまり、果てしなく神経を使う。すり減らす。やがてなくなる。

「綾野さま、たわしが同じところしか磨いていませんよ。」

「うぐっ、すみません」

無理だー！　こんな作業やってられっか！

何て文句が言えたらどれほど素晴らしいだろうか。

はあ……。誰でもいいから、救いの手を差し伸べてくれないかなあ。

――呼びましたか？

「呼んでいない！」

「きゃ！」

「……」

俺は何も聞いてない。そう。咲夜さんの「きゃ！」なんて言う可愛らしい声は聞いていない。だから咲夜さん。真っ赤になりながらこちらを振り向いてもらっても、俺は首を横に振るしかないんですよ。ああ、たわしの動きが物凄く乱れてる。修正。修正。

――あなたたちは本当に面白いですね。

――なんでお前は俺に話しかけられるんだ。ナイフは魔力でコーティングしてあるだろう。

――破りました。

こいつ。何やっているんだよ。

――お前は一応意識体じゃないのか？何でそんなことができるんだよ。

――わかりませんけど、できちゃったものは仕方がありません。

できちゃった、かよ。

――はあ。そうかそうか。で、なんだ？

――あなたに救いの手を差し伸べに来ました。

――体を乗っ取ろうとするだろうから却下。

――もうしませんよ。それに、別に意識を表に出さなくても大丈夫ですよ。あなたの魔術に少し介入させてもらえれば、風魔術のコントロールをしましょう。どうですか？
――お前、そんなこともできるのかよ。
――できるものは仕方がないでしょう。
――まあいい。そんなことをしてお前にどんなメリットがあるんだ？
――ただの暇つぶしです。ナイフの中はすっごく暇なんですよ。
――……少しでも変な動きをしたらお前をすぐに滅却するからな。
――わかっていますって。
モップの手を止めて風魔術のコントロールを狂気に渡す。咲夜さんは俺の掃除の手が止まっても、こちらをちらと見るだけで何も言ってこなかった。さっきの事をまだ引きずっているのだろうか。
風魔術のコントロールを完全に狂気に渡した。これで気が楽になる。
さっさと床を磨いていく。これでも掃除は得意な方なのだ。昔は広い屋敷の中を一人でぞうきんがけさせられることもあったのだ。それに比べれば、この程度の広さをモップで磨いていくなど可愛いものだ。
「……先程よりも速くなりましたね。何かしたんですか？」
「いいえ～。何もしていませんよ～」
咲夜さんは不審そうに眉をひそめたが、そうですか、とだけ言って掃除を進めた。
どれくらい掃除をしたのだろうか。窓の太陽は動かないから、時間が止まっているようにさえ感じられる。感覚が狂ってしまいそうだ。
もうすぐ掃除が終わりだ。狂気は天井の煤を雑巾で拭き、俺は壁の近くをモップで磨いている。そんな時に、反対側の壁を磨いていた咲夜さんが言った。
「誠さま」

「何ですか？」
俺は振り向かずに問い返す。
「……ありがとうございました」
「どういたしまして」
程なくして掃除は終わった。

＊＊＊

「それでは俺は帰ります。と言っても、パチュリーとの約束があるので近いうちにまた来ますけど」
ここは紅魔館の門。咲夜さんが見送りに来てくれている。美鈴さんは庭の手入れをしているらしくここにはいない。
「わかりました。またのおこしを心よりお待ちしております」
別に適当に来て適当に帰るだけなんだけどね。
「ああそうだ。咲夜さん、教えてもらいたいことがあるんですけど」
単なる興味だけどな。
「何でしょうか」
「レミリアさんとフランはどんなふうに寝ていましたか？」
咲夜さんは一瞬目を丸くして、そのあと本当に嬉しそうに微笑みながら答えた。
「ーーーー」

＊＊＊

紅魔館から道なりに人里へと向かう。パチュリーの薬のおかげで魔力はまだあるし、咲夜さんがスープに混ぜた謎の疲労回復薬のおかげで疲れもそれほどない。
「おーい狂気。お前、これからどうする？」
――どうする、とは何ですか？
「そのままの意味だよ。フランの身体から離れて自由になった今、

お前はどうするんだ？」
――どうするって、私はあくまでも意識体です。このナイフから離れることはできませんし、誰かに乗り移ろうとしてもあなたがさせないでしょう？　私はずっとこのナイフに憑りついて存在する。これ以外に選択肢はありません。
要するに媒体があればいいのだろうか。媒体。媒体……か。あれを使ってみるかな。
俺は少し考えてから言った。
「実はな。俺の屋敷に人形があるんだ。ニ十歳前後の男性で、しかも魔術で作られたものだ」
昔々に師匠の一人が趣味で作り遺していったもの。ずっと埃を被って部屋に転がしてある。あのまま腐らせておくのも面白くない。
「乗り移れる可能性はかなり低いが、決して零ではない。やってみるか？」
――僕にそんなことを言っていいんですか？この狂気に。
「魔術師として興味があるんだよ。独立人格による人形への憑依実験さ」
――私が暴れればタダじゃすみませんよ？
「そんなことを言っている時点で暴れる気なんてないだろ。それに、お前が暴れだしてもすぐに止めれるように細工しとけばいい」
――はあ。あなたはお人好しですか。
「よく言われる」
そう。何度も、何度も。
「俺は昔からお人好しなんだよ」
――……
まったく、頑固な奴だ。何をそんなにこだわっているのやら。実験なんて言ったのが気に障ったのか？
「身体を持てばフランと遊べるかもしれんぞ」
――やりましょう。
うわ。即答かい。こいつフランに弱いな。

「そうと決まればすぐに準備をしなければな。帰ったら忙しくなるな」
――その前に約束とやらを果たさなければいけませんよ。
「……そういえばそんなことがあったな」
明後日までにパチュリーに研究書を渡さなければならない。そのためにまた紅魔館を訪ねることになる。
その頃には、レミリアさんとフランはもっと仲良くなっているのだろう。もっともっと仲良く。あの姉妹のように。
――なんだか楽しそうですね。どうしたんですか？
「偶然ってあるんだな、て思ってね」
いや、違うか。偶然じゃない。
「都合のいい物語、だな」
――何を言っているのか全く分からないですよ。
「分からなくていいよ」
――教えてくださいよ。
「いやだよ」
咲夜さんはいいことを教えてくれた。
魔術師はただ笑いながら、狂気は必死に考えながら、人里へと向かった。

＊＊＊

昔々あるところに、大きなお屋敷に住んでいる二人の姉妹がいました。二人はとてもとても仲の良い姉妹でした。
しかしある日、二人はけんかをしてしまいました。その理由はとても小さな事なのですが、その日から二人はとても仲が悪くなりました。お屋敷の中でもお庭でも、二人は絶対にお話しをしませんでした。
いつも二人がお話しする声が響いて明るかったお屋敷は、すっかり静かになってしまいました。お屋敷で働いている使用人さんたち

も、みんな困っていました。
そんな時、お屋敷に一人の旅人がやってきました。お屋敷の使用人さんたちは旅人に言いました。
「どうか、お嬢様たちを仲直りさせてあげてください」
旅人は喜んで、と言ってくれました。その日から、旅人はしばらくお屋敷に住むことになりました。
旅人はいろんな方法で二人を仲直りさせようとしました。裏で仕組んで二人を会わせたり、旅人と一緒に三人で遊んだりもしました。でも、二人は中々仲直りをしませんでした。
旅人はとても困りました。このままでは使用人さんたちとの約束が守れません。
何かいい方法はないかと一人でお屋敷の中を歩いていると、女の子の泣き声が聞こえました。とてもとても小さな声でした。近くの部屋を覗くと、お姉さんが部屋の中で泣いていました。
どうしたのか、と旅人が聞くと、お姉さんはこう言いました。
「私は、本当は妹が大好きなの。早く仲直りしたいの。でも、妹はきっと私を嫌っているわ。だから、仲直りをしようって言う勇気が無いの。そんな自分が情けなくて、悲しくて、泣いているの」
旅人はそうかそうか、と言いました。旅人はお姉さんを慰めてから、またお屋敷の中を歩き始めました。すると、また女の子の泣く声が聞こえてきました。とてもとても小さな声です。近くの部屋を見ると、今度は妹さんが部屋の中で泣いていました。
どうしたのか、と旅人が聞くと、妹さんはこう言いました。
「私は、本当はお姉ちゃんが大好きなの。早く一緒に遊びたいの。でも、お姉ちゃんはきっと私のことは嫌いなの。だから、一緒に遊ぼうって言えないの。これからもずっとお姉ちゃんと遊べないって思ったらとても悲しくて、泣いているの」
旅人はそうかそうか、と言いました。旅人は妹さんを慰めてから、またお屋敷の中を歩き始めました。
旅人は二人を呼びました。二人は相変わらず顔を合わせようとは

しません。そこで旅人は、お姉さんは妹さんのことが大好きだと言うことを言いました。妹さんもお姉さんのことが大好きだということも言いました。

それを聞いたとき、二人はとても驚きました。そして二人は、お話を始めました。謝ったりお礼を言ったり、辛かった事を言ったり楽しかった事を言ったり、たくさんたくさんお話をしました。二人はたくさん遊びました。お屋敷中を走り回って遊びました。お屋敷はとっても明るくなりました。

そして、二人は話し疲れたのでしょう。遊び疲れたのでしょう。二人は手をつないだままスヤスヤと眠りました。

こうして二人はもっともっと仲良くなりましたとさ。

めでたしめでたし。

＊＊＊

――つないだ手を離さずに、眠っておられました。

『魔術師が紅魔館にて』おわり

魔術師が紅魔館にて？（後書き）

お久しぶりです。紅炎です。
前の投稿から大分間が空きました。やっぱり四月って忙しいですね。

さて、『魔術師が紅魔館にて』はこれで完結です。どうでしたか？
作者は書いていて楽しかったのですが、読者の皆様の意見が訊きたいです。

ああ。何を書けばいいのだろうか。分からない。分からないから打ち切ります。

それでは、ここまで読んで下さった読者の方々。ありがとうございました。
ご指摘・ご感想をお待ちしております。

忘れ物。ちょこっと説明。
作中にあった「一昔前の印刷作業」とは何ぞやと聞かれそうなので説明しておきます。
新聞や本などの印刷作業。昔は活版印刷と言って活字の判子を一つ一つ並べて印刷をするため、判子を並べるのに凄まじい集中力を必要としたそうです。

魔術師が妖怪の山にて？（前書き）

『魔術師の細々話』第二弾！！始まります。

※今回はレイアウトを変更してみました。

魔術師が妖怪の山にて？

「そこの人間、ちょっといいかな」
「お断りします」
そうして、人間は走り始めた。
そうして、妖怪は追い始めた。

＊＊＊

同じ山に住んでいる妖怪に「向こうの向こうの山が妖怪の山って呼ばれてて、何だか珍しい薬草があるらしいよ」と教えられた。狂気の人形への憑依実験が遅々として進んでいなかった俺は「何か使える薬草でもあるかな」と思い、実際に行ってみた。
「妖怪の山」というだけあって妖怪がうじゃうじゃ居るんだろうから、準備はしっかりとしていった。獄符は全六種類それぞれ三枚ずつ作った。クナイも十本ほどホルスターに入っているし、媒体の予備も幾つか持っている。ほかにも色々と持った。見た目は普段とさほど変わらないが、中身はかなりの重装備をしていった。
狂気は厳重と魔力コーティーングと束縛魔術をかけて持っていく。
そうして周りに気を配りながら意気揚揚と妖怪の山に入った。最初は良かった。妖怪に出会っても適当にあしらって（逃げて）、攻撃してきたらやり返して（目くらましして）。それなりに上手くやってた。
しかし、天狗が居るなんて知らなかった。
天狗は古くから日本に存在し繁栄してきた。よってその数は多い。多くは一族郎党で一ヶ所に留まり、その地を治めていると聞く。つまり、この妖怪の山は天狗が治めている、いわば天狗の国。そんなところに人間がノコノコと勝手に入ってきたらどうなるだろうか。勿論、侵入者と見なされて追い出される。もしくは攻撃されるに決

まっているだろう。
俺の今の状況は、後者があてはまるのだろうか。

「待たんか！」

森の中。頑張って緩やかな坂を駆け上がっていく俺。そんな俺のすぐ後に、声とともに弾幕が着弾する。

「おわ。冗談にならんな」

着弾地点は弾け、それにれっきとした破壊力――殺傷力があることを物語っている。一発当たったところで死にはしないだろうが、動きを止められるには十分なのだろう。下手すれば腕の一本は持っていかれるかもしれない。

「む。よっと」

そんな恐い恐い弾を避けながらクナイを作り出す。媒体は使っていない。作り出したクナイは垂直に落として地面に刺していく。刺さったクナイは白狼天狗が近くに来たところで、

「ええい邪魔な！」

白狼天狗に向かって放電したり放火したり放水したり、そのほか諸々を放って、とりあえず白狼天狗の飛行を妨害している。このクナイは内部に暗号化した魔術文字を組み込んである。今回は標的感知魔術式と妨害用魔術式が組み込んであり、いうなれば地雷式魔術罠となるだろう。
しかし、この妨害を受けてなお白狼天狗は追いかけてくる。中々にしつこい。

「これならいいかな」

前方の地面に正六角形になるようにクナイを打ち込む。まあ、正六角形というより六芒星だが。その中心に獄符を一枚投げつける。そして、そこから少し離れた場所で止まり振り向く。白狼天狗は止まる気配を見せずに俺にまっすぐ突っ込んで来き、弾幕も放ってくる。が、正面からの弾幕なら軽く避けれる。

さて、先ほど仕掛けたのも地雷式魔術式の一つで、さっきよりも強力な物。と言う訳で、何の警戒もなく突っ込んでくる白狼天狗は

「ぎゃあ！」

よし。上手く引っかかってくれた。

目の前には、木や蔓で手足や胴を絡め取られた白狼天狗。何が起きたのか分からないようで、ただ必死にもがいている。首だけだが。

使った獄符は「木樹の獄」。六芒星によって増強された獄符は、白狼天狗が上に差し掛かった瞬間に発動し、木や蔓が急激に伸びて白狼天狗に絡まったのだ。

「この罠使えるな」

木樹の獄は獄符の中で最も魔力消費量が多いが、これ程の効果に対しての魔力消費量は若干少ない。即興で仕掛けた割にはいい効果を発してくれた。

「人間、我らの山から速やかに立ち去れ！」

「こんな風に言われてもねえ」

体は木や蔓に埋まって見えず、辛うじて頭だけが出ている状態で

命令されても従う気にはならない。むしろ滑稽に見える。ハハハ。
滑稽天狗。

「黙れ。穢らわしい侵入者が……」
「はい、仕事熱心なのはいいが休憩も大事だぞ」

魔力で棒を作り出し、元気な白狼天狗の首筋に一発。面白いように簡単に気を失ってくれた。楽勝。

「さあて。ほかのが来る前にさっさと薬草とって帰るか」

俺は周囲を警戒しながら、森の中を歩き出した。

＊＊＊

「何でこうなるんだ……」

白狼天狗を撒いた後、悠々と薬草を採っていたのだが近くに天狗の気配（さっき覚えた）を感じたので草むらに隠れた。少しすると二人の白狼天狗が話しながらやってきた。若いのと老いた奴だ。その話の内容が、

「侵入者がいるそうですね」
「ああ。茶色の外套を着た黒髪の人間で、若い男だ」
「総本部は発見次第排除しろって言っていましたっけ」
「そうだ。我らの同胞が一人やられた。たかが人間がなめた真似をしおって」
「そうですよね。許せません。全ての天狗で必ず見つけましょう」
「当然だ」

こんなだった。茶色の外套とは、このローブのことだろう。俺の髪は黒い。歳も二十五と若い部類に入るのだろう。
つまり、追われているのは俺。排除されるのも俺。

「何故こうなった……」

原因は何だ？あそこで白狼天狗を撒いたことか？それともここに来たことか？　とすると元凶は何だ。あいつか？　俺が妖怪に山に行くように仕向けたあいつか？　いや、その誘いに乗ったのは俺か。下調べもろくにせずに装備だけ整えてやって来た俺が悪いのか？大丈夫だろうと高を括っていた俺が悪いのか？
ああ、もう現実逃避は止めよう。屋敷に戻って反省会でもなんでも開こう。今は無事にこの山から逃げることだけを考えよう。

「第一は見つからずに逃げることだな」
「だったら空は使えませんよ」
「だろうなあ。空は天狗の庭だからなあ」
「やはりここは地上を隠れながら行くのが妥当かと」
「やっぱりそれが一番いいか」
「それはともかく、何で妖怪の山に入ったんですか？」
「魔術の研究で使える薬草があるかなっと……」

ちょい待て。俺は誰と話しているんだ？

「なるほど。確かに妖怪の山には幻想郷でも珍しい植物がたくさん……」
「……」

声のする隣を見ると、一人の天狗がいた。白狼ではない。

「何だお前」
「あ、私ですか？　私は清く正しい烏天狗の新聞記者、射命丸文と申します。以後、『文文。新聞』をよろしくお願いします」
何だ。新聞記者か……って安心できるか！天狗だ天狗！
「ああちょっと！逃げないで下さいよ。私はあなたに危害を加えるようなことはしませんよ」
射命丸とか言う天狗は、すぐさま逃げようとした俺にそう言った。
「何故に？」
俺はいつでも逃げられるように身構えながら聞いた。
「先日の夜に紅魔館の上空で原因不明の大きな花火が上がりまして、妖怪の山に緊張が走ったんですよ」
確か、紅魔館は麓あたりにあったな。
「それで調査をして報告書がまとめられたんですけど、その中に“前日に紅魔館に人間が入っている。黒髪で若い男。茶色の外套を羽織っていた。翌日に紅魔館から去っている”という報告があったんです」
確か、あの吸血鬼姉妹はどんぱち遊んだんだよな。人間の俺からしたら吸血鬼姉妹の殺し合いにしか見えなかっただろうが。
「私達は今必死になってその人間を捜しています。紅魔館の件の鍵はその人間にあると考えているからです」

「ヘーソウナンダ」
「単刀直入に聞きますけど、あなたがこの人間ですか？」
「エーチガウヨ。」
「さっきから返事が棒読みなのは何故でしょうか」
「ナンデデショウネー」

さあ早く退散しよう。この天狗の背後から面倒事のにおいがぷんぷんする。

「逃げたら白狼天狗を呼びますよ。すぐに。五十人ほど」
「……」

五十人とは厄介な。逃げても逃げなくても面倒なことになるとな。

「取材を受けて下されば、誰にも見つからない逃走ルートをお教えします。どうでしょうか。悪い取引ではないと思いますが」

俺を殺すならいくらでも機会はあったし、白狼天狗を呼ぶ機会も然り。ならばこの言葉は本当か？　ここは射命丸と取引しておいたほうがいいのではないか？

しばしの思案。最終的な結論は、

「……よし。取引しよう」
「では早速……あ」

後ろを振り向く射命丸。しばらく様子を伺ったようにした後、何か“あちゃー”とか“なんでこんな時に来るんだろうなー”とか呟いている。何が早かったんだ？

「どうした」

こちらに向き直った射命丸は思いっきりさわやかな、恐らくは営業スマイルで、

「この取材はまた今度ということで。お元気で～」

と言って、

「あ、おい……」

一陣の風を残して目にも止まらぬ勢いでどこかに飛んで行ってしまった。

「何だ？」

射命丸の向いた方向をよく見てみる。が、何も見えない。と思ったら近くで天狗の気配がした。なるほど。ほかの天狗が来たから退散したのか。

そりゃそうか。「発見次第排除」という命令を無視して取材なんてしているところを見られたらまずいわな。

「さて」

草むらに隠れたとき、周囲には任意発動式魔術罠を仕掛けてある。それをいつでも発動させれるようにする。見つからなければそれに越したことは無いのだが。

「は、は、は」

天狗が近づいてきた。しかし、俺を捜しているような感じはしない。妙に息が乱れている。むしろ何かに追われているような感じがする。ちょっと覗いてみるかな。

草むらの隙間から天狗のほうを覗くと、白狼でない、十二の少年と言っていい程度の天狗が必死にこちらに走ってくる。なんで走っているんだろう。訓練か？

「ブルルルルルル」

いや訓練ではない。後からでっかい猪のような妖怪が出てきた。大方、あれに追いかけられているのだろう。そういえば、猪は雑食だったな。

子供天狗はまだ飛べないのか、はたまた飛ぶことさえ忘れてしまっているのか、律儀に地面を走っている。体力も残り少なそうだし、このままでは猪妖怪に捕まって食べられてしまう。大変だねえ。

別に助けはしないが。

妖怪の世界には妖怪の法則がある。弱い者は消えて強い者だけが残るという法則。つまり、弱肉強食の世界。これを崩すわけには行かない。俺には助ける義理も無いし助けていい道理もない。ここからこっそり傍観して、一人と一体を静かにやり過ごそう。

そう思って草むらでの中で気配を殺して傍観していた。が、

「いや、まずくないか？」

子供天狗も猪妖怪も草むらの中の俺に気づいていないご様子。それはいいのだが、周りが見えていないのだろうか。このままだと子供天狗がこの草むらに突っ込んでくる。

つまり、あの猪妖怪も突っ込んでくる。

結論。俺も襲われる。

「くそ！……そこの天狗！高い枝に掴まれ！」

何も無駄に命を奪うなんて事はしない。殺すのは俺に襲いかかってくる奴、襲いかかろうとする者で説得出来なさそうな奴で、逃げ切れなさそうもしくはその他諸々の事情があるときのみだ。

子供天狗はよほど必死なのか、俺の言葉を少しも疑う様子無く、跳んで近くの高い枝に捕まった。猪妖怪は突然視界から外れた子供天狗よりも、いきなり目の前に現れた人間の俺に照準を定めたようで一直線に突っ込んできた。

罠の有効範囲内だが、この距離なら使わなくてもいける。久しぶりにあれを使ってみるか。

「魔術剣技『裂空双剣』」

全身で構え、両手に剣を作り出し、肩口から真っ直ぐに振り下ろす。切っ先から無数の風の刃が生み出され、猪妖怪を切り刻む。

後に残るのは原形留めぬ肉塊のみ。凄惨としか言いようが無い。自分でやっておきながら直視したくはないな。

この剣技の原理は魔術罠のクナイと同じ。直接『我が独学』の風斬を使わなかったのは、剣から風の刃を生み出すことによって風の刃に「剣の鋭さ」という性質が付与されるからだ。普通の風斬だと肉体を切り裂くほどの鋭さはあまり期待できない。

久しぶりに使ってみたが上手くいった。これからは魔術剣技の修業もしておこう。

とまあ技の解析はここまでにして、子供天狗はどこに行った。先ほど掴まった木を見ても既に姿は無い。

「いない、か。逃げられた」

別にとって食おうなんて考えてないけど。

ともかくすぐにここから離れよう。目立たないように罠を使わなかったとは言え、やはり魔力を感じて天狗が集まってきているだろう。

「侵入者発見！　成敗してくれる！」

思った途端にやって来たのは、少女の白狼天狗が一人。本当に仕事熱心だな。

最初の白狼天狗は無手だったが、この白狼天狗は紅葉した紅葉が中心に描いてある丸い盾と、大ぶりの曲刀を持っている。

「これを使ったら、ここにいること完全にばれるんだろうな……」

でもしょうがないか、と思いながら詠唱する。

「我が独学から、第４章３番『鎌鼬の宴』」

俺の周囲に配置してあったクナイが発光し、一つの大きな魔術陣が出来上がる。そこから竜巻と風の刃が生み出され、周囲の木々を切り裂き、巻き上げ、粉々にしていく。空には竜巻と木の残骸が柱となってそびえ立つ。

やっぱり魔術師は下準備から勝負が始まっている。隠れるときにクナイを配置しておいて良かった。

「うわあ！」

白狼天狗は鎌鼬の嵐の中を必死になって動き回っている。しかし服はだんだんボロボロになっていく。若々しい白い肌が裂けた服の隙間から覗き見える。おお、いい光景。

「……ゆっくりしている暇は無いな。この魔術で周りの天狗も来るだろう」

すっぽりと開けた森の穴から見える空は、俺の心を映したかのようにどんよりと曇っていた。

＊＊＊

降ってきた。そりゃもう盛大に降って来た。世に言う土砂降りって言うやつだな。俺の気持ちも土砂降り。雨に紛れて逃げるのもいいが、地滑りや視界の悪さのデメリットが付いてくる。白狼天狗の能力がどんなものか知らないが、雨の中での視界の良さはあちらの方が上だろう。仕方が無く雨宿りしようと洞窟を捜す。

「ん」

地面に何かが転がっている。何か何かと近寄ってみると、先程猪妖怪を引き連れてきた子供天狗であった。何度も転んだのか泥だらけだ。

「こんなところで寝てると風邪引くぞ。……そんな訳無いか」

息はしている。気絶しているだけのようだ。助ける義理は何も無い。しかしこのまま放っておいて死んでもらうのも目覚めが悪い。さてどうしようか。拾って行くか。捨てていくか。

「……はあ。この性格も直さなきゃな」

結局拾うことにした。

子供天狗を背負って山の中を彷徨うこと数分。使われていない洞

窟を見つけた。中で火を熾して入口に断熱遮音結界を張る。濡れた俺の服と子供天狗の着物を魔術で乾かしたあと、子供天狗はローブで包んで寝かせておく。
火を熾して向かい合うような形で二人が場所をとる。それだけで洞窟の中は手狭になるような広さで、隅々まで明かりは届いて空気もすぐに暖まった。

「何だこいつ」

火の向こうでスウスウと眠っている子供天狗を見つめる。
子供天狗が一人で危険な山の中を走っているなんて、人間だったら家出以外に考えられんな。それとも天狗独自の儀式か何かか？
それに、こいつは白狼天狗ではない。しかし射命丸のような烏天狗でもない。
子供のくせにかなりいい質の妖気を持ってるし、着物にくっついていた子供天狗の物と思われる羽は美しい光沢を持って輝いている。高位の血族で、周りから大切に育てられたのだろう。
この子供天狗は天狗社会の中でも上層に属していると考えて間違いない。

「あーまた厄介なもんに手を出しちまった気がする」

俺の言葉は行く当ても無く宙を彷徨い、火が吸い込んで燃やし尽くした。

魔術師が妖怪の山にて？（後書き）

お久しぶりです。漢字変換じゃ出にくい紅炎です。

「魔術師が妖怪の山にて？」はいかがでしたでしょうか。今回は前回同様オリキャラが出てきます。二・三人ほどです。原作キャラはほとんど出てきませんね。どうしましょう。

また、今回は地の文と台詞の間に、一行分の空白を入れてみました。どうだったでしょうか。小説作法には反しているんですけど、読みやすくはなるんです。これについての皆さんの意見が是非聞きたいです。

最後に、ここまで読んで下さりありがとうございました。

辛口中辛甘口。いずれもオーケーです。ご指摘・ご感想をお待ちしております。

魔術師が妖怪の山にて？（前書き）

本当にお久しぶりです。
戦闘シーンほぼ無し。

魔術師が妖怪の山にて？

――第三波だ。持ちこたえろ！
――結界補助に一人くれ！
――了解！
――前線と後援は交代。
――まず！　人形を使ってきた！
――右は僕がやる！

＊＊＊

「む、うう」

閉じていた目を開ける。固まった体をほぐす。座ったまま寝てしまったようだ。

炎は魔術でつけてあり燃料となる魔力も詰め込んでおいたので、炎が消えることは無かった。おかげで洞窟内は暖かい。

それに、炎の魔力消費率は一定だから魔力の減少量でどれだけ時間が経ったかも分かる。この量だと大体一時間ぐらいか。

「洞窟、だからかな。あんな夢を見たのは。久しいな」

昔、まだ俺が半人前の魔術師だった頃。修行の一環として複数人で一ヶ月間、山篭りをしたことがあった。しかも師匠たちがたまに奇襲を仕掛けてくると言うおまけ付だ。薬草の知識と生存能力、そして戦闘能力を鍛えるための修行だった。

俺たちは最初、木々の上を拠点としていた。修行の終盤に師匠たちの強襲を受けて洞窟に拠点を移したのだが、そこも見つかってしまい最終的には正面からのぶつかり合いになった。ここまでくれば

戦力差が物を言う。俺たちは当然のごとく師匠たちに負けた。洞窟ごと崩されて、三日間動けぬ体となった。

「みんな、どうしているかな」

この世界に飛ばされて以来、誰一人として会っていない。あいつらも魔術を扱う人間なのだからここに飛ばされてもいいはずなのに。

「ま、いいか。最悪あの世で会えばいいんだし」

その時は、また昔みたいに引っ張り回されるのかな。別にそれも悪くは無いが。その時には先に逝った師匠たちもいるだろう。

「さて外の天気は……まだ雨のようで」

寝る前よりは幾分か弱まっているが、まだ外に出られるような降水ではない。もう一息なのだが。

ああ。早くこの怖い怖い山から出て行きたいのに。さっさと止んでくれないかなあ。そうだ。竜巻起こしてあの雲を取っ払うか。いや待て俺。あほか。そんなことをすれば居場所ばれるのは必死。本末転倒ではないか。

結局止むのを待つしかないんだよなあ。不甲斐なし。

「で、こいつはなんだろな」

焚き火の向こうでスヤスヤと寝息を立てる子供天狗。俺の削られる精神を全てぶつけてやりたいぐらい穏やかな顔で寝ていやがる。憎たらし。

「大人気ない八つ当たりってやつか。止めとこ」

とりあえずもう一回寝るか。雨はまだまだ止みそうにないし、子供天狗は起きそうに無いし。
大きな伸びをして眠りの体勢に入る。睡魔がやってくるまで少々思案する。
今日山に入ったのが昼頃。最後に太陽を見た時は三時頃だったかな。それに体感時間を足して……
「もうすぐ日没か……。嫌な時間になってるな」
夜に妖怪の力が増加するなんて常識だ。妖怪の山なんて所は魔境に姿を変える。常にそんな感じだがさらに凶悪になるだろう。
どうやって出よう……
そう考えているうちに眠りの淵へと意識を落とした。

＊＊＊

「何てことを考えながらもっかい寝て起きたらこれだよ」
「黙れ人間！」
首元で凶悪に光る。暖かい洞窟内で唯一冷たい金属。一閃で俺の命を刈り取る。
「そんなもんどこに隠していたのやら」
「黙れと言っている！」
短刀の押し付けが少しばかり強くなったので大人しく口を閉じる。首と体が離れ離れになるなんて冗談じゃない。
「なぜ山に入った」

「喋っちゃいかんのじゃないけ？」
「……」
「いや、分かった。分かったから短刀微妙に動かすな」
子供天狗はすごく渋々といった感じで短刀の動きを止める。疑いの視線がすごく痛いです。チクチクチクチク。
「もう一度聞く。なぜ山に入った」
「薬草採り」
「人数は」
「人数？　俺一人」
「なぜ僕を捕らえた」
「捕らえたと言うより拾った。気分で」
子供天狗一瞬停止後再起動。
「本当か？」
「ほんとほんと。嘘吐いたら閻魔様に舌抜かれるぞ」
「……お前は馬鹿か？」
「情けないが、そう言われても仕方ないだろうなあ」
「……」
あらら。黙っちゃった。話し進まないんですけどねえ。
「とりあえず俺をどうする？　このまま見逃してくれるとありがたいんだけど」
「そんなことさせるか。晒し首にしてやる！」
あー。面倒なことに。どうやって乗り切るかねえ。

「うーん。俺殺すのは止めといたら？」
「なに？」
「実はこの洞窟にさ、魔術かけてあるんだ」
「ま、魔術？」

子供天狗に困惑の色が浮かぶ。これはチャンスかも。

「そ。洞窟ごと周囲を吹っ飛ばす魔術。俺が死んだら発動する様になってんだ」
「そ、そんなもの仕掛けてどうするんだよ！」
「んーまあ安全装置かな。もしくは道連れ用に、ね」

子供天狗の顔がサーと青くなる。何だ。この程度で青くなるのかよ。

「半殺しならいいだろ！　か、覚悟しろ！」

首から短刀が離れた。あほめ。

「そんな悠長なことができるかな」

手に魔力でクナイを作り出し子供天狗の短刀を封じる。もう片手には半輪を作り出す。それで子供天狗の胴を捉えそのまま反対側の岩壁にあてつける。焚き火は瞬時に魔力を吸い取り消して障害としないようにした。
洞窟に暗闇が侵入する。
岩壁に後頭部を強か打った子供天狗は目を点滅させ、その隙に手にある短剣を叩き落とす。短剣はキィンと鋭い音を立てて地面を転がった。

「げほっげほ！」
「甘いなあ。この状況で首を切らないなんて。首を切ってもすぐには死なないのだが」
「だ、黙れ！」

子供天狗がこちらをキッと睨んでくるのが、ぼんやりと見える。暗闇の中の、何となく触れたら切れそうな視線だ。自由な手は半輪を掴み、自由な足は岩壁から離れようと踏ん張る。

「我が独学から第2章3番『暗視』」

両目に『暗視』をかけると暗闇は身を透過させ、鋭利な視線がはっきりと感じられた。
そんな目で睨まれては繊細な俺の心が悲鳴を上げてしまうではないか。それに半輪を掴む手に力を込めなければ。筋力強化するか？
魔術の多重使用は面倒なんだけどなあ。
第一、この子供天狗は殺し合いを知らないのじゃないか？　実戦知識が無いし。それに。

「相手の嘘のひとつも見抜けんようじゃねえ。天狗と身構えてたこっちが拍子抜け」
「嘘……嘘だと！　まさか魔術のことか！」
「せいか～い」

子供天狗の目が見開かれ顔がどんどん赤くなる。今まで計画的に動いていた手足をバタバタさせる。まるで見た目相応の子供が悔しくてジタバタするようだ。子供子供。

「天狗に嘘を吐くとはいい度胸だ！　自分で言った通り閻魔様に舌を抜けれて死んでしまえ！」

こいつ、言っていることはいっちょ前に怖いな。

「幻想郷の閻魔様はかわいいからな。そんなひどい事出来ないんじゃないか？」

映姫様なら長い長い長い長い長い長い長い長い長い長い長い説教をしてくれることだろう。そちらは精神的に死ぬ。

「とりあえず落ち着け。俺はお前達に進んで何かするわけじゃない。こっそり侵入して薬草を採っていくだけだからさ」

「……」

何だ。何なんだその目は。それが問題なんだと言いたげだなあおい。

「貴様はこれからどうするんだ」

「尻尾巻いて逃げるよ。天狗に見つかったし。見つかったら殺されるし」

「……そうか」

やっと大人しくなった。さあ、どうしてくれようかねえ。放したら噛み付いてきそうだし。かと言ってこの体勢も疲れるし。

「貴様。逃げるんだな」

「そうだけど？」

「ならば取引だ」

……取引？

「どこからそんな発想が出て来るんだ？　新聞記者か？」
「違う。そんなものではない」
「じゃあなんだ」

子供天狗は目を泳がせ、口を幾度が開閉し、とてもとても言い辛そうに言った。

「俺も逃げたいんだ。この山から」

＊＊＊

子供天狗は思ったとおり天狗社会の重鎮、の息子だそうな。名前は知らん。それに逃げたい理由は聞かなかった。名前も理由も聞いてどうなるって事じゃない。今必要なのは“逃げたい”という共通意識のみ。

「じゃあお前が“天狗の隠れ道”とやらに案内してくれるんだな」
「そうだ。その代わりに貴様は妖怪どもから僕を守れ。ただし天狗には手を出すな」

自分の身も守れないのに一人で逃げるなんて馬鹿かこいつは。天狗の管理する山の中で天狗を襲う妖怪がいるのも問題か？　もしくは天狗が山の全てを統一したわけではないのか。ややこしい社会だなここは。

「了解了解」

話している間に雨足が弱まった。この調子ならもうすぐ止みそうだ。
岩壁に背を預けて雨止みを待つ。

山奥。洞窟。雨。そして焚き火のはぜる音。
あの時そのままだ。違うとすれば、近くにいるのがあいつじゃなくて子供天狗だということと土砂降りでない事だけ。あの時は夜だったかな？　昼だったかな？　土砂降りだったし激戦の中だったし気にしてなかったな。
覚えているといえば、地の師匠だったかな。洞窟を崩したのは。あの魔術は本当にすごかった。洞窟を崩して俺たちが死なない程度にするなんて。なんて唱えてたっけな。結局は追いつけなかったけど、あの魔術には憧れたっけ。呪文は最後まで教えてくれなかったけど、確か、確か……

「――――この地に宿りし地霊よ。我が名は綾野誠。我が名の下に顕現せよ。其は大地を創造せし一族。地を轟かし揺るがし創造と破壊を行う一族。古の力を呼び起こしたまえ。古の力を示したまえ。大地を意のままに……」
「止め！　止め！」
「……なんだ？」

くいっと顔を上げると、子供天狗は慌てた様に手を突き出して「待った」の形を取っていた。なにしてんだこいつ。

「何したい訳？」
「それはこっちが聞きたい。山を崩す気か！」
「は？」

俺が山を崩す？

「一体どうやって崩すんだよ。俺にそんな力は無いぞ？」
「嘘吐け！　さっきの言葉で大地の精霊がものすごく活発になって、今にも地震が起こりそうだったんだよ！」

は。そんな事ある訳無い。俺の魔力量は少ないんだぞ。あって平均より少し上。そんな俺が、山を崩すほどの地震を起こせる訳無いし。何言ってるんだこの天狗は。

「第一、俺はそんな魔術知らん。知らん魔術をどうやって使えって言うんだよ」

「じゃあさっきの呪文は何なんだよ」

さっき、さっき……？

さっきまで俺は何考えてたっけ。ついさっきの事なのに。

確か、土砂降りの修行を思い出して。師匠たちとの対決を思い出して。その時も洞窟の中にいて。師匠の一人が発動させた魔術で洞窟が崩れて。そのときの呪文が……

「あ、思い出した。地の師匠の呪文か。忘れてたや」

あの時聞き取った呪文を、何度も何度も思い出して復元させたんだっけな。結局は使えなかったけど、今の今まで忘れていた。

「悪い。無意識に唱えてた」

「無意識で山を崩すな！」

「いや、一応未遂で済んだからいいんじゃない？」

よくない！　と喰らい付いてくる（もちろん慣用表現的に）子供天狗は放っておいて、何であの魔術が使えたんだろう。いや、正確には使えそうになっただけど。

幻想郷に入って魔力が強まったか。それとも修行の成果か。

後者であると嬉しい。これからもまた伸びていくのだろうから。前者であったらがっかりだな。得したと思うのが関の山か。

「おい人間、雨がやんだ。行くぞ」

またまた考え事をしている時に、子供天狗が外を窺いながら言った。俺も洞窟の入り口に近寄り、外を確認すると、雨は上がり、しかし相変わらず灰色の雲が空を覆っているのが見えた。

「いっちょ逃げるか」

「付いて来い」

その命令口調どうにかならないのかと、どうにもならないであろう事を考えながら洞窟を出た。

＊＊＊

今向かっている“天狗の隠れ道”とやらは、特定の天狗しか使えない秘密の抜け道だそうな。子供天狗から聞くと、話に聞いただけでは何がなんだか分からない呪術が施されているらしい。

呪術のおかげで通り道に妖怪はほとんど出ず、妖怪の山の中でもっとも安全な道だそうな。しかし入り口がここからは遠く、俺に護衛を頼んだらしい。

「なあ。その抜け道を知っているお前が逃げ出したんなら、探す天狗たちは真っ先にそこを押さえるんじゃないか？」

走る俺の前を飛んでいく子供天狗に聞いた。うらやましい。

「いや、捜索に駆り出されるような下っ端どもは“天狗の隠れ道”の存在自体知らない。それ以前に、僕が屋敷から逃げ出したと気付くにはまだ早いさ」

ぽろぽろと情報をこぼす奴だな。

「余裕綽々だな。何か仕掛けでもしてきたのか？」

子供とは言え上級の天狗ともなれば、強力な術のひとつでも使えるのかもしれない。俺はそう期待した。

「いいや、誰にも見つからなかったんだ。分かるはずない」

期待した俺は馬鹿だった。そして、こいつが何を考えているのか分からない。本当に分からん！

「こっそり抜け出すのに何も仕掛けてこない馬鹿があるか！　馬鹿かお前は！」

我ながら何を言っているのか分からない。意味が完全に重複している。

「黙れ静かにしろ！　……朝まで誰も気が付かないさ」

「見回りの奴に絶対にばれる！」

「まっさか。子供じゃないんだし、今頃、僕の部屋に誰かが入るなんて考えられない」

子供じゃないという言葉には引っかかるが、確かにそうか。わざわざ見回る必要がない……か？

「いや待て」

嫌な予感。

「おまえ、ここから逃げたいとか、屋敷で口走った事はあるか？」
「ああ。ばあやに言った事あるぞ。従者たちにも何度か」
「……前に一回、逃げようとして失敗した事はあるか？」
「ああ。ばあやに見つかってな。その時は何とか言い訳して、逃げようとしたのは隠した」

ああ。こいつは馬鹿だ。今までそれに気が付かなかった俺も馬鹿だ。何で思い至らない。何で気が付かなかった。この二人は合わせて大馬鹿だ。

「おい、進路変更だ。お前が逃げ出している事は、もう確実にばれているだろうし、“天狗の隠れ道”も当然の如く押さえられている。このまま行けば確実に捕らえられる」

俺の場合は、殺される、だろうがな。

「妖怪の山全体には、捜索のために天狗がたくさん飛んでいるだろうよ。俺の事も合わせて、相当な数が出ていると考えていい。一旦どこかに身を隠して、これからの方針を考えるべきだ」
「うるさい」

は？　今なんていったこいつ。

「お前はただの護衛なんだ。ただ黙って俺に付いて来さえすればいいんだ」
「いや、ここは一度様子を見てから……」

途端、子供天狗から妖気が放たれた。大きな、透き通るような赤の、怒りが含まれている。

「黙って付いて来い！　そうすれば逃げられるんだ」
「……わかった」

少し間をおいての返答。
本当は分かってなどいない。捻じ伏せてでも今すぐ止めたい。しかし、今の俺にはそんな事をする力がない。あの妖力のには、正面からでは敵いそうに無い。
悔しい。理不尽だ。肝心な時はいつも、力の差で黙らされる。いつもいつも、間違った事が通される。正しい事は伝わらない。不利な事ばかりが押し付けられて、貧乏くじを引くのはいつも俺なんだ。
悔しい。

「……くそ」

小さく呟いた。
さっきの妖気は、人間の年相応の子供が怒る時とまるで同じだ。精神年齢はまだまだ幼いという事か。
純粋で、透明で、きれいな、赤い怒気。感じる者を魅了するそれは、やはり子供らしい。
そんな怒気を放つ子供天狗を、俺は理不尽だと分かっていても嫌いには、なれなかった。

＊＊＊

「ここが“天狗の隠れ道”だ」

渓谷の底。すぐ後ろが渓流と言う場所。目の前には断崖絶壁のそびえ立つ岩壁。日の光の下で見れば白いであろう壁は、今は静かに眠っている。振り返り渓流を見れば、そこに光を反射する青い流れ

は無く、代わりに全てを吸い込んだ黒い絨毯が敷かれていた。
　こんな所へ勘だけを頼りに飛び降りてきた俺は、いつからこんなに神経が図太くなったのだろうかと真剣に考えた。着地の瞬間は風魔術全開で落下速度を落とし、それでも殺しきれない勢いを、下に向かって放った風雷の獄で無理やりなだめつけると、ローブの所々が焦げてしまった。また直さなければいけない。

「ここ、と言われてもただの岩じゃないか」

　特に術的仕掛けをしてあるようには見えないし、感じられない。

「山に染み込んだ妖気を利用して隠されているんだ。そして、妖気を特定の波長に合わせると……」

　子供天狗は岩壁に静かに手を当て、目を閉じた。何かを始めようだ。俺はその後ろで周囲を警戒しつつ、子供天狗の様子を注意深く観察する。
　ここに来るまでに三回妖怪に襲われ、一度だけ天狗と遭遇した。その時は偶然撒けたが、その時に気がかりな言葉を残していった。
　――――人間め殺す！　……若様！
　前半の言葉で俺の命が非常に危ういと言う最初から分かりきっている事を確認したところで、後半の言葉を脳が認識した。
　下っ端天狗に“若様”と呼ばれる存在。それが今目の前にいて、逃げたいとほざいている。面倒な状況がさらに面倒なんだと言う事が、否応無く視界に入る。
　もういい。もう何も考えるな。とにかくこの山から出られればいいんだ。それ以外考えるな。俺は自分にそう言い聞かせた。

「人間、僕の肩に手を置け」

言われたとおり、子供天狗の右肩に右手を乗せた。
すると、右手を通して何か「波」のような物が伝わってきた。おそらくは、さっき言っていた妖気の波長と言う奴だろう。それが俺の魔力に触れると、魔力も波に合わせるように強くなったり弱くなったりを繰り返し始めた。かすかな強弱だが、子供天狗と同調しているのが分かる。

「付いて来い。手を離すな」

そう言って子供天狗は進み始めた。
眼前はごつごつした岩肌。普通ならぶつかって終わりだろうが、今は違った。子供天狗の姿が岩壁の中に消え去ったのだ。俺の手も食い込んでいる。言われたとおり、進む。
おわおわ。消える消える。無抵抗で岩ん中に突入だー！　なんてどこの子供だ俺は。しかしこれは緊張する。この向こうにはどんな世界が待っている、とか考えているうちに顔が壁に侵入ー！
何も見えない。『暗視』をどれほど強めようと変わらぬ暗闇で、仕方が無いので強さを元に戻した。
暗闇を通り抜けた先は外より仄かに明るく、『暗視』を少し弱めなければならなかった。ここは横穴のようで、丁度渓流に沿って延々と続いているようだ。幅は両手を伸ばした程度で、上を見れば天井は見えない。横穴全体が薄青い物で満たされている。

「お？」

流される力を感じた。丁度上流から下流へ流れる水のように、体全体が押されるような気がする。

「ここが“天狗の隠れ道”だ。水脈の力を利用して、上から下への流れを作ってある。専ら下山のために使われている。流れているの

は水みたいなもんだ」

上のほうには流れていないがな、と子供天狗は言った。へー。便利なのか不便なのか分からんな。

「ここだけなのか？　“天狗の隠れ道”ってのは」

「いや、ほかにも数本ある」

おいしい情報ありがとう。今度からありがたく使わせてもらうよ。

俺と子供天狗は水の流れに従って下流に向かって歩き出した。そのうちに流れは速くなってきて、水に身をゆだねて流されるままとなった。

俺たちの間に会話は無い。元々不干渉を約束していた（俺は何となく破っているが）し、話すこと自体無い。

ただ流され続けてしばらく経った頃。俺は何かを感じた。この先、何かがいる。天狗の妖気は、質の違いはあれ根本は同じであるが、この先の妖気は違う。つまりは妖怪が潜んでいると言う事。ここに潜り込めるという事は、おそらくある程度の力を持っているだろう。

「おい、この先に妖怪が……」

先を流れる子供天狗に注意を喚起しようとしたら、相手はそんな時間を与えてはくれなかった。

「うえ！」

上方から子供天狗が飛んできた白い物の直撃軌道上にいる。そう判断した俺は子供天狗を掴んで、無理やり壁に向かって投げた。壁にぶつかって嫌な声を上げたが気にしない。人間とは比べ物にならないほど、妖怪は総じて丈夫なのだ。

「前方斜め上注意！　飛んでくるぞ！」

次々と飛来する白い物。主に子供天狗を狙っているようで、子供天狗は必死に飛び避け回っている。俺はこちらに飛んでくる分と、子供天狗が避け切れないであろう分を、風斬を撃って止めていく。この不思議空間では上空に停滞するようだ。

白い物が数限りなく飛来するので、試しに作り出した棒で受け止めてみた。

「これは……蜘蛛の糸か？」

白く繊維状の物が大量に棒に絡み付いている。棒を二つに割って引き剥がそうとするが、まったくはがれない。

「捕まったら終わりか。まずいな」

こちらはこの空間ではうまく動けない。相手は移動手段を獲得しているだろうし、射撃攻撃だ。完全に圧倒的に不利。さあ、どうする。

「おい。さっさと逃げるぞ！　牽制しとくからさっさと行け！」

「命令するな人間風情が！」

いい返事だ。

懐から獄符を二枚取り出す。糸の飛来方向を見極め、糸の速度と流れの勢いを考え、相手の位置を極限まで絞り込む。

ここは水脈の力の中。ならば、この獄符の威力は増幅されるはずだ。

「獄符・『洪水の獄』」

定めた方向に向けて獄符を投げつける。獄符は群青の水球をまといながら望んだ方向へ水を切り裂くように進み、ある所で水を爆発させ、洪水となした。

「俺もこの隙に」

抜け道の水には影響が無いようで、流れはまったく乱れない。よかった、よかった。

「さっさとおさらば……」

突如として襲い掛かる殺気。脳裏に鮮明に浮かび上がる、殺された時の映像。体を太い足で貫かれた自分の姿。

「うわおっと！」

壁に手を付いていたのが幸いした。体に回転をかけ、振り向きざまに一閃してやった。動きは外より遅いが、ぎりぎり間に合ったようだ。

耳をつんざくような甲高い悲鳴。その発生源は、俺の目の前にいる大蜘蛛。ぎらぎら光る八つの目玉が俺を捉えている。

冗談じゃない。何でこんなもんと戦わなきゃならないんだ。とにかく場所が悪い。距離も無い。水脈にどんな影響が出るか分からないから、獄符も魔術も下手に使えない。水属性以外の魔術を使えば、水脈にどんな影響があるか分かった物ではない。

大蜘蛛は横穴の中に糸を張り、それを辿って移動している。しかしその糸も、水脈の力のせいかすぐに溶けてしまっている。

しかし、それでも足場があるのと無いのとではだいぶ違う。

勝敗はすでに決している。
必死の抵抗も虚しく俺は大蜘蛛に両足でがっしりと捕まえられ、眼前には大蜘蛛の口。
ここで魔術を使えば、例えば『煉獄の華』でも使えば、大蜘蛛を体内から焼き殺せる。しかし、それでは水脈に悪影響を及ぼす。幻想郷と言う閉じた世界の中で「脈」が乱れると、一瞬で世界が崩壊しかねない。先ほどの『洪水の獄』がぎりぎりだろう。
自分の命と、幻想郷の命。秤にかければ後者に傾く。おかしいと言う奴は笑えばいい。馬鹿だと言う奴は見下せばいい。これが俺の選択なんだ。

「でああーー！」

まあ結局、俺の選択はこの声によってごみにされた。

「ぐむ」

ローブが切り裂かれた。どうやら、大蜘蛛が吹き飛ばされたときに、足の爪が引っかかったらしい。

「一人で逃げるなんて出来るか！」
「馬鹿かお前は！」

ああもう。何のために俺が時間を稼いだというんだ。思えば謎。何で俺はこいつのために戦ってんだ。

「波長を合わせろ！　このあたりに出口があったはずだ」
「……分かったよ！　先に合わせろ。それまでの時間を稼ぐ」

大蜘蛛の姿は視認範囲に入っている。しかし、この距離ならば！

「魔力『苦難林』」

体内で魔力を凝縮させ、暗号化された魔術式を叩き込みつつ体の前に弾き出す。黒い球体となって飛び出した魔力は、爆発して無数のクナイの形を取り、周囲の壁に突き刺さった。

次はタイミングだ。大蜘蛛がクナイの中に入った瞬間を狙え。絶対に違えるな……今だ！

「『苦難林』変化。魔力『槍林』」

無数の苦難が急速に伸び、全長二m程の無数の槍が、大蜘蛛の足に絡まり、数本は胴に突き刺さった。耳障りな悲鳴が鼓膜を震わせる。

俺の魔力は周囲に分散する時に、その場に最も適した力へと変化する特性がある。霊界ならば霊力へ。天界ならば仙力へ。魔界ならば魔力のまま。そして、水脈ならば水属性の力へと、自然に変化するのである。

「手を！」

後ろを流れていた子供天狗の肩に手を置く。大蜘蛛は未だにしぶとく生き、足を盛んに動かしている。

子供天狗から伝わる波長に、俺の魔力の波長が一致していく。もうすぐだ。

そんな時になって、大蜘蛛が白い糸を飛ばしてきた。今動けば波長はずれる。動かずとも当たれば波長がずれる。今を逃せば槍は消え、また大蜘蛛が襲い掛かってくる。

どうなる。どうなる。早く、早く、早く！

突然、ロープが？まれ、体が振り回され、壁に激突……すると思

ったが、そのまま暗闇に入り、程なくして外の空気を肌が感じた。

「ってうおおおい！」

何か知らんけど落ちてるし！　どこ！　ここどこ！

「多分……滝の隣」

そう言うと同時に、上から落ちてきた子供天狗は気を失った。

「待て！　目を覚ませ！　このままじゃ滝に……」

両目にかけた『暗視』はその役割を十分に果たしてくれた。

右を向けば間近で滝を見られる。この滝は信じられないほど大きく、激しい水飛沫のせいで滝つぼはまったく見えない。水の落下速度と俺たちの落下速度はほとんど同じだろうから、やろうと思えば水の粒が見えるんじゃないか？

そんな事を考えながら、自由落下を続け、終結が訪れた。

俺たちの身は行く先を決めず、ただ水に翻弄されるままとなって流れていった。

魔術師が妖怪の山にて？（後書き）

本当にお久しぶりです。
九月には出したいとか言っておきながらこの体たらく。ごめんなさい。
そんな作品をここまで読んでくださりありがとうございます。
またしばらく更新は途絶えますが、投げ出すわけでは決してありません。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

魔術師が妖怪の山にて？（前書き）

弱戦闘シーン。
ほとんど進みません。
前回は滝に落ちたという事で……ね。

魔術師が妖怪の山にて？

「ありがとうございました。命拾いしました」
「良きに計らおう」
「なに、気にせんでええ。人間に天狗。流れてきたら助けないわけ無いじゃろう」
「人間も、ですか。何か因縁があるんですか？」
「天狗は頂点だ」
「人間と河童は遥か昔から盟友じゃよ」

＊＊＊

河童。
日本古来の水妖怪。深い川や沼、湖に住み、近くを通る人間や動物を襲って水中に引きずり込み、『尻の玉』なる物を引き抜いてそれを喰らい殺すと言い伝えられる。また、獲物の肉をそのまま喰らうとも。しかし、凶暴なだけでなく受けた恩はしっかりと返す妖怪であり、接骨秘法や万病治癒薬を河童から受け取った言い伝えもある。好物は胡瓜。そのため、水辺を通るときは胡瓜を身につけて襲われたらそれを遠くへ放るのだと。河童が胡瓜に気を取られているうちに水辺から離れるのだ。
また、水神として河童を祭っている地域もあり、水辺の祠の多くはその類だと言う。

「人間が盟友とは？」

目の前に坐ますのは恩人河童のおじいさん。背の甲羅も頭の皿も無いが、髪が僅かに青みがかっている。濁流から俺たちを引き上げてくれただけでなく、自宅に案内してくれて着替えの浴衣までも貸

してくださった。服が乾くまで、ここで休んでいていいということだ。ありがたし。

洞窟の天井は歩く分に十分な高さを持っている。おじいさんと俺の間には赤々と燃える焚き火がある。それが洞窟内を楽園としてくれている。それに、温かいお茶もおいしい。

「妖怪の山からもう少し山奥に行くと、かつて人間たちが使用していた都市の廃墟があるのじゃが、言い伝えによると、そこに住んでいた人間たちが河童のために明け渡してくれたそうなんじゃ。『幸せになるための技術は、多くの種族が共有すべきで、あなた方ならこれらを有効に使ってくれると信じている』とそのときの人間たちは言ってくれた。なんとすばらしい事じゃろうか。おかげで、そのときを契機に河童の技術は飛躍的に高くなったんじゃ。だからわしらにとって人間は『盟友』なんじゃ」

妖怪の山の裏に都市？　そんな話初めて聞いた。そこに住んでいた人間たちを人里の人間と考えれば自然だろうが、人里にそんな言い伝えはないし、人里ができる前の言い伝えだとしたらさほどの科学力は期待できないが……

「うう蛙はやめろ」

「技術とは、どの程度のものなのでしょうか」

「そうじゃの、ちょっと待っておれ。試作品を持ってこよう」

そう言って、おじいさんは洞窟の奥に消えた。

この洞窟はありの巣のような構造をしている。河童の巨大共同住宅だ。入り口から伸びる廊下は何本にも枝分かれし、両側に部屋がいくつもある。明かりは松明があるが、何も知らない奴が入ったら確実に迷う。迷って迷って行き倒れるだろう。

そう、行き倒れる。

「これからどうしよっかなー」

あれから随分と時間が経った。天狗の警戒態勢は完全に整っているだろうし、『天狗の隠れ道』も押さえられただろう。ここが妖怪の山のどの辺りかは知らないが、途中で天狗に見つかるのは確実。一度足止めされれば終わりだ。次々と援軍がやってきて、あっと言う間に多勢に無勢状態に持ち込まれるだろう。それだけは何としてでも避けなければならない。天狗を一撃で倒せれば良いのだが、天狗を一撃で倒せるほどの威力がある魔術を連発するとすぐに魔力が切れる。これも駄目だ。

「ばあや待って」

「うーん。世に言う八方ふさがりって奴か？　これは本格的に不味いな」

どうしたものか。そこら辺で死んだ振りをすれば勘違いして見逃してくれるかなー。さすがに無理か。そうだ。あのおじいさんに川の中を連れて行ってもらおうか。いや、これ以上お世話にはなれないな。おじいさんなら引き受けてくれそうだけど、妖怪と人間の関係を考えると不味い。

さて、本当にどうした物か。

「馬鹿か」

「うるせえ……こいつ」

先ほどからちょくちょく雑音が入ってきたが、全て後ろで寝ている子供天狗の寝言である。寝言。大きな寝言。邪魔な寝言。始終寝言。「うぎゃー！」って叫んだときは本気で殴ろうかと思った。おじいさんは苦笑していたが。なんでも、孫娘さんも大きな寝言を言

うらしい。それを聞くのが生き甲斐の一つになっているとか。

「かわいくともなんとも無いなあ。こいつは」

「ばあや助けて！」

こいつは一体どんな夢を見ているんだ。思いっきり苦しそうな顔してるし。さっきの「ばあや助けて」はどっちのいみなんだろうな。ばあやに助けを求めている声なのか、はたまたばあやが師匠たちのようなのか。

「なるほど。楽しいな」

その表情からどんな夢を見ているのか考えられる。その寝言から夢でどんな目に遭っているのかが推し量れる。おじいさんは孫娘でこんな事をしているのか。

服が大体乾いたようなのでさっさと着替えてしまう。服を着て腰にホルスターを巻き媒体のクナイを入れる。その上からローブを着る。今ある獄符を確認して、手袋をはめ気を引ききしめた。もう残された手は強行突破しかなく、全てを運に任せるしかない。

後はおじさんの帰りを待ってすぐに出発だと思いながら、子供天狗の寝顔を見ながらによによしていると、部屋の入り口に何かの気配を感じた。ばっと振り向き見る。入り口の向こう。そこには誰もいないが、確実に何かがいる。姿の無い、気配――妖気だけがある何か。松明の明かりと明かりの隙間。より闇が濃くなっている場所。何か分からんが、河童が姿を消せるとは聞いた事が無い。

相手はこちらの出方に対してより妖力を強めた。それに殺気が混じる。肌をチクチクと刺す小さく細かい針。拷問のように続く痛み。

感じるのは恐怖。絶対的強者に目を付けられた弱者。目は見開いたまま瞬きすら忘れ、眼球は乾きの警告を脳へと絶え間無く伝える。あの闇から今すぐにでも何かが零れ落ちてきそうで、それに一瞬で

捕食されそうだ。だが、反撃する暇も与えられそうにない。
束の間の沈黙。そして動き出す。
「ぶあっはっは！　そんなにも見つめられては恥ずかしいのう！」
「は？」
殺気が霧散して妖気が鳴りを潜めたかと思うと、何も無い松明の下からおじいさんの声がした。目を凝らすと、何かが松明の光に反射している。
「この光妖学迷彩スーツを見破るとは、中々いい勘を持っておるの」
何も無い空間から、突如としておじいさんが姿を現した。全身を迷彩柄で覆って、つま先から指先、顔さえもマスクを付けて隠されている。
「これは最先端の光学と妖力利用学を結集して完成した、着るだけで相手の視界から消え去る事のできるスーツじゃ。動力は電気。多少なら力も隠し通せるから、夜這いには最適な発明じゃ。一着いらんか？」
「いえ、遠慮させて……」
待て。姿を隠せる。多少なら力を隠せる。これがあれば天狗も目を欺き通せるんじゃないか？
「それ、もう一着ありますか？」
「おお。同じ物が何着かあるが……」
「二着貸してください。俺とこいつの分です」
大人用しかなくても大は小を兼ねるだ。無理やり着せる。

「二人揃って、誰に夜這いするんじゃ？」

なんだろう。これは突っ込むべきなのか怒るべきなのか、俺にはまったく判断が付かないな。とりあえず、クナイを構えるぐらいしておけばいいのかな？

「いや、冗談じゃ。お前さんらは天狗から追われる身じゃったな。ふざけておる暇は無いか」

おじいさんの口からそんな言葉が出たから、俺はすぐさま剣を創り上げ、おじいさんの首元に突きつけた。天狗から追われていることは話してはいない。それなのにおじいさんが知っていると言う事は、天狗からお触れがあったのか。種族が違うからと高を括っていたが、河童も天狗社会の一部となっていたのか。

「落ち着きなさい」

もう天狗には通報してあるはずだ。先ほどの殺気もそれかもしれない。洞窟の入り口が天狗で固められていれば一巻の終わり。ならばおじいさんを盾にするか。恩を仇で返すような行為だが、背に腹は代えられない。

おじいさんの動きに注意しながら、筒を創り子供天狗の頭めがけて投擲する。小気味のいい音と共に子供天狗が飛び起きる。

「人間風情が何をする！」

「さっさと着替えろ。すぐに脱出する。……すみません。そのスーツのある部屋へ案内していただけますか」

後ろで子供天狗が戸惑っているような気配を感じたが、状況が飲

み込めたのか着替える音が聞こえる。

「落ち着けといっておろう」

「今この洞窟にほかの河童はいますか？」

「……何を言っても無駄か。恩人にさえ刃を向けられるとは、人間は恐ろしいのう」

その言葉が体を貫いた。傷口から血ではない何かが零れてゆく。鋭く鈍い痛みが全身を駆け巡り、留まり続ける。おじいさんの眼光が俺の目を射抜き、全身を縫い付ける。

「今回の騒ぎは俺に非があります。でも、俺はここで死ぬわけにはいかない」

そう言って、俺はおじいさんの眼光を撥ね返す。

そう。俺はここで死ぬわけにはいかない。屋敷で、またみんなが帰ってくるのを待たなければいけない。それまで屋敷を守っていなければならない。思い出を守っていなければならない。

「……いいじゃろう。今ほかの河童たちは出払っておる。天狗にお前さんらを捜すように言われてな」

おじいさんが歩き出した。スーツの在処へ案内してくれるのだろう。

「何がどうなっておるのだ？」

「河童――おじいさんに助けてもらったが、恐らく俺たちの事が天狗に伝わっている。どうにかして逃げるぞ」

子供天狗の顔に焦りの色が浮かぶ。まったく。こっちは真っ青に

なりたいって言うのに暢気な奴だ。
おじいさんの後ろを着いて行く、薄暗く冷たい岩の廊下。脳内の警鐘は鳴り止まず、周囲に目を配りながら進む。
それから何某迷彩スーツを手に入れた俺たちは、洞窟の入り口にいた。だいぶ着膨れをしている。雨は降っていないが分厚い雲が空を覆い、月や星の光を拝む事はできない。下手をしたらまた降ってくるかもしれない。

「すみません……ありがとうございました」
「皮肉にしか聞こえん。さっさと行ってしまいなさい」

心苦しいとかそんなものじゃない。恩を仇で返すとはこんなにも息苦しいのか。生きるためという理由が醜く感じる。卑しい自らに腸が煮えくり返る。
子供天狗もそれなりに感じているのか、押し黙ったままだ。

「我が独学から、第二章三番『暗視』」

暗い外が鮮明に見える。木々の奥に天狗はいない。まだ来ていないようだ。間に合った。

「では……失礼します。」

外へと踏み出した。全方位を警戒しながら。だから、逆に注意散漫だったのかもしれない。
背後から忍び寄る影に気が付けなかった。

＊＊＊

「迷彩スーツは天狗と遭遇した時のみ使う。近くの草むらに身を潜

めて、電源を入れるんだ。やり過ごすまで動くな。わかったか？」

子供天狗は無言で頷いた。おじいさんの事をまだ引きずっているのだろう。

森の中には多くの生き物が潜んでいる。大小の動物や妖怪。それらは今、じっと息を潜めて動かずにいる。石のように、岩のように、初めからそこにあったように、自然に。天狗が殺気立っているためだ。少しでも邪魔をしようものなら消されてしまうのだろう。

「渓谷に出る事ができれば……こっちか」

小さく呟いた。

僅かな水音を頼りに進む。水は高きから低きへと流れ落ちる。渓流に沿っていけば、確実に山から出られる。川沿いだと河童と出会わないか心配だから、渓流から少し離れたところ、つまり渓谷の上を平行して行く事にする。

これだけ注意を払っても、やはり見つかるときは見つかるらしいが。

「おい！　じいちゃんの光妖学迷彩スーツを返せ！」

正面、五メートルほど先に水色髪でツインテールの少女が飛び出してきた。髪と同じ色の合羽らしき上着とスカートを身に着けている。

片手三本、計六本のクナイを創り出し、少女の少し手前に投げつける。少女は対応しきれず六芒星の中へと足を踏み入れた。

「邪魔だ」

河童は水の妖怪。五行説に則れば弱点は土剋水で土。さらに河童

は鉄に弱い。鉄は金属だ。ならば。

「合成獄符・『土石金岩の獄』」

少女を中心に鉄の檻が形成され、土が槍のように突き出して少女の動きを封じる。一瞬の事である。

「こんな物！」

少女の手に握られているのは呪符。

「まず……」

嫌な感じがする。まさか、いや、そんな事できるはずが……

「子供の河童だからってなめないでよね。私だって身を削ればこの位できるんだから！」

「逃げろガキ！」

とっさに叫び、自らも渓流から離れるために走る。

「水符『河童の幻想大瀑布』！」

少女が叫ぶと同時に、下方から重々しい音が聞こえてくる。下を振り返ると、大量の水がこちらに向かって来ていた。少女はとっくに水に飲み込まれ、それでもなお俺たちを飲み込まんと向かってくる。

「うわあ！」

その声を何かと思い前を振り向けば、子供天狗が足を滑らせたようでこちらに滑落してくる最中だった。もう悪態をつく暇すらない。思考する。一瞬で思考回路が焼き切れる寸前まで加熱される。行動する。一瞬で筋肉が悲鳴を上げる。発動する。一瞬で血液が沸騰しそうなほど速く魔術を使う。

「我が独学から、第二章十七番『拡散』第一章十四番『竜巻』第一章番『冷凍』」

子供天狗を受け止め、俺を中心に三重の魔術陣が展開する。

第一層は三メートルほど先。魔術陣の中に侵入する水は拡散され、魔術陣を避けて後ろへと通り抜ける。

第二層は二メートルほど先。魔術陣内で竜巻が発生し、拡散し切れなかった水を撥ね返し、再び拡散させている。

第三層は一メートルほど先。目と鼻の先。魔術陣内に入り込む水を瞬時に冷凍し、氷の壁を作りまた水を防ぐ。

しかし、これほどのしても水は入り込む。術の威力が違いすぎる。今までの疲労が重い。冷凍されきらなかった水が、竜巻の勢いに乗って迷彩服を切り裂く。視界が眩む。拡散の魔術陣が押される。それによって竜巻が乱れる。魔力が消えてゆく。終わらない水。全てを押し流す洪水。獄符とは桁違いの脅威。

「これが、妖怪の力」

恐怖の対象。恐怖によって成り立つ存在。それが妖怪。

「負けない」

恐怖に打ち勝つ。闇を切り開く存在。それが人間。

「越える」

水の先の闇。その先を見据える。その先を切り開く。

あの時の繰り返しは、もうごめんだ。

「風よ。偉大なる旅人よ。世界を流れる者よ。我に力を貸し給え。巨人の息吹を分け給え。」

頭がぼんやりとする。拡散の魔術陣が消えるのが見えた。

「我が名は綾野誠。神代魔術師の末裔。魔術一家陣内家の当主。我が名の下に、偉大なる力を分け給え」

竜巻の魔術陣が消えた。子供天狗の悲鳴が聞こえる。と同時に、自然と右腕が持ち上がる。

「破術『大いなる巨人の息吹』」

ふっと体が軽くなる。周囲から音が消え、体から力が抜け落ちていく。そんな状態がしばらく続き、気が付くと、俺は冷却の魔術陣の真ん中にいた。

「うっなんだ？　洪水は治まったのか？」

「寒い！　寒いから早く出せ！」

全方位が氷の壁で閉ざされているし、背中にはがたがた震える子供天狗がいるし、頭に鈍痛があるし、魔力の大半がないし、とりあえず寒いし……寒い。

「うわさむ！　寒い寒い寒い！」

ここは冷凍地獄。急いでローブの中を探る。確かこの辺りに仕舞ったはず。

「獄符『火炎の獄』」

炎が周囲の氷を見る見るうちに溶かしていく。大量の水蒸気が発生し、中が一時蒸し風呂のようになった。これはこれで地獄。熱い熱い熱い。

「熱い！」

子供天狗の耐久力を疑う一言である。本当に妖怪なのかこいつは。

そんなこんなしながら二つの地獄を越えると、目の前に広がる光景は凄惨な物であった。

木々は根こそぎ持っていかれ、辺り一面泥に覆われている。土もだいぶ持っていかれたようだ。俺たちの立っている所と周りとの段差が一メートルを越えている。少ししか頭の出ていなかった岩々がだいぶ体を出している。

それらの一つに、河童の少女が気絶して引っかかっていた。クナイが押し流されて、獄符も解けたのだろう。

近付いても起きる気配が無い。大方、先ほどの技で妖力のほとんどを使い切ってしまったのだろう。何故そこまでしたのだろうか。

「捕まえるなら、天狗を呼べばよかったんじゃないのか？」

「違うぞ。人間」

ん？　子供天狗が少女の横顔を見ながらしんみりした顔をしてる。何か知ってんのか？

「この娘は恐らく、あの老人の孫娘だ。老人が人間に脅されて服を渡したのを見ていたんだ。それで、この服を取り返しに来たのだろう」

そう言えば、じいちゃんのスーツを返せとか出会い頭に言ってたっけな。

「祖父のために無理をしてまで取り返したかったのだろう。それほど、この服には何か思い入れがあるのではないかな。……祖父想いの娘だ。」

なんか入れ込んでるなあ。まあ、歳も近そうだし、仕方ないか。

「そんな事を言ったって、迷彩スーツは返せん。ほら、さっさと逃げるぞ。この騒ぎを見て周囲の天狗がやってくる」

「……わかっている」

子供天狗はそう言うと、懐から何か細長い物を取り出して、勢いよく岩に突き立てた。さすが天狗。岩に物を突き刺すなんて簡単なものか。

「行くぞ人間」

「さいですね」

なんか知らんが害無さそうだし、放っておこう。

＊＊＊

「人間」

「あまり話しかけるな。声が聞こえるかもしれない」

幸い、未だに天狗とは遭遇していない。しかしいつ何時天狗が接近するかは分からず、そんな時に声を立てていたら居場所がばれてしまう。排除できる危険は排除しなければならない。
それに、先ほどの河童との戦闘で俺の魔力の大半が消え去った。最初の計算よりもだいぶ多いのは、あの戦闘の激しさを物語っているのだろうか。

「すまない」
「は？」

こいつ今なんて言った？

「本当にすまない」
「何言ってるんだお前」

足を止めず、聞き返す。

「僕がいなければ、お前はもっと他の手段で山から出ていただろう。僕が明らかに足手まといなのは分かっている」

よくお分かりで。

「老人を脅す必要も無かった。あの娘もあそこまで無理をすることは無かった」

大体その通りだな。

「僕が我侭で屋敷を抜け出してきたばかりに、お前の命を危ぶめてしまった。」

それは違うと思うけど、まあいいか。

「本当にすまない」

つまらん。

「本当につまらん。それだけか？　なら喋るな」

後ろで子供天狗がポカーンとしているような気配が漂ってくる。何か何やらまったく面倒だなあ。

「最初にお前を拾ったのは俺だ。お前と一緒に逃げると決めたのも俺だ。足手まといなんざ最初っから覚悟していた。老人を脅したのは仕方の無い事だ。あの娘が無理をしたのは娘自身の意思だ」

ふざけていやがる。こいつは。

「割り切れ。全てを背負い込めるほど、お前の器はでかいのか？そうやって他人のことを考えるのは、まず自分の事を全て背負えるようになってからにしろ」

本当に、ふざけてる。

「俺たちは踏みにじって進んでいるんだ。弱気になってはいけない。後戻りをしてはいけない。後悔してはいけない。やり遂げなければならない。そんな覚悟をしろ」

子供天狗は黙ったまま、俺の後ろを着いてくるばかりだった。

魔術師が妖怪の山にて？（後書き）

どうも。紅炎です。
相も変わらず「くれないほのお」と打たないと「紅炎」と出てきません。
さてさて年末の更新となりました。前回から二ヶ月ぐらい経っていますね。
遅筆遅筆ですみません。多分反省はしていません。

今回の登場人物
・綾野誠（主人公・オリキャラ）
・子供天狗（〇〇天狗・オリキャラ）
・おじいさん（河童・オリキャラ）
・にとり（河童・原作キャラ）

いやー。オリキャラが異常に多いなと思いまして。しかも、にとりだってわかるのが外見描写とスペカだけですもんね。これはひどい。
とか何とか言いながらも、これからもオリキャラが出てくる予定。妖怪の山編ではあと一人は確実に出します。
そのうち、「オリキャラ多すぎ！」とかって叩かれそうです。怖い怖い（とか言いながらも改善する気はありません。）
オリキャラがたくさん出てくる分、原作キャラの出番も頑張って考えていますが……あはは。難しいです。
まあ、男性キャラはしょうがないですよ……ね？　男女比的に考えて。

そんな言い訳をする紅炎ですが、来年もよろしくお願いします。

《ご意見ご感想は下記まで》

感想フォームの「良い点」「悪い点」「一言」のうち、一項目以上に一字以上入力したうえで、「感想を書く」ボタンを押してください。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

よいお年を！！

魔術師が妖怪の山にて？（前書き）

前書きなんて無い。
それが前書き。

魔術師が妖怪の山にて？

悪い事とはよく起こる。特に、悪い事は一度起こると続く事が多い。その人に厄が溜まっているからだと言う。厄とは災いの原因であり、幸運と対を成すものだ。厄は災いを及ぼすだけでなく、新たな厄を引き付け幸運を遠ざける。そうして厄は際限無く増え続ける。

「ちょっと」

神官や僧侶が厄払いの任を負うが、祓われた厄が浄化されるわけではない。一時的にその人から離れて周囲を漂うのだ。さすがに神社や寺院などの聖域には存在しないが、その周囲に厄は漂い続けている。では、誰が厄を浄化するのだろうか。

「あなた」

神々である。神々が厄を浄化する。だが全ての神々が厄を浄化できると言うわけではなく、厄を集め特定の神々に引き渡さなければならない。しかしながら、厄を集めるなどと言う行為は忌まれる物であり、進んで名乗り上げる者などはいなかった。

「随分と」

古来より厄を人形に移して川に流し、そうして厄を祓うと言う風習がある。雛流しだ。人形に自らの名前と体の一部を与えることによって分身としたのだ。また、大きな藁人形を背負って集落練り歩き、それを集落の外側に捨て燃やす風習もある。虫送りと言う。これらの風習に端を発して、厄集めの新たな神が生まれた。

「厄いわよ」

＊＊＊

一向に晴れない空。黒々と行く手を阻む草木。天狗が来ては隠れ、去っては進む。そんな事を数度繰り返した。

水に濡れた体は冷え切り、しかし暖を取るための魔力も無い。河童の大洪水を受けてから、異様に体が重いのだ。疲れとは違う、魔術師特有の重さとでも言えばいいのだろうか。何か大規模な魔術――それこそ直接力を借り受ける召喚魔術を行った後のような重みである。先ほどの大洪水でそんな魔術は使っていないし、使う技量も無い。謎だ。

「もしや、歳か」

そんなことあって欲しくは無いが、まさかこの歳でこれを呟くとは思わなかった。人生、何が起きるか分からない。

子供天狗はさっきから黙ったままだ。あんな偉そうな事を言った手前、庇い立てはできないしする気も無い。こいつは根本から考えを改めなければならないだろう。

そう考えながら渓谷の上を進んでいると、前方に人影を確認した。少し開けた崖の先端に立って空を見上げている。天狗かと思いきや天狗の妖気を感じない。河童かと思ってもまた違う。では何かと思い慎重に近付けば、その正体は簡単に割れた。

厄神。

厄をまといながらも神々しい。穢れをまといながらも神聖である。そんな矛盾をはらんだ存在。その周囲には常に厄を漂わせ、近付くだけでその者に災いを成すので、俺はある程度まで近付き足を止めた。

「厄神様とお見受けします。私は人間の魔術師です。妖怪の山には神も坐すのですか」

初めから気が付いていたのか、特に驚いた様子も見せずに人影はこちらを振り向いた。

「人里の人間からすれば妖怪の山は異界。異界との境界線である麓は一番厄が溜まりやすいのよ。私がいても何の不思議も無いわ。最も、私がここまで奥に入ってきたのは初めてだけれど」

外見は十七辺りだろうか。目の前にいる長い緑髪の少女は、何の気も無く答える。ささやかなフリルで飾られる暗い赤をしたドレスが、厄の一文字と共に夜の風に揺らされる。ささやかなフリルで飾られたドレスと同じ色の長い髪留めリボンが、夜風にたなびく。

寒くないのだろうかと考えるのは俺が人間だからだ。人智を超えた存在に人間の感覚なんて当てはまるはずが無い。いや、今はそんな事を考えている暇は無いか。

神ならば天狗と協力している可能性は低い。多くの神々は人が身を守る為に生み出した物であり、多くが人の味方だ。

「ここから麓まではどの程度の距離でしょうか。お教えくださいますか」

別にそこまで固くなる必要は無いわ、と厄神は言った。そう言う訳にもいかないのだが。

「ここは妖怪の山と麓の境目かしら。どちらかと言うと妖怪の山寄りね。もう少し行けばこの渓谷もなくなり始めるから、そこまで行けば麓よ」

「ありがとうございます」

厄神に礼を言い頭を下げる。子供天狗も俺にならう。
ようやく出口が見えてきたんだ。
麓は一種緩衝地帯のようになっている。人間と妖怪の勢力が丁度重なる所なのだ。人間も妖怪も、あそこでは下手に力を振るえない。下級妖怪がそこまで理解しているかは不明だが、少なくともあそこまで行けば天狗の脅威からは逃れられる。
そう思う事で自らを鼓舞し、再び歩き出した。

「ああ、待って」

が、厄神に呼び止められてしまった。

「何でしょうか」

出鼻を挫かれた気分である。いい加減にして欲しい。疲れているのだし命の危機なのだし早く行かせて欲しい。いや待て待て。翌々考えてみれば罰当たりな思考である。俺ってこんなに信仰心が無いのか？　駄目だ駄目だ。魔術を扱う者として神々への信仰心を忘れてはならない。うん、よしよし。

「ちょっとあなた、随分と厄いわよ」

沈黙。
厄い。厄い。眠いとか苦いとか、そんな形容詞の一つだろうか。辞典で見た事は……無いな。初めて聞いたし。厄いか。厄い。なんだか卑怯な気がするのは俺だけだろうか。子供天狗は使い物にならないし、今度慧音辺りに聞いてみよう。

「聞いているの？」

「はっ！　何をでしょうか」
「だから、あなたこのままだとものすごい災いに遭うって事よ。命が危ないわ」
もうすでに大きな災いの中にいて、常に命が危ないんですけどね。そんな事言ったらだめなんだろうなあ。
「だから今すぐあたしが厄を払ってあげましょう。あ。お礼は後でね。人里に私の社があるから、そこに何かお供え物しておくだけでいいわよ」
あなたはどこかの巫女ですか。
「じゃあ動かないで」
まだ何も了承していないのに。
厄神は背筋をすっと伸ばし手を前で揃えて、クルクルと回りだした。無論、宙に浮いてである。うらやましい。
「んん。かなり強情な厄ね。中々引き寄せれない」
厄にも強情も強情でないもあるらしい。もしかしたら時間がかかるのかもしれない。俺としてはあまり一所に留まらず、早く動きたいところである。
俺の周囲に赤く煌く物が現れたと思ったら厄神に吸われるを繰り返す。しばし立っている事数分。厄神は回転を止め、足を地に付けた。
「まあ、取り除ける厄は全て取り除いたわ。気をつけてね」
「ありがとうございました」

その厄がどれほどのものかは知らないが、災いの可能性が減ったのは結果として良いのかもしれない。これからの出来事次第だ。

「それでは失礼します」

今度こそ再び、俺たちは歩み始めた。

＊＊＊

「ご協力ありがとうございます」

誠たちが去った後、厄神の足元――崖の下からそんな声が聞こえた。

「別に、白狼の里にある私の社にお供え物をしておいてくれればいいわ」

それを聞いて苦笑と共に崖下から現れたのは、一人の烏天狗ある。その顔には、何か悪巧みを考えているような笑みが張り付いている。それを見た厄神は、溜息一つ烏天狗に聞いた。

「何を考えているのかは知らないけど、どうせ天魔のせがれの事でしょう？　確かに今のままだと使い物にならないけど、あなたが手を出す必要なんてあるの？　乳母や教育係もいるし、何より父親の天魔がいるのよ。正直言って、でしゃばり過ぎじゃないかしら」

最後の言葉には、厄神なりの警告が含まれている。下々の者が高貴な者の事情に首を突っ込むなとでも言いたいのだろう。

烏天狗がそれに答えることなく、しばらく押し黙った。背に生や

す漆黒の翼を数回ばかりはためかせ、何かを思案するように目を閉じる。その反応に厄神はまたも溜息をつく。

「まあ、もしあなたがあちら側として動いているのなら、私は何も言わないわ。好きにすることね。天魔がどう受取るかは知らないけど」

烏天狗はすっとまぶたを上げる。視界には先ほどと変わらない姿勢の厄神が入る。

「妖怪は変わらない生き物です。しかし常に時は流れ、それに応じて変化は求められます。来るべき時に備えて、彼は変わらなければなりません。今がその時なのです」

烏天狗はじっと厄神を見つめ、ドレスに刻まれる厄の字を見つめる。

「大きな変化が、訪れているのです」

烏天狗の言葉に、そう、とだけ厄神は答え、渓谷を離れて森の奥へ向かう。

「夜が明けるまで、麓付近には近付かないでください。少々荒れますので」

「だいぶの間違いじゃないかしら。天魔が直々に出てくるのだから」

これを聞いた烏天狗が軽く驚いている間に、厄神は姿を消した。

「これはこれは。ばれていましたか」

一陣の風の後、そこに残る者は誰もいない。

＊＊＊

渓谷が緩やかに下り始めた頃、またもや天狗と遭遇した。白狼天狗だ。素早く草むらに身を潜め、迷彩スーツの電源を入れる。すでに何度か繰り返した動きだから慣れたものだが、電気が後どのくらい残っているのかが心配だ。途中で姿が現れるなんて笑い事にならない。

白狼天狗は必ず二人一組で行動している。烏天狗は単独だったりもするのだが、ここに格の違いとやらが見えてくる。今の俺は、そんな白狼天狗でさえ倒せる気がしない。非常に不味い事だ。

「そう言えば、向こうから聞こえた轟音はなんだったんだ？」

白狼天狗の片方が聞いた。

「ああ、さっき報告が来た。人間を見つけた河童が起こしたものらしい。結局返り討ちに遭ったけどな」

「大丈夫だったのか？　そいつ」

「あーいや……」

その問いにもう片方の声は少し躊躇ったように声を濁らせ、言いにくそうに答えた。

「そいつ、岩に引っかかっていたんだけどさ、その岩に天狗針が刺さってたみたいなんだ。それが河童を護るように結界を張ってたんだとさ。針探知にも引っかかったから発見も早かったし。でもその天狗針が登録されていないみたいで、誰がそばにいたか分からないんだ」

「それって、天狗針の不当製作じゃなか。報告義務も破って、その天狗見つかったら相当だぞ」
「それか、人間にやられたのか。どちらにしろ天狗針の不当製作は変わらないか」

河童はあの河童かな。天狗針って言うのは……ああ、あの時あいつが刺してたあれか。効果は使用者ではなく近くにいる者を保護する、か？　それに発信機のような力もあるか。聞いた分じゃ製造方法が天狗の秘法とかになっていそうだな。面白そうだから作ってみようと思ったのに。残念。
そんな事を考えて気が付くと、天狗はどこかに行ってしまっていた。手早くスーツの電源を切り、周囲の気配を探りながら草むらから出る。子供天狗も出てきた。息切れが見られないから特に問題は無いだろう。すまなさそうに頭を垂れているのが不思議であるが。

「すまない」

本当にすまないとか言ってきた。

「今度はなんだ。とりあえず進むぞ」

立ち話なんざ、しとうないわい。

「勝手に居場所を知らせるような事をして」

ああ、そう言うこと。

「確かに居場所を知らせるような事は二度とするな」

まあ、ついでに。

「発見を早めたのは、娘への同情か？」
「違う」
即答か。いい返事だ。
「天狗と河童は同盟種族だ。それを放っておいてはいけない。いかなる状況でもだ」
ふうん。ま、俺としてはどうでもいいけど。
＊＊＊
そろそろ渓谷も終わりという所まで来た。最後の最後できつい斜面に当たったが、回避している暇など無いのでさらっと下りる。足元がぬかるみ、草も雨水で滑る中、俺たちは非常に危なげに下りる。
「そういやお前、飛べないのか？」
上から俺と同じ手順で降りてくる子供天狗に聞くと、顔をしかめてしまった。およ。地雷だったかな？
「まだ飛べない。今訓練している」
天狗なのに飛べないとは。本当に子供だな。ははは、がき。
「今なんかものすごく馬鹿にしただろ」
「いんや。気のせいだ」
せっせせっせと下りる先は暗闇。『暗視』をかけているとは言え、

視界が良くなるのには限界がある。常時的にかけているため眼球から始まり脳へと至る各所への負担も大きい。いい加減に雲が晴れて月が顔を出してくれれば暗視を弱められるのだが、中々願いは叶わない。

「およ？」

「珍妙な声を上げてどうした人間」

珍妙とは言ってくれるじゃねえかこの野郎。認めるが。

「下から声が聞こえて……」

天狗でない。河童でもない。人間……なわけ無いし、厄い感じはしないから厄神でもない。厄神がいるぐらいだから、もしかしたら他にも神がいるのかもしれない。

お互いに近付いてきているようで、段々と声が鮮明になってきた。もう少しで何を言っているのか分かりそうだ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

聴覚認知。

「うん。大丈夫よ。このくらいは上れるから」

「滑らないでよね」

少女の声が二種類。俺たちを捜している風ではない。

「分かってるって」

視覚認知。あちらも気が付いたらしい。

暗がりでよく見えないが、手前には円い柔らかそうな帽子を被った十五辺りの少女。後ろには帽子を被っていない同い年ほどの少女。二人とも似た、と言うよりも瓜二つの顔をしている。双子の神だろうか。

「上からの無礼をお許しください。神とお見受けします。私は人間の魔術師です。麓まで後どのくらいか教えていただけますか？」
「私は豊穣の神。もうここを下りきれば麓が目の前だけど、これから麓へ行くの？　止めといた方がいいんじゃないかな」

豊穣、秋の神か。いやそれよりも、今の警告は何だ？

「何故でしょうか」
「それは……」
「穣子」

豊穣の神――穣子と言うらしいが――の後ろから、制止の色の混じった声がかけられた。それから豊穣の神ともう一柱が顔を近づけて話し合いを始めた。声を潜めているようだが、これだけ近いと、内容の半分は否応なしに聞こえてしまう。
それに今、こっそりと片耳に『集音』をかけたし。盗み聞きは好きでないが、あれこれ言っていられる状況ではない。

「天狗の言っていた人間って、この人じゃない？」
「じゃあ、あの話はしちゃ駄目かな」

気になります。是非してください。

「でもほら。私たち神だから人間の味方じゃない」
「でも最近は天狗からの信仰も馬鹿にならないよ。大体半分だもの。

難しいところね」

神々の厳しい信仰事情が垣間見た気がした。そうなのか。

「麓で決着を付けるんだっけ？　この人の生存確率を考えるとなると……」

「天狗の言うとおりにしておいたほうがいいかもしれないね」

ちょい待ち。

「麓の事は黙っていましょう」

「そうしましょう」

よし。俺もう豊穣の神を信仰しない。そうすると台所事情がやばくなりそうだけど、腹いせである。

「人間。あの二柱は……」

「わかってる」

子供天狗も聞こえたのだろう。俺たちにどんな嘘を言うか相談している二柱神は、俺たちの様子に気が付いていない。

豊穣の神が次に言葉を発するときには嘘が出てくるのだろう。神に対してこんな方法は無礼だが、相手が嘘を付いているうえに状況が状況だ。付き合っている暇など無い。

「麓の川が氾濫しそうで。それで私たちは避難してきたの。急いでいるのなら、水が溢れる前に麓を通り過ぎたほうが……」

「それではお二方、天狗のお掃除にはお気を付け……」

豊穣の神が口からでまかせを吐こうとした時。俺が二柱を適当に

あしらおうとした時。
一陣の風と共に、俺たちの背後に何かが降り立った。
「くそ！」
後ろでに子供天狗を掴み、靴に仕込んである跳躍の魔術を発動させ、二柱の頭上ぎりぎりを飛び越える。
「きゃあ！」
ざまあ。
「人間！　烏天狗だ！」
「そんなの分かってら！」
とにかくここを下りきらなければ、身を隠す障壁が無い。
低い跳躍を続ける。あまり高々と飛ぶと地面との距離が長くなり、結果として天狗の庭に入ってしまうからだ。
だいぶ下りた頃、背後から風を切る音が聞こえた。同時に背後の土や石が飛び散る。まあ、大体予想は付く。
「風斬と同じようなもんか。いや、あれよりも切れ味は鋭い」
厄介なものだ。巨大なかみそりが十何枚も飛んできているって事か。それがさらに増えるとは。
斜面を下りきった所で子供天狗を落とす。
「何をするか！」
「自分で走れ」
「下ろし方があるだろうが人間！」

そんな暇あるか。
かみそり攻撃は未だに続いているが、よほど命中率の悪い攻撃なのか、それとも使い手の腕が悪いのか、俺たちにはかすりもしない。
森の中に入って少し走ってから俺たちは草むらに隠れ、急いで迷彩スーツの電源を入れた。まともに遭遇してしまったのは失敗だが、これで撒けるはずだ。
俺たちに少し遅れて烏天狗がやってきた。しかし、特に俺たちを見失って焦燥している様子は無い。非常に落ち着いている。何故だ。
「河童たちが姿を隠せるスーツを開発した事は、先ほど天狗に伝わりました。そのスーツが多少なりと力を隠せる事も」
ばれたか。だが、だからと言って俺たちの姿が見えるようになるわけではない。この状況が変わるわけではない。
「あなた方は恐らく、長く走るよりもすぐに隠れて私をやり過ごす方が得策と考えているのでしょう。そして、二人がはぐれる可能性を考慮して、姿を隠している間は動かないようにしている」
読まれた？　しかしその程度なら……
「私があなた方を見つける方法は三つ。一つ目は虱潰しに探し回ること。これが悪手だとは言うまでもない。二つ目は電気切れを待つこと。しかし河童たちは優秀なので、八時間は保つ電源も開発していました。私たちはそれほど長く待っていられるほど気は長くありません。そして」
辺りがざわめき始めた。木の葉が身を擦り合っている。風だろうか。

「違う……」

己にだけ聞こえる程度の声で、ポツリと呟いてしまう。

風であることには相違ない。しかし、自然の風ではない。自然の風が、こうも一定の速さで長時間続くのだろうか。

「そして三つ目」

烏天狗の妖気が高まっている。もしやと思うが、これはもしかするともしかするかもしれない。不味い。非常に不味い。

「掴まれがき！」

俺はスーツの電源を切り、子供天狗のいた方向へと腕を伸ばす。同時に剣を創り出し地面に深々と差し込んだ。

「この森諸共」

子供天狗が腕に掴まる感触を得た瞬間に腕を引き付け、剣に体重をかけるように膝を突いて詠唱する。

「多重展開！」

「吹き飛ばす！」

烏天狗の妖気がまとめられる。

剣を中心に魔術陣が数重に展開される。

「我が独学から第一章十四番『竜巻』！　第二章十八番『遮断壁』！」

「暴符『風竜召喚』」

俺たちを吹き飛ばさんと、四方八方から竜巻が襲い掛かる。

魔術陣上に瞬時に竜巻と黒く薄い壁が何重にも形成される。

外周に設置したこちら側の竜巻はすぐに消え去り、『遮断壁』のみで防いでいる状態だ。『遮断壁』を打ち破らんとするのは、動き回る竜巻はもちろん、それに巻き上げられた石や倒れた木々も凶器である。風の刃と共にじりじりと『遮断壁』を、俺の魔力を削っていく。

不味い。このまま続けば確実に『遮断壁』が破られる。そうすれば、人間と天狗の合わせひき肉の完成だ。そんな死に方望んじゃいないってのに。

そう思いながら絶えず続いていた轟音が止んだ。嵐があまりにも唐突に終わったのだ。最後に握りこぶし大の石が障壁に当たり落ちると、竜巻はぴたりと収まり、辺りは夜の静けさを取り戻す。見渡すと地面は深々とえぐれ、近くの川から水が流れ込んできている。先ほどまでは鬱蒼とした森であったはずなのに、今はその面影すらない。岩をも全て砕いてしまったのだろうか。河童の時も凄惨だったが、ここまで来るとなんと言い表せばいいか分からなくなる。

「ぐふ……無理させやがって」

「おい！　しっかりしろ人間！」

子供天狗が激励してくれているように聞こえちまう。これは相当不味いな。

剣を短槍に変え、それを支えに膝を伸ばす。異様に膝が笑う。先ほどの障壁魔術で全ての魔力を使い切ってしまったようだ。魔力の過剰消費のせいで体のあちこちにがたが来ている。もうなす術が無い。

「もう術は無い、と言ったところですか」

相手の烏天狗も分かっているようだ。何か分からない粉塵で見えない向こう側から声が飛んでくる。

「人間、おとなしく殺されるが良いでしょう」

「お、おい人間！」

「うるせえ」

そんな簡単に諦められるか。

「粉塵立ててくれてありがとうさん！」

竜巻の勢力外にあった森めがけて走り出す。短槍は邪魔だったから消した。何とか自立できるから大丈夫だ。暗視がだいぶ弱まっているが、特に支障は無い。もう視界がかすんでいるのだ。

足元がふらつく。何度もつまずきそうになる。鉛を引きずっているようである。

走っているつもりだが、いつの間にか子供天狗に追い抜かれてしまっている。これは本当に終わりかもしれない。

「おい、先に行って逃走経路を確保しろ。できる限り進め」

「お前なに言って……」

「行け。逃走経路の確保は重要事項だ。状況をよく考えろ」

子供天狗はそれでも先に行こうとしない。無駄に聡い。そして甘い。少しの間一緒にいただけの人間に情を移すか。さっさと一人逃げ切ればいいものを。

「一人だけでも逃がそうだなんてさせません」

もう少しで森の中という所で、後ろから強風が牙を剥く。普段なら耐えられる程度の風力に、今はあっけなく吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。そのおかげで森の中には入れたが、身を隠すどころか木にもたれ掛かるだけで精一杯だ。

「惨めですね」

「うるせえ」

音が遠い。

視界には黒々とした羽を生やす烏天狗の輪郭姿。そして片手に握られる羽の団扇が。俺の首を取る獲物か。

ああ、空の雲が幾分か薄くなってきた。これなら月が見えるかな。そう言えば、あの姉妹はどのくらい仲良くなれただろうか。月の下、笑顔で遊んでいるだろうか。

あ、そうか。

「止めろ！」

子供天狗が俺と烏天狗の間に割って入った。両手を広げ、まるで俺を護るかのように。

「どっか行けがき」

「そうです。どっか行って下さいがき」

「僕はがきじゃない。天魔総統の息子、悠蘭だ！　この人間に手を出す事は僕が禁じる」

へえ。こいつは天魔の息子か。その割には弱っちいな。本当なのか？　というか、今頃そんなこと言ってもな。それに、天狗社会がよほどしっかりしているなら……

「それがどうかしましたか」

烏天狗の冷徹な一言に、子供天狗改め悠蘭は明らかに震えた。

「あなたが天魔様の息子という事はとうに知れ渡っております。ここまで事態を大きくしておいて、今更命令するというのも筋違いというものです。さらに言えば、あなたは天魔様の息子でしかありません。天狗社会において、何の権限もございませんでしょう？」

は、正しすぎて何も言い返せないな。仕方が無い。

「どけがき」

笑いながら言ってやるよ。

「これが、集団社会と自然の摂理だ」

悠蘭は両腕を力なく落とし、ずるずるとその場に座り込んでしまった。どけって言ったのにな。あ。烏天狗が首根っこ掴んで俺の後ろに投げた。そんな扱いでいいのか？

「さあ、処刑の時間ですよ。愚かで浅ましい人間」

そんな不気味な紡ぐ声。今落ち着いて聞けば、どこかで聞いた事があるような。

「くっなるほど。お前さんか」

俺の言葉に烏天狗は目を細めた。いや、そんな気配がした。視界

が無いのだから仕方無い。

「私の名前は射命丸文。最も人里に近い烏天狗。情けです。罪人の名前くらい聞きましょう」

先手を打たれた。面識の無いはずの俺と射命丸。俺が先に射命丸の名前を言えば、周囲にいるであろう他の天狗が怪しむ。それで少し面倒な事にしてやろうと思っていたのに、賢い奴だ。

「俺の名前は綾野誠。しがない魔術師さ」

「そうですか」

射命丸は何の感慨も無く、機械的にそう呟いた。

「一つだけなら遺言も聞きましょう。どうぞ」

「は、遺言なんざねえよ。屋敷には俺一人だ」

くそ。口が軽くなってるな。

「寂しい人ですね」

ほっとけ。

「それでは孤独な魔術師よ」

射命丸が団扇を振り上げる。

「さようなら！」

そして振り下ろし。

「何で」

俺はそう呟き。

「な！」

甲高い音を立てて。

「忘れていたんだろうなあ」

団扇は短刀に受け止められた。

――まったく、その通りです。

雲は晴れ、月光の元、狂気の短刀はその姿を現した。

魔術師が妖怪の山にて？（後書き）

どうも。紅炎です。
前回投稿分で今年終わりみたいな雰囲気をかもし出しておきながらの投稿。
指が止まらなかった、という名の現実逃避。
大丈夫！　リアル見つめています！
それだけかもしれない。

特に書くこと無いんでここらで失礼！

読んでくださりありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5428r/

魔術師の細々話

2011年12月29日10時56分発行